

佐久間象山門人の確定に関する先行研究の検討 —井上哲次郎・宮本仲の紹介した「及門録」の分析—

坂 本 保 富

はじめに—問題の所在と本稿の研究課題

象山門人の判定基準となる「門人帳」を巡る諸問題

信州松代藩の佐久間象山(1811—1864)が提唱し実践した日本近代化の思想「東洋道徳・西洋芸術」(Eastern Moral, Western Science)は、黒船来航(1853)以後、日本の歴史上、未曾有の内憂外患に激動する幕末動乱の時代を生きる多感な青少年たちに、広く深い共感と希望を喚起した。象山の日本近代化の思想は、彼自身が江戸に開設した私塾や地元信州での公私に亘る教育実践を媒介として、全国規模で普及し拡大していったのである。

はたして、象山の思想を担った門人には、どのような人物がいたのか。彼らは、いかなる分野で、どのような活動を展開したのか。象山の「東洋道徳・西洋芸術」という思想世界を学び取り、それを幕末維新期以後の日本近代化過程における各界各分野に、いかに展開し具現化していったのか。日本近代化に関する象山思想の歴史的意義を理解するには、象山に師事した数多の門人たちの具体的な活動の軌跡を明らかにする必要がある。

だが、これまで象山門人の実態に関しては意外に不明瞭であった。それ故、様々な問題点が潜在していたのである。最大の問題は、軍事科学系洋学と理解されている象山の私塾の場合、同時代に展開した緒方洪庵(1810—1863)や伊東玄朴(1801—1871)、福沢諭吉(1834—1901)などの医学系や語学系の洋学私塾の場合のよ

うに¹⁾、門人自署による信憑性のある門人帳史料(原本)が見当たらず、従って象山門人であるか否かを判断する決定的な史料的根拠に欠け、極めて曖昧模糊としていたのである。

これまでの一般人の歴史的関心の次元ではもちろん、歴史学その他の学術的世界においても、象山門人といえ、勝海舟(1823-1899)、吉田松陰(1830-1859)、坂本龍馬(1835-1867)、橋本左内(1834-1859)、河井継之助(1827-1868)、西村茂樹(1828-1902)、加藤弘之(1836-1916)、津田真道(1829-1903)、小林虎三郎(1828-1877)など、遺された象山側の関係史料だけでなく、門人側の関係史料からも確認できる、極めて短期間における一部の著名な門人たちが、広く一般に紹介され知られてきた。しかしながら、象山が江戸に開設した私塾と地元松代藩における公私に亘る教育活動全体の期間は、何と天保6年(1835)から元治元年(1864)までの約30年間にも及ぶものであった。従って、博学多才な学識を有した象山の多種多様な門人は、全国規模で様々な分野に存在し、その数は相当数に上るはずである²⁾。

有名無名を問わず、全国各地に拡散した象山門人分布の全体像を把握するには、正確な門人帳が遺されていなければ極めて困難なことである。しかしながら、門人全体を記録した象山門人帳の「原本」なるものは、象山没後150年以上が過ぎた現在に至るも、誰一人として確認した者はいない。筆者も、半世紀近く象山研究に従事し、象山研究の基礎となる象山門人の全体像を解明すべく、様々な史料に当たり「原本」を探し求めてきた。だが、結局、「原本」の存在を信じて探索することは、願望が生んだ「幻の門人帳原本」を追い求めることであり、実は「原本不在」が歴史的事実であったのではないか。このような仮説に辿り着いたのである³⁾。

だが、「原本」を書写した「原本の写本」と思われるような象山門人帳「及門録」が存在することが判明し公表されていたのである。昭和戦前に刊行された象山史料集の決定版ともいべき増訂『象山全集』全5巻(信濃教育会編、信濃毎日新聞社発行、昭和9-11年、1934-1936)に収録され公開された「訂正 及門録」(以下、「訂正」と「及門録」との間を空けず、「訂正及門録」と表記する)の存在である。だが、実は、これより20余年も前に、膨大な象山関係史料を収録した最初の『象山全集』全2巻(信濃教育会編、尚文館発行、大正2年、1913)

が、「象山没後五十年記念」として出版発行されていたのである。両全集の相違点、即ち増訂版は、初回版の全集にどのような史料を増補したのか。この点につき、増訂版では次のように説明している。

- 一 前版は、大正二年十月の象山先生五十年祭を期し、程を急ぎて出版せるが為に、原稿の査閲印刷の校正等に於て、遺憾の点多多あるを免れざりき。よりて今回これに訂正を加へ、且つ更に新材料を蒐集して之を増補したり（下線筆者、以下同様）。
- 一 今回増補せるは、四書経注旁釋（大学之部）と、新に蒐集したる詩文、和歌、書簡とにて、就中書簡の数は頗る多きに達せり。また此の他に、象山先生小伝、及門録、象山先生史料雜纂、各種索引とを加へたり（「及門録」以下は之を第五巻に附したり）。⁴⁾

初回版の全集には、象山門人帳史料とみられる「及門録」は収録されていなかったのである。その理由は、編纂過程で「及門録」に関して、はたして象山門人帳の「原本」であるか否かの真偽の判断を含めて、当時の象山研究者の最高集団である全集の編纂委員会は、綿密に分析し検討した。その結果、当時、象山門人帳として出回っていた「及門録」は「原本」と呼べるような代物ではなく、様々な問題点を内在する史料であることが判明し、全集刊行の時間的制限もあって収録を断念した、という経緯があったのである。

そのような初版の編纂過程を経て、新たな増訂版『象山全集』が編纂・刊行されるに際しては、同第5巻に「訂正及門録」が収録されるに至ったのである。増訂版『象山全集』に門人帳「訂正及門録」が収められ公開されると、以後、昭和の戦前戦後を通じて現在に至るまでの長きに亘り、歴史研究者・洋学研究者・思想史研究者（儒学研究者）たちは、「及門録」に付された「訂正」の意味を全く問わず、あたかも「訂正及門録」が象山門人帳の「原本」であるかのごとくに使用してきたのである⁵⁾。

「及門録」の原本は存在せず—「訂正及門録」は象山没後に門人作成の史料だが、後に詳細に論証するが、「訂正及門録」は決して「原本」ではなく、歴

史研究の史料として多くの問題点を内在している問題の書なのである。とは言っても、象山門人の解明には、なおも有効な史料の一つとして相対的な価値を有する史料であることは間違いなかった。そのような状況の中で、「訂正及門録」が問題を内在する史料であることを確認し、「原本」ではないことを自覚した上で活用するという研究者は、残念ながら皆無であった。

このような無責任な研究状況に疑問を抱いた筆者は、昭和40年代の末頃から、増訂『象山全集』に収められた「訂正及門録」の詳細な分析に着手し、そこに内在する問題点の詳細な析出に取りかかった。今から40年以上も前のことである。以来、「訂正及門録」に記載された門人と思われる467名の存在の確認と彼らの活動軌跡の調査に、膨大な時間を費やしてきた。象山思想の研究の一環としての象山門人研究―「訂正及門録」の研究に着手して20年近くが過ぎた頃、ようやく問題の全体像が把握できてきた。そこで、日本歴史学会編『日本歴史』や信濃教育会編『信濃教育』などに象山門人帳「及門録」の理解と使用をめぐる問題点に関する研究成果を発表したのである。「訂正及門録」は、とても象山門人帳の「原本」などといえるものではなく、そこには様々な問題点が多数、存在するという事実を、具体的な分析結果の事例をあげて提示したのである⁶⁾。

以来、筆者は、確かに「及門録」は象山門人の氏名その他を記録した門人帳関係史料ではあるが、決して「原本」ではなく、また「原本」が存在してそれを書写した写本でもありえないこと、即ち象山門人帳「及門録」の「原本」そのものは存在しない、との確信に至ったのである。そのような大胆な仮説を立証する史料の根拠として、実は幾種類もの「及門録」が存在するという事実、及びそれら「及門録」相互における問題性を比較検討し、門人その他の記載の異同を明らかにした。特に「原本」の写本と考えられている「毛筆写本」である京都大学附属図書館所蔵『及門録』の筆跡の問題―明らかに複数人が書写した特定年月ごとの砲術繰練出席帳の合冊で構成されているという事実―を析出したのである。なお、筆者が入手して比較分析してきた「及門録」とは、下記の5種類である。

①宮本 仲著『佐久間象山』所収「及門録」(岩波書店、昭和7年出版)

②増訂版『象山全集』第5巻所収「及門録」(信濃教育会発行、昭和9―10年)

③京都大学附属図書館所蔵『及門録』(毛筆写本1冊、書写年月不詳)

- ④信濃教育博物館所蔵『及門録』（毛筆写本1冊、昭和9年12月書写校了）
- ⑤国立歴史民俗博物館公開『佐久間象山門人帳データ』（第116集、2004年）

上記の5種類の門人帳史料「及門録」は、門人名をはじめ記載内容に強い共通性を有する。だが、それ以上に看過し得ない相違点とそれ故の問題点が多く存在することも指摘してきたのである。

現在までの筆者の研究結果では、5種類の「及門録」が存在することが確認でき、筆者は、それらを史料ごとに個々に内容を分析し、また史料相互の比較校合によって析出できる記載内容の相違点や問題点をも具体的に指摘してきた。その研究成果が、以下の論考である。本稿の理解に供するために、否、本稿の研究論文としての存在意義の理解を得る前提として、これまで発表してきた各種の象山門人帳「及門録」に関する研究成果を、次に記しておくこととする⁷⁾。

- ①「象山研究史上の問題点—特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って—（上）」（信濃教育会編『信濃教育』第1229号、1989年4月）
- ②「象山研究史上の問題点—特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って—（下）」（信濃教育会編『信濃教育』第1230号、1989年5月）
- ③「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者—幕末維新时期における『東洋道徳・西洋芸術』思想の教育的展開—」（日本歴史学会編『日本歴史』第506号、1990年7月）
- ④「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）—京都大学附属図書館所蔵「及門録」の内容と問題点—」（信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年3月）
- ⑤「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅱ）—信濃教育博物館所蔵「及門録」の内容と史料の意義—」（信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年3月）
- ⑥「国立歴史民俗博物館公開『佐久間象山門人帳データ』の誤謬—象山門人帳「及門録」の比較研究（Ⅲ）—」（平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第1号、2014年3月）
- ⑦「青木歳幸氏の京都大学附属図書館所蔵「及門録」の解説紹介とその誤謬—

象山門人帳史料『及門録』の比較研究（Ⅳ）－」（平成国際大学『平成国際大学論集』第19巻第2号、2014年12月）

- ⑧「最新訂正版『象山門人史料』の提示－象山門人帳史料「及門録」の比較研究（Ⅴ）－」（平成国際大学『平成法政研究』第19巻第2号、2015年3月）
- ⑨「日本近代化と『東洋道徳・西洋芸術』の思想－開国進取を説く象山思想の形成と展開－」（平成国際大学『研究所論集』第15号、2015年3月）
- ⑩「日本近代化と幕末洋学の新展開（Ⅰ）－欧米外圧による西洋軍事科学の拡大現象－」（平成国際大学『研究論集』第21号、2017年2月）
- ⑪「象山の思想基盤形成における父親の武士道教育の意義－幕末期における『東洋道徳・西洋芸術』思想成立への主体形成－」（平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第22巻第1号、2017年11月）

本稿の研究課題－「及門録」に関わる象山の教育活動期間と教育内容の問題

幕末期も最末期の元治元年（1864）7月に、象山が京都で斬殺された後、明治の新時代に生き残った勝海舟を中心とする門人たちは、同じ恩師に学んだ同門同窓の人々に関する関係史料を蒐集・分析・整理して1冊の門人帳にまとめあげた。その門人に関する史料、それが明治以降、世に出回ったと考えられる。だが、昭和になって各種の門人帳は統一される。それが増訂『象山全集』に所収の「及門録」である。しかし数ある「及門録」の中で、それだけが、「訂正」を冠して「訂正及門録」と記されているのである。それ故、その他の「及門録」には全て副題や注釈などは一切、付されておらず、一見すると「原本」と見紛う史料なのである。この事実を認識した上で、以下の本稿においては、増訂版「訂正乃門録」（以下、全集版「及門録」と略記）も含めて、全て「及門録」と表記を統一する。

重ねて記すが、前述の5種類の「及門録」の全てが、象山門人帳の「原本」とは判定できない史料である。だが、それらの史料によって、象山門人の全体的な概要を把握することは十分に可能である。その意味で、いずれの「及門録」も歴史的価値のある史料であることは認めなければならない。

叙上の象山研究上における門人帳問題の指摘を踏まえて、以下の本稿の研究課題の第1は、〈「及門録」の原本は存在せず、それは象山没後の明治に、門人たちが作成した象山門人録に関する作品である〉という筆者の仮説が事実であること

を、各種の関係史料の分析を通して論証することである。

同史料は恩師象山の没後（元治元年、1864）、幕末動乱期を経て維新政府が成立し、さらに明治期を経て大正2年（1813）に、象山門人関係者が、象山関係史料を蒐集し編纂して急ぎまとめあげ最初の全集（上下2巻）を刊行した。さらに、初版の同全集の不備を訂正すべく、新発見史料の大幅な増補を図り、昭和の戦前期（1934-1935）に増訂『象山全集』（全5巻）として刊行したわけである。

後者の増訂版全集の中には、新たに「及門録」が収録された。同史料は恩師象山に対する門人や関係者たちが、恩師に対する報恩感謝と恩師の国家人民に対する多大な貢献を顕彰して後世に遺すべく、「門人たちによる門人たちを記録した門人帳」であることを史料的に証明し、かつ、同史料の歴史史料としての有効性と限界性をとを闡明すること、これが本稿の意図する研究目的の第2である。そのためには、誰が、いつ、どのような形で、象山門人帳としての「及門録」の存在を明らかにし、その内容を一般に明示したのか。即ち、「及門録」に関する先行研究の成立経緯と内容分析を徹底的に検討しておくことが求められるのである。

今から半世紀近くも前に、筆者は、象山門人帳「及門録」の存在情報を最も早くに公開した人物は井上哲次郎であることを、彼の論文の存在とその内容から発見した。即ち、東京帝国大学の哲学教授である井上が『東洋学芸雑誌』に発表した論文「佐久間象山及門録に就いて」（大正3年、1914）に遭遇し恐懼感激した。井上の論文は、雑誌論文という紙数制約の故に、「及門録」に記載された象山門人の全てを公にしたものではなく、一定の時期における象山私塾の概要とそこに入門した代表的門人を示すにとどめた内容であった。井上は、知人に持ち込まれた「及門録」をみて、これを象山門人帳の「原本」あるいは「原本の写本」と思いなして、後世における門人たちの作品とは疑わなかったことは間違いないであろう。

そして、井上論文の公表から28年も後に（昭和7年、1932）、著名な医者で象山研究の第一人者であった宮本伸という人物の「及門録」全文を収めた大著『佐久間象山』（岩波書店）が刊行されたのである。同書は医学者が書いた歴史的人物の評伝であった。だが、徹底して史料に語らせるという歴史叙述の基本的手法は、歴史学者顔負けの名著であった。本書によって、日本人は、初めて幕末期を代表する実践的思想家である佐久間象山と彼の門人の全体像を知ることができた

のである。同書に、はじめて公表された「及門録」という史料は、象山研究はもちろん、幕末洋学史研究その他に活用されうる基本史料であり、実に画期的な研究成果であった。

だが、その後、筆者は、「象山門人帳史料「及門録」は幾種類も存在する」という衝撃的な事実に遭遇するのである。以来、それぞれの「及門録」には、記載された象山門人に関する事項（門人名、入塾期日、身分、帰属する藩名や藩主名、等々）の記載には相違があり、いずれの「及門録」も様々な問題点を内在する史料であることを突き止め、その謎を解明してきた。

叙上のような、筆者のこれまでの研究成果を活用して、本稿では、①「及門録」の存在と概要を初めて公表した井上哲次郎論文の内容を詳細に分析し、その先駆的意義とそこにみられる問題点を明らかにすること、②「及門録」なる象山門人帳史料の存在を明らかにして、その全文を公表し、はじめて象山門人の全体像を世に知らしめた宮本伸という象山研究者の研究業績の内容を考察し、彼が公開した「及門録」の歴史史料としての妥当性や問題性を分析すること、③両者の論文と著書によって、従来は象山門人とは夢想だにしなかった画家の狩野芳崖のような異分野の人物が、実は象山門人で、象山の強い思想的影響を受けて伝統的な日本画に斬新な西洋画法を融合させた日本絵画の近代化に大きな貢献をしている事実を明らかにするとか、④さらには、例えば福沢諭吉のように、これまで象山と同時代を同じ洋学と関わって生きながら、親交などの関係性は全く認められないと思われていた人物が、実は門人を通して象山と深く関わっていたという事実を解明すること、等々、単なる象山門人研究に止まらず、広く歴史学界に貢献できる意味のあるファインデンクスを提供しうる研究課題に挑もうとしている。

上述のごとき研究を通して、象山門人に関する整理された正確な研究史料が公表され、それらが、やがては象山研究者たちが象山門人帳の原本と見まごうほどに精度の高い史料に校訂された「訂正及門録」（増訂『象山全集』第5巻所収）が編纂・刊行されるに至る契機となった先駆的な研究成果であることを明らかにしたい。

なお、以下の本稿には、分析や比較の対象史料として現在確認できる5種類の「及門録」が登場する。それらを、以下のごとくに略称して本文中や注記などで記載することとする。

- ①宮本版：宮本仲著『佐久間象山』所収「及門録」（活字版）
- ②全集版：信濃教育会編『増訂 象山全集』所収「訂正及門録」（活字版）
- ③京大版：京都大学附属図書館所蔵「及門録」（毛筆書写版）
- ④信教版：信濃教育博物館所蔵「及門録」（毛筆書写版）
- ⑤歴博版：国立歴史民俗博物館の共同研究結果の公開データ「及門録」（活字版）

なお、さらに付記しておきたいことは、これまで研究者の誰も指摘してこなかった重要な事実、即ち象山の教育活動の期間をめぐる問題がある。彼の教育活動は、天保7年（1836）に松代藩の儒者（御城月並講釈助）に任官した26歳のときからはじまり、以来、天保10年（1839）に江戸神田阿玉ヶ池に開設した漢学塾時代、嘉永元年（1848）に藩命で西洋大筒を鑄造し門人たちと試射の演習をした時代、そして翌年の嘉永2年には江戸深川の松代藩下屋敷で西洋砲術教授の看板を掲げて教授活動を開始し、同4年（1847）には江戸木挽町に念願の独立塾舎を構えて教授活動を本格化した時代へと連続するのである。

だが、期せずして安政元年（1853）3月、門人・吉田松陰（1830—1859）の海外密航事件に連座して幕府に捕縛され入牢。この時点で、彼の江戸の私塾での教育活動は、塾頭の蟄川賢之助（1832—1891）が代行することになるが、実質的には終焉を迎える。しかし、それをもって彼の教育活動の全てが終了した訳ではなかった。地元松代での塾居時代にも、彼を松代に訪ねてくる門人たちに和漢洋の教育活動を展開し、さらに信州内外の全国各地から新たな入門者も生まれるという状況にあったのである。

象山の信州松代における謹慎生活は約9年間もの長期に及んだ。やっと文久2年（1862）12月になって、塾居赦免となり、自由の身となる。ところが、翌年の元治元年（1864）3月には、海外密航で象山を処罰した幕府が、皮肉にも今度は幕命をもって象山を任用し（海陸御備向掛手附御雇、20人扶持15両手当、幕府軍事顧問）、上洛を促すのである。松代藩内外の門人たちは、騒乱の京都へ上ることは死に値すると大反対し、地元の門人たちも松代藩庁に上洛反対の請願書を提出するのである。だが、象山は、全ての反対を押し切り、元治元年（1864）3月、上洛を執行する。しかし結果は、弟子たちの予言通りとなり、同年7月、

象山は京都市中で攘夷派の志士たちに襲撃されて斬殺され、54年の一期を閉じるのである。

従って象山の教育活動は、藩儒(御城付並講釈)に就任する天保7年正月(1836、25歳)から、元治元年7月(1864)に京都で斬殺される瞬間まで続き、約30年間に及ぶ。

門人の吉田松陰は、地元長州藩の野山獄にあって、松下村塾門人の高杉晋作に、恩師象山に次の3つの質問状を届けて答えを拝受してくることを依頼する。この依頼状の執筆は安政6年(1859)4月25日付であった。だが、実際に高杉が信州松代に象山を訪ねたのは、翌年の万延元年(1860)9月21日のことであった。

- 一、幕府・諸侯何れの処をか恃むべき
- 二、神州の恢復は何れにか手を下さん
- 三、丈夫の死所は何れの処が最も当れるか⁸⁾

上記のような松陰の恩師象山への最後の質問状は、安政の大獄で斬首刑を受ける前年、即ち安政5年(1858)4月の執筆と推定される。実は、この松陰の質問状にこそ、西洋化する以前の日本人が求めた教育の究極的な目的(本質)が示されているとみてよい。明治以降の西洋型近代学校教育は、教師が生徒を教え、教えられた知識技術の理解度を問う試験の点数で生徒の成績(学力)が評価され進路が決定される知識中心・点数中心主義となり、同時にそれは近世までの土農工商という固定的な職業的身分制度に取って代わる、近代の数値で把握される学力を基準とする合理的で流動的な立身出世主義の身分制度の成立を意味した。

だが、「学力」とは「学び取る力」であり「生きる力」である。そのような人間存在の本質からみて、学校教育が子どもに求める知識とは、一体、何のためのものか、何故の進学であり立身出世なのか。現代日本の教育は、生涯学習(lifelong learning)という新たな視座から学校中心主義の教育を、生徒自身が自分の人生を生き抜くという人間存在の根底的視座から、問い直さなければならぬときに来ている。生涯教育の基盤形成を担う学校教育は、生徒に、人間としての「生き方」と「死に方」の生涯探究や、人間である自分自身の個性の顕現化への目覚めを支援するインパクトに満ちた重要な役割を担っている。

同時代人からみれば、いつの時代も、幕末期と同様、激動の時代である。それ故に、押し寄せる現実の波頭を乗り越える学ぶ力、即ち強靱な自己教育力の育成が求められている。その意味で、松陰が恩師の象山に質問した生死に関わる本質的な学習課題は、決して他人事ではなく、現代人にとってもまた根本的には「生きる覚悟」と「死ぬる覚悟」を求めて学ぶ、人間教育の最も深遠な学習課題であるべきではないのか。

上述のごとく、激動の幕末期を生きる青少年たちにとって最大の関心事は、「如何に生き、如何に死ぬか」という自己の存在自体の是非を自らに問うことであった。それ故に松陰は、恩師象山に最後の質問を送り、「丈夫（男子）の死所は何れの処が最も当れるか」という「死に場所」を尋ねる質問をした。この問いの現代的な意味は実に深く重い。教師は、綺麗事の観念で整理整頓された知識・技術を教え込むのではなく、人間らしい生死の在り方を、日々、率先垂範して求めてみせなければ尊敬されるに値しない。生き方はもちろん、死に方についても、率先垂範してみせることが、今、文部科学省が叫ぶ「アクティブ・ラーニング」(active learning)、「為すことによって学ぶ (learning by doing : デューイの経験主義教育)」の、最も重要で本質的な教育の課題ではないのか。学ぶことは生死に関わる生命活動であるが、知識技術の教育は、生死に関わらず、真に人間の教育とはいえない。

叙上のように象山の教育は、死に至る直前まで自らの行動を通して、門人に対する和漢洋の多様な教育を施すと共に、その活動の奥には、人間として在るべき生死の教育を探求する活動の本質が、敬虔な祈りのごとくに人間存在の底流には潜在していたのではないか。

象山の教育活動の中でも、特に嘉永元年以降の幕末期には、西洋軍事科学に対する教育要求が全国的に高揚し、その第一人者となった象山の教育活動は、自ずと西洋軍事科学（西洋砲術・西洋兵学）を中心とする知識技術を中心として展開された。特に彼は、中津藩をはじめ、幾つもの藩から招聘されて、藩邸に出張教授したり集団教育を実施したので、象山の教育活動の全期間における門人は膨大な数に上り、彼の影響力は想像以上に大きかった。だが、その全体像を把握できる門人録は、これまで存在しなかったのである。

本稿が取り上げる「及門録」という史料を、標題や記載内容を含めて文字通り

門人録と受け止めれば、それは「黒船来航前後の数年間という極めて短期間を対象に記載された門人帳」という意味になる。だが、はたして、そのような「及門録」の理解でよいのか。そこには様々な疑問点がある。その疑惑もまた、同史料の詳細な内容分析を通して検討されなければならない、そのことも本稿の研究課題である。

I. 井上哲次郎の論文「佐久間象山『及門録』に就いて」の先駆性と問題点

象山の没後、内憂外患に揺れる幕末動乱末期の時代状況は深刻化した。が、4年後には明治維新（明治元年、1868）がなり、天皇親政の新時代を迎えた。その後、時が流れ、文明開化＝西洋化の明治時代が到来すると、治安は安定に向かい、国是である日本の近代化（殖産興業・富国強兵）政策が軌道に乗ってくる。そして、日清戦争（1894年7月－1895年3月）と日露戦争（1904年2月－1905年9月）という2つの戦争に勝利し、日本は農業国から工業国へと大きく転換していく。この日本の産業革命を推進するに不可欠な学問文化の近代化（西洋諸科学の受容と展開）が諸分野において推進され、日本の近代国家体制が世界的承認を受けはじめた大正3年（1914）の11月、今度は第一次世界大戦が勃発した。戦争の重大性に比すれば些なことではあるが、象山研究の世界では大きな意味を持つ出来事が、この年に起きたのである。象山門人を解明する端緒となる先駆的な論文の発表であった。

それは、誰の論文かといえば、何と「教育勅語」（明治23年、1890、発布）の政府側解釈書「勅語衍義」（1891年9月）を著した東京帝国大学教授の哲学者・井上哲次郎（1855－1944）であった⁹⁾。彼は、当時の日本を代表する学術文化雑誌『東洋学芸雑誌』に¹⁰⁾、「佐久間象山及門録に就いて」という論文を発表したのである¹¹⁾。これは、象山門人の全体像を概観し問題点を指摘した内容であり、象山門人の全体像を俯瞰した論考としては初めての作品であった。それ故に井上論文は、当時、象山門人研究に関する最も先駆的な位置を占める作品であったと評することができる。

一見すると、井上と象山との取り合わせは奇妙にみえる。だが、実は、井上にとって、同論文を執筆する直接的動機となった出来事があったのである。それは、

前年（大正2年、1812）に信濃教育会編『象山全集』（上下2巻本）が刊行されたことである。同全集は、膨大な象山関係史料を蒐集し編纂した最初の全集であり、象山の学問思想の全体像を知る上で、象山自身が語りかける直接史料（原史料集）として画期的な意味と役割を有する著作であった¹²⁾。

だが、そこには看過できない重大な問題点があったのである。実は、この『象山全集』（上下2巻で総頁2500頁超の大作）には、象山門人帳史料の「及門録」が収められてはいなかったのである。まさに井上は、この点を問題としたのである。なぜならば、井上は、『象山全集』が刊行される前年に、象山門人の関係者と思われる人物から、「及門録」という象山門人帳史料の現物を見せられており、そこに記された400名を超える象山門人の氏名を詳細に確認していたからである。しかも井上は、その「及門録」に対して、記載されるべき門人が不記載となって漏れているなどの点に、強い疑問や問題関心を抱いていたのである。それ故、井上にとって、非常に関心の強かった象山門人帳史料「及門録」が全集に収められていなかったということは、衝撃的な出来事であったに相違ない。

彼は、論文「佐久間象山及門録について」を執筆するに至った経緯と目的を、次のように述べている。「或人が佐久間象山の及門録と云ふのを持つて来て吾吾に見せましたから、早速それを繙閲して見¹³⁾」ていたので、当然、『象山全集』には同史料が収録されているものと思いき期待していた。しかし、「どう云ふ訳か、及門録は其中に加へてない」のであった、と。¹⁴⁾

井上は、自ら目にした「及門録」という史料に、自分が知らない門人や予想外の人物が記されており、象山門人を知る上では非常に重要な史料であると認識していた。それほどに重要な史料と思われる「及門録」が、何故に『象山全集』に収録されていないのか。驚いた井上は、ならば自分自身で「及門録」に記載された門人の「全部を雑誌に掲載したい¹⁵⁾」と考える。だが、月刊誌という紙幅の関係上、400名を超える象山門人全員が記載された「及門録」を紹介することは、到底、無理なことであった。そこで井上は、取りあえず、「注目すべき点だけなりと茲に紹介したならば何かの為になろう」と意を決し、急ぎ論文「佐久間象山及門録に就いて」を執筆し『東洋学芸雑誌』に公表した、という次第である。

だが、この井上論文を詳細に分析してみると、様々な疑問が湧いてくる。第1に「象山先生五十年祭」の翌年（大正3年、1923）、井上に象山の門人名簿「及門

録」をみせた「或人」とは、一体、誰であったのか。生涯に亘り恩師象山の顕彰事業に尽くした門人には、勝海舟（旗本、1822—1899）を筆頭に北沢正誠（松代藩、1840—1901、外務省書記官や華族女学校学監等を歴任）・渡邊驥^{すすむ}（松代藩、1829—1890、大審院検事長や貴族員議員を歴任）・津田眞一郎（真道、1829—1903：津山藩、幕府蕃書調所任官で幕臣、文久2年（1862）には西周と法学研究でオランダ留学、維新後は外務官僚、明治4年（1871）の日清修好条規締結には副使（全権・伊達宗城）として清国へ、第1回衆議院議員総選挙（明治23年、1890）に当選し初代衆議院副議長、明治29年（1896）には勅選貴族院議員、等々を歴任、男爵）・小林虎三郎（長岡藩、1828—1877、長岡藩大参事、美談「米百俵」の主人公）・小松彰（松本藩、1819—1888、文部省の大学大丞、生野県知事、本省学務局長などを歴任、下野後は東京株式取引所を創設し初代頭取、両毛鉄道会社取締役兼東京米商会社取締役など民間企業の創業・発展に尽力）等がいた。が、彼ら主要な象山門人たちは、明治末年（1912）までにはほとんどが鬼籍に入っていた。それ故、偉大な政府系学者として威厳を誇っていた井上教授を直接訪問して面会できる象山門人はみあたらない。

敢えて挙げるとすれば、当時、存命中の門人は加藤弘之（但馬国出石藩、1836—1916、帝国大学総長、獨逸学協会学校長などを歴任）である。象山一門の優等生であった加藤は、旧東京大学の初代総理、東京帝国大学の第2代総長を歴任した学界の超大物で、森有礼初代文部大臣を会長とする「明六社」の創立に参加、さらに井上哲次郎を中心に『東洋学芸雑誌』を刊行する際には、会長の井上に協力を惜しまず、晩年の大正3年（1914）頃まで同誌に健筆を振るい、深い親交関係にあった。「及門録」をみせられた井上と共に、「及門録」を共に繙き、恩師の象山とその門人たちを偲んだ人物、それが象山門人で最期まで象山顕彰に努めた忠義の門人の加藤であった可能性はあるが、断定はできない。

なお、門人同様、否、門人以上の門人といってよい石黒忠憲（1845—1941、福島の農民出身の子で、学問を研鑽し、陸軍軍医総監や日赤社長等を歴任し西洋医学者として大成）は、尊皇攘夷に燃える偏狭な人生観を打破できたのは、象山との遭遇であった。謹慎中の象山を信州に尋ねたが、残念ながら入門は叶わなかった。そこで彼は、「自らを死後の象山門人」と公言し「門人以上の門人」として、象山を、生涯の師として敬慕し顕彰活動に参画した。その石黒が、井上と恩師象

山を語り合える関係であったか否かは定かでない¹⁶⁾。

以上のような経緯を経て井上論文は執筆・公表された。これによって、象山没後50年後に、象山門人の全体を概観した「及門録」という名の門人帳が初めて公表され、広く知らしめるところとなった。井上論文では、まず「及門録」に記載された門人数を「四〇九人」と紹介している¹⁷⁾。だが、彼は、「恐らくは門人の全部が之に記入してあるのではなかろう」と、実際の象山門人数はもっと多数に上るはずだと推測する。しかも、この「及門録」に記された門人数は、「大部分が其木挽町に居るときの門人」、即ち象山が西洋砲術・西洋兵学を本格的に教授した軍事科学系洋学塾（江戸木挽町、現在の東京都中央区銀座6丁目）の数字ではないかと推察している¹⁸⁾。象山が木挽町に私塾を移転したのは、嘉永年間に入って全国諸藩からの入門者が急増、これに対応すべく、従来の松代藩下屋敷（江戸深川、現在の東京都江東区永代1丁目）で西洋砲術の教授活動をしていたのを、藩邸を出て江戸木挽町に自前の独立塾舎を構え、本格的に西洋砲術・西洋兵学を中心とした教育活動を展開しようとしたからである。象山は、松代藩からの資金援助と木挽町の私塾の広さを喜び、次のように記している。

小弟も此度外宅御手当百三十金戴き候て木挽町五町目御絵師の狩野殿の向へ家を求め引移り候。疊の数八十枚ばかりにて蔵も二ッ有之、大小銃習はせ候空地も少々有之、都合も宜しく偏の上の御特恩と難有仕合奉存候。¹⁹⁾

象山は、この移転で拡張された自慢の塾舎で、全国各地から入門してくる多数の門人に対して積極的に教育を展開する。だが、この嘉永4年（1851）5月にはじまった木挽町での教育は、残念にも、門人吉田松陰の海外密航事件に連座して象山が幕府に捕縛される安政元年（1854）4月までの約3年間という短期間で終わってしまうのである²⁰⁾。実は、この短期間の木挽町時代の門人名を記載したという門人帳こそが「及門録」と称されるものだったのである。

井上本人も、「及門録」という史料を、「読んで字の如く、佐久間象山の門に学んだ当時の人々の名簿²¹⁾」と理解していた。だが、後に詳細に論証するが、そのような「及門録」の理解は、全くの誤りである。同史料には、上記の期間における入門者ばかりではなく、それ以外の期間の門人も記されており、また西洋砲

術の門人ばかりでなく、象山が専門とする儒学をはじめ、西洋砲術（西洋兵学）・洋学（蘭語学と蘭語による近代科学の知識・技術）や西洋医学（診断・治療・薬理）、等々、洋学関連の様々な学問・技術を学ぶ多種多様な門人が在塾していたのである。象山の私塾が、西洋砲術・西洋兵学を教授する軍事科学系洋学に特化された専門教育に限定されたものではなかったことを、象山自身が、木挽町に私塾を移転する前年の塾の盛況ぶり報告する、郷里の母親宛書簡に次のように記している。

只今の勢いにては砲術門人二三百人に相成候は遠からずと存じ申し候。二三百人の門人御座候へば二季（春秋）の謝儀（授業料）ばかりにても百金にあまり可申、左候へばくらし方は夫のみにてもつき可申、況や儒業並に西洋学の門人も有之候事に候へば其表にて医方など内職の様致し候よりは、はるかに姿もよろしく、第一に天下の益に相成候事に付き何分左様仕度奉候。²²⁾

井上の史料「及門録」に対する理解と問題指摘の的確性

上記のように私塾を主宰する象山自身は、在塾する門人の類型を、①「西洋砲術」、②「儒学」、③「洋学」の3種にはっきりと識別していた。そして井上もまた、自らが閲覧した象山門人帳「及門録」に記された象山門人を、学習内容の面から、①「砲術の部」（坂本龍馬・橋本左内・真木和泉など）、②「学問の部」（山本覚馬・津田眞一郎・加藤弘之など）、③「砲術の部と学問の部と両方に出て居る人」（河井継之助など）の3種に、該当する門人名をあげて分類している。しかも井上は、記載された門人の「半分以上は学問の方の門人」と捉え、表向きの看板は西洋砲術塾でも、象山塾の内実は儒学や洋学など多様な学問や知識技術を学ぶ門人の方が多かった、と井上は論文に明記していた。実に適切な判断であるといえる。

井上は、黒船来航直後の安政2年（1855）、筑前福岡太宰府で医師の家に生まれ、小村寿太郎（1855-1911、日向国飢肥藩・現在の宮崎県日南市、下級藩士の長男）や犬養毅（1855-1932、備中国賀陽郡川入村、現在の岡山県岡山市、大庄屋・郡奉行の次男）と同年齢であった。象山とは45歳、勝海舟とは33歳も年齢差がある。

だが、少年時代に内憂外患に揺れる幕末期の激動を体験した井上には、象山塾門人の中に藩の枠を超えて友人知人がいたかも知れない。もし、そうであるならば、彼は、「及門録」に記された象山門人に対する体験的な理解も可能であったかも知れない。だが、その後の昭和の戦前戦後における象山研究者のほとんどは、「及門録」の成立経緯や内容的な矛盾を全く知らずに、これを象山の「西洋砲術門人帳」と捉え、史料批判もせずに利用してきたのである²³⁾。このような研究者たちの単純な誤謬の積み重ねに比すれば、記載内容を正確に理解した上で門人たちの象山塾における学習内容を分類している井上の史料理解は、実に適切妥当な内容であり、評価に値する。

だが、井上論文における「及門録」の分析や解釈が全て正しいというわけではない。井上は、「及門録」に記録された象山門人には「砲術の部と学問の部と両方に出て居る人」とみて、彼らを独立した別々の門人と分類している。これは誤解である。実は、このような「及門録」の捉え方自体が誤りなのである。後に詳述するが、この問題は、象山没後、恩師象山に対する敬慕と顕彰の意を込めて、明治に生き残った門人たちが、象山が実施した西洋砲術練の「稽古出座帳」などに象山門人名が記載された史料を合成して「及門録」という1冊の門人帳にまとめ上げたことに起因している、とみられるからである。このことを裏付ける具体的な事例として、全ての「及門録」に同一門人が複数回、記録されているという事実を指摘することができ(「重出」「三重出」などの問題とその発生原因)。そのことは、同一門人名が個々の稽古に出座した回数だけ、毎回、出座帳に記録されているという事実(当時の西洋砲術塾での野外練の慣例)に起因して必然的に発生する問題なのである。

実は、これまでに筆者が入手し分析した5種類の「及門録」(宮本版、全集版、京大版、信教版、歴博版)の中で、相対的にみて最も信頼性の高いのは、何と云っても増訂版『象山全集』(第5巻所収の「訂正及門録」、1935)である。分析経緯の詳細は後述するが、例えば最も信頼性が高い全集版には、延べ人数で463名の門人が記載されている。だが、その内訳を詳細に分析してみると、その内で、何と33名もの門人が「重出」又は「三重出」なのである。従って重複を除いた門人の記載実数は430名となる²⁴⁾。この数字は、井上が重複記載を含めて紹介した門人総数409名より21名も多いのである。この門人数の違いは、延べ人

数と実数の相違から発生する問題なのである。

しかしながら、井上が、象山門人を私塾での学習内容別に3種に分類したことは、象山門人帳「及門録」の内容をより正確に捉えていたことを物語っている。このことは、同時にまた、象山という学者の多様な学問分野と、彼が開設した私塾での幅広い教授内容との相関性を、どのように把握し理解すべきかという問題と密接に関係している。即ち、従来は研究者の世界でも、紛う方なく「佐久間象山＝洋学者（西洋砲術家・西洋兵学者）」とみられてきた。だが、それは全くの誤解である。そのような捉え方は、彼が、自らを、最も正統な朱子学派の儒学者と自認し、学問の根底に武士であることの矜持をもって己を生き抜いた武士道の実践者であり、さらには西洋医学者、書道家、漢詩人、西洋科学者、等々、象山の多面的な学問展開の一面のみを捉えた狭隘な象山像が多く、特に西洋砲術家あるいは西洋兵学者としての象山理解が圧倒的で、象山＝西洋砲術家（西洋兵学者）という固定的なイメージが強かったことは否定できない。

彼が、幕末期という時代の現実的要請にこたえて西洋日新の軍事科学系洋学（西洋砲術・西洋兵学）をも己自身の天命とする学問探究（儒学－朱子学）の対象内に取り込み、問題解決に向けて積極果敢に研究実践したことは、洋学（高度で精緻な軍事科学を創出している西洋の諸学問）の研究成果を、封建的枠組（藩・身分・出身地などの封建制度の構成要因）を補強する狭隘な学問観を超えて、等しく日本人である門人たちに、祖国日本の国家や人民の独立と安寧を担保する実践的な学問力（問題の発見能力と解決能力）を育成しようとした、国家人民に有益な学問探究の産物に過ぎなかったといえる。

象山の学問実践には、朱子学の「格物窮理」（物に格^{いた}りて理を極む）という問題の発見と研究の基本精神がある。それは、問題を物事の本質的次元から把握し、合理的な対応策を創意工夫して問題解決に当たるという意味である。冷静沈着に問題を把握し、問題そのもの（物そのもの）に即して分析して総合し、本質的観点から問題解決するという学問的合理性は、朱子儒学者象山の最大の学問的特徴であった。その彼が、内憂外患に瀕した幕末期の日本が求める「西洋砲術・西洋兵学などの軍事科学系洋学」を広く提供すべく、如何なる偏見や蔑視をも排除して積極果敢に近代科学技術の開発に取り組み、西洋に通底する東洋の真理探究－格物窮理の科学的精神を躬行実践したのである²⁵⁾。

象山にとって、真理を極める学問的世界においては、洋の東西による対立や相違はありえず、それは内外共に「真理」を基本とする一貫した普遍的世界であるはずであったのである。実は、このような真理を基準とする普遍性を、物事の判断基準とする象山の生き方（学問的な精神とその実践）こそが、幕末期日本の幕府や藩主に提示した数々の対応策、例えばアヘン戦争直後の「海防八策」に具体化された上書などに、彼の非凡な問題発見能力と実践的対応能力とを読み取ることができる。

「及門録」に記載のない門人を指摘—西村茂樹・子安峻・狩野芳崖・北澤正誠

ところで井上は、「確に佐久間象山の門人であつた人が此及門録に見えないのが大分（いる）」と述べて²⁶⁾、「及門録」に記載されていない象山門人が他にも多数いることを指摘している。その代表的な事例として、彼は、西村茂樹・子安峻・^{たかし}狩野芳崖・北澤正誠の4名をあげている。

まず、その内で、西村茂樹（佐倉藩）と子安峻（大垣藩）の両名については、後に紹介する5種の「及門録」（宮本版・京大版・信教版・全集版・歴博版）の全てに記載されていることを筆者は確認しており、井上がみたという「及門録」だけに彼らの氏名が見当たらないということは、一体、彼はどのような「及門録」をみせられたのか、実に不可思議なことである。

なお、象山門人として「及門録」に記されている氏名は、いまだ青年期の通称である。維新政府の官僚を辞して読売新聞社を創設し初代社長として活躍し、また日本銀行の設立に貢献し初代幹事となるなどの国家的要職を歴任した「子安峻（1863—1898）」だ。だが、彼の「及門録」への記載名は「子安鐵五郎」である²⁷⁾。明治日本を代表する啓蒙思想家で「日本弘道会」（道德振興団体）を創設した西村茂樹（1828—1902）は「西村平八郎」。いずれも入門当時の旧名で記されている²⁸⁾。だが、文部官僚として活躍し恩師象山の顕彰活動に奔走した「北沢正誠」（1828—1894）の場合は、同じ象山門人でも西村や子安の場合とは事情が少々異なっていた。

象山が江戸神田阿玉ヶ池（現在の東京都千代田区岩本町5丁目）に、天保10年（1839）、初めて開設した儒学（朱子学）の私塾「象山書院」（別名「五柳書院」）、そして2度目に開設した西洋砲術塾とみなされる洋学私塾（1850年に江戸深川の

松代藩下屋敷内に西洋砲術教授の看板を掲げて教授)の2つがあった。だが、後者は、黒船来航前夜の時代状況を反映して西洋軍事科学を学ぼうとする入門者が急増し、翌年の嘉永4年(1851)には松代藩の経済的援助を得て江戸本町(東京都中央区銀座6丁目)に独立塾舎を設けて移転するわけである。

ところで、上記の2つの私塾は、教育内容からみると同じではなく、一見すると矛盾する性格の教育にみえる。はたして象山が開設した漢学塾と西洋砲術塾との関係性は如何なるものであったのか。両塾を、時空の系列でみれば別物である。時代も場所も異なる。だが、象山自身の学問観においては何の矛盾もなかった。思想的・学問的な観点からみれば、後者の西洋砲術塾は前者の儒学塾に包含され真理の探究と実践で一貫する私塾と理解すべきものである。従って象山の意識上では、実質的には漢学塾が西洋砲術塾を包含した私塾という関係にあった。儒学は洋学の前提的基盤であり、洋学受容の主体性を担保する思想的基礎であると、象山自身は考えていたからである。このことを史料的に裏付けるのが、象山の次の儒学者が洋学(西洋芸術)を同じ学問探究の対象とすべきことを強調している文章である。

書を読み学を講ずるも、徒に空言を為して当世の務に及ばざるは、清談して事を廢すると一間(僅かな隔たり)のみ。これ有るも補ふところなく、これなきも損するところなきは、これ無用の学なり。有用の学は、譬へば、夏時の葛(葛布)、多時の裘(皮衣)のごとし。もし之を為る者なくんば、則ち生民(人民)の用闕けん²⁹⁾。

それ故に象山は、塾生に対して西洋砲術と儒学の両方を学習する洋儒兼学を教育の基本方針とした。だが、塾の実態に即してみれば、①以前の儒学塾の門人を含めて儒学や詩文だけを学ぶ門人、②西洋砲術だけを修練する門人、③オランダ語文法や医学・薬学・地理学・物理学・化学などの非軍事科学や軍事科学を生み出す基礎的学問としての洋学を学ぶ門人、等々、象山門人の学習内容は決して同一ではなく、同じ象山門人とはいえ多種多様な学びが展開されていたのである。

ところが、江戸で象山が実践した私塾教育、特に後半の西洋砲術塾の門人帳とされるのが「及門録」である。そこに記録の対象となる門人の入門時期(1850-

1854) という短期間の対象範囲に、北澤正誠 (1840—1901) が入るには、塾の存続期間からして、当時の彼ははまだ10歳から15歳の少年であり、門人として記載するには難しかった。

北澤の象山塾への入門時期を巡っては諸説がある。「江戸藩邸に生まれ、幼にして佐久間象山に師事³⁰⁾」、あるいは「天保十一年江戸藩邸に生まれ」「弱冠佐久間象山に師事³¹⁾」等の説に従えば、最初に象山が江戸に開設した私塾 (天保10年、1839) から、西洋砲術教授を始める嘉永元年 (1848) の間、即ち北澤が8歳を迎える頃までには、象山に師事して学問修業をはじめていたことになる。それは象山が江戸在住の時期であった。幼い北澤は、象山から「往来物」や『小学』など寺子屋教材からはじめて儒教の「四書五経」に進む基礎教育を受け、いまだ西洋砲術などの専門的な洋学教育は受けていなかったとみてよい。それ故に、北澤は、象山の早くからの門人ではあるが、「及門録」の記載対象時期に西洋砲術操練などには参加しておらず、従って「及門録」に記名されなかったのは当然のことであるといえる。

しかし、幼少期から象山の薫陶を受けて成長した北澤は、常に象山に寄り添い、江戸在住時代はもちろん、松代蟄居中も通学して教えを受け、象山が最期を迎える京都上洛にも随行し離れることはなかった。松代藩当局からの急な佐久間家の御家断絶という冷酷な処分を受けたときも、勝海舟と共に象山の重要な文書や書籍を守り、また残された佐久間家の家族を物心両面で支援したのである。まさに北澤は、数多い象山門人の中であって、象山の“側近中の側近”とも呼ぶべき報恩心の厚い実に奇特な門人であった。また、学問思想面でも北澤は、越後長岡の小林虎三郎と同様、象山を全人的に敬仰して学問と人格の全てを学び取り、象山思想の全体世界「東洋道徳・西洋芸術」を最も誠実に修得し実践した数少ない門人であったことは間違いない³²⁾。

近代日本画の狩野芳崖も象山門人—「東洋道徳・西洋芸術」思想を絵画に具現化

ところで、「近代日本画の父」と評され、幕末から明治期の日本画界を代表する狩野芳崖 (1828—1888)。彼が、象山の門人であったという井上の指摘は驚きであった。井上論文と出会うまでは夢想だにしなかったことである。というのも、どの門人帳史料の「及門録」にも、狩野の名は記されておらず、それ故に井上の

指摘は極めて意外なものであった。

象山門人帳と称される各種の「及門録」の中であって、綿密な校訂を重ねて編集され、内容的に最も信頼性の高い全集版「及門録」をはじめ、これまで筆者が分析・考察を重ねてきたものだけでも5種類ある。だが、それらには、井上が記載されていないと指摘した「西村平太郎」(茂樹)・「子安鐵五郎」(峻)の2名は、紛う方なく記載されている。だが、「狩野芳崖」や「北沢正誠」の名は、全ての「及門録」に記されていないのである。

ところで、象山自身の学問の本質は、あくまでも儒学者(朱子学者)であり、その朱子儒学で重視される「格物窮理」という「真理探究」の普遍性を基盤として、洋学、それも軍事科学(西洋砲術・西洋兵学)に限定せずに、広範な西洋科学の分野(医学・薬学・化学・物理学・力学・電気通信学、地理学、地域や国家の殖産興業に関する種々の西洋科学)を儒学の延長上にある学問探究の対象内に取り込んだ。しかも彼は、洋学を、西洋砲術や西洋兵学などの軍事科学の知識・技術に限定せず、それらを生み出す洋学(西洋芸術—西洋科学)の多様な分野と効用とを、個々の門人の探求心に応じて説論し教授したのである。

そのように東西両洋の広範な学問を自ら探究し実践して、それを門人たちに教授した象山。彼は、最終的には、自己の学問的アイデンティティを揺るぎなく担保すべく、東西両洋の学問を貫通する真理の探究という次元における同一性(共通性、普遍性)に対する絶対的確信をもって統合したのである。その思想が、「東洋道徳・西洋芸術」という幕末期以降の日本近代化を推進する“日本人が日本人であることの主体性を担保する日本近代化の思想”に結実させたわけである。主体性なき異文化受容(「西洋道徳・西洋芸術」)は許容しがたく、ましてや狭隘で時代錯誤の異文化拒否(「東洋道徳・東洋芸術」)はありえなかったのである。

今の儒者は果して何^{なに}為る者ぞや。本朝の神聖の造国の道と、堯舜三代帝王の治と、兼ねて明かにして、黙してこれを識すか。(中略) 土境の形勢、陸海道路の險夷、外蕃の情状、防戎の利害、城堡堵援の略、推算、重力、幾何、詳証術(数学)、並究めてこれ^{つく}を悉すか。我れ未だ之を知らざるなり。然らば則ち今の所謂儒者は果して何^{なに}為る者ぞや。³³⁾

はたして、東京帝国大学教授の哲学者・井上の象山理解が、どの程度のものであったのか。それは計り知れない。だが、彼の象山理解が極めて肯定的なものであったことは確かである。その彼が、「及門録」に記載された門人は、象山の前期私塾（江戸神田阿玉ヶ池の「象山書院」）で「東洋道德」を学んだ儒学系門人が過半数である、との理解を示している。その上で、後半の江戸木挽町時代の西洋砲術塾と一般には評される象山塾の門人を、「西洋砲術」「儒学」「洋学」の3種に類別して紹介している。このような井上の「及門録」の把握の仕方は、まさに正鵠を得た妥当な理解であるといえる。

ところで、画家である狩野芳崖が、西洋砲術を専門とする軍事科学者として有名な象山の門人であったということは、誠に信じがたいことであった。が、それには史料的裏付けのある信憑性があった。その第1は、両者の私塾の地理的条件である。象山が、嘉永4年（1851）に江戸木挽町に開設した私塾が、將軍家御用絵師を務める日本画壇の名門である狩野家の画塾「勝川院」（狩野勝川院しょうせんいん雅信かのうしょうせんいんただのぶが主宰、木挽町狩野家）に隣接していたこと。偶然とはいえ奇遇な事実であった。代々、長州藩の御用絵師を務める長州狩野家の長男に生まれた芳崖は、弘化3年（1846）に10年間の藩費江戸遊学を許され、木挽町にある狩野家画塾「勝川院」で修業をしていたのである。

また、第2の要因となるのは人的要因である。狩野の画塾には、象山と親交の深かった同じ松代藩御用絵師の三村晴山（1800—1859）が、狩野の画塾の顧問格（塾頭）として塾生の指導に深く関わっていた。それ故、晴山は、芳崖にとっては恩師筋にあたった。互いの私塾が極めて近隣にあったことも然ることながら、象山が木挽町に塾舎を構えたのを機に、芳崖は、同じ松代藩土で親交の深い晴山の仲介によって象山を知るようになるのである。この晴山を仲介者として実現した象山と芳崖の邂逅もまた実に不思議な縁であった。

なお、晴山を媒介とした松代藩と狩野芳崖との関係の親密性に関しては、松下愛（真田宝物館学芸員）の「松代藩と狩野芳崖」という真田家文書史料を駆使した論文がある³⁴⁾。

ところで、井上論文が発表されてから6年後の大正9年（1920）、美術懇話会の美術研究雑誌『中央美術』（帝國美術院附屬美術研究所編、第6巻1号—4号所収）に³⁵⁾、古川修論文「狩野芳崖—時代の波乱を背景とした—」（4回連載）

が発表された。この論文は、狩野芳崖の苦難に満ちた絵画人生を、近代日本絵画史の中に位置づけ、彼の時代を反映した作品の意味と特徴とを読み解こうとした評伝的内容である。この論文の中には、芳崖の絵画、というより彼独自の絵画世界を切り開く背景となった「自己を生き抜く強靱な思想」「如何なる評価や批判にもめげない強烈な自信と信念」等々は³⁶⁾、象山の影響で形成されたものと把握し、芳崖の生涯と作品に対して如何に象山の影響が大きかったかを叙述している。吉川は、芳崖が象山門人となる経緯を次のように述べている。

佐久間象山が江戸に来て芳崖の画を見て大に悦び、三村晴山（象山と同じ信州松代藩士で絵師で、芳崖の狩野派絵画塾の顧問的存在）の紹介で彼と絵所に会見して書を乞ひ、また題画の詩を賦して贈つた。彼は、象山に「意匠は本で技は末である、精神が直ちに天地と融通し技をして道に進ましむるにあらざればその妙は遂に神に入ることはない」と言つた。而して彼は東脩（入学金）を修めて象山に教えを乞うた。³⁷⁾

芳崖の考える絵画における「意匠」と「技」との本末論が、象山の「東洋道德」と「西洋芸術」との関係に対応することに、両者の関係性に懊悩していた芳崖は共感し感動した。そして自信をもって伝統的な日本画の世界に西洋絵画の技術を取り入れていく道が開けたのである。

ところで、画家である芳崖は、象山塾にあっては異質な存在であったに相違ない。が、象山に私淑して学問に精進し、画学の基礎となる学問的あるいは思想的な影響を受けていく。しかも彼が象山から学んだことは、画学の技法だけではなく、さらには背景や基礎となる「東洋道德・西洋芸術」思想だけを学んだものではなかった。狩野が追求してきた伝統的な絵画の世界に、異質な西洋絵画の技法を導入し融合させることによって、日本絵画を革新し、近代日本の新たな絵画世界を創出することができる。象山に学ぶ芳崖には、そのような日本絵画の革新とその実現方途がみえてきたに相違ない。それこそが象山と出会い、象山塾に入門して学んだものであったといえる。

なお附言しておくべきは、黒船来航で仲間の武士たちは生死をかけて国事に奔走していた幕末の状況下で、画家である彼は、絵画だけでなく、西洋軍事科学(西

洋砲術)をも学んだのである。画家である前に武士であるという国家人民の防衛義務をも、「何のための学問か」と問う象山の学問観から学んでいたのである。このことを古川論文では次のように記している。

士林(士人仲間)は皆銃剣を操つて国事に奔走した。是非もなく芳崖も大砲鑄造の助手となつた。そして隣家の蘭式砲術で藩に仕へた松岡某の鑄造所にゆき日夜その手伝をした³⁸⁾。

絵師である前に武士(毛利氏長州藩領の豊浦藩家臣)であるという芳崖の強い自己認識と責任感は、象山の「学問の目的を国家の経綸」「修身齐家治国平天下」にあるとの教えによるものであり、それを実践すべく、国元の長州に帰郷した時には、絵筆を銃刀に持ち替えて、同藩の武士たちと西洋砲術や大砲鑄造法までも学んだのである³⁹⁾。

しかしながら、江戸滞在中に彼が象山塾の西洋砲術練練に出席した形跡は見られない。それ故、当然のことながら、西洋砲術練練など私塾の軍事教練への出席証明(出座記録)である「及門録」に、彼の名前は記されなかったのである。

結局、芳崖が象山から学んだことは、東西両洋を貫通する学問論をはじめとする絵画に連動する「東洋道徳・西洋芸術」思想であった。特に「東洋道徳」を「西洋芸術」よりも重視する日本画家である彼は、絵画の前提あるいは基盤となる人間性の豊かさを求めて東洋の道徳(人間学)、つまり儒学の研鑽に励んだ。儒学の基礎の上に斬新な洋学の教養を融合した人間性豊かな日本画家。それが、彼のめざす理想の画家像であったとみられる。また、芳崖は、若くして象山交友の渡辺華山(1793-1841)とも親交があり、西洋絵画の影響を受けたものと思われる。他方、ナポレオンの人物画を愛した象山の幅広い洋学の世界には、西洋画学に通じる具体的な知識や技法も含まれており、この面でも、華山以上に、象山が芳崖に影響を与えた可能性があったのではないかとと思われる⁴⁰⁾。

かくして、近代日本画の先駆者と評される芳崖は、「東洋道徳・西洋芸術」思想を主体とする象山の学問と思想を学び取り、東西両洋の画法を融合統一して、幕末期における日本の近代絵画に新境地を拓くほどの人物に成長する。それ故に、彼自身の意識においては、「象山門人」であるとの強い自負心があり、当時の日

本画壇の人々もまた、芳崖を「象山門人」とみていたのである。芳崖研究者で美術史学者の古田亮は、芳崖と象山の関係、芳崖の画風に与えた象山の思想的影響について、次のように述べている。

芳崖は、弘化三、一八四六年、一九歳で、父も学んだ江戸木挽町狩野家に入門、勝川院雅信に学び、嘉永三、一八五〇年には弟子頭となる。江戸留学時代は、芳崖にとって、絵師としての技術的な修練だけではなく、思想形成や人間的な成長にとってもきわめて重要な時期であった。(中略)大都市江戸では、長府(長州藩長府)では得られない新しい知識や思想に触れるチャンスがあった。なかでも佐久間象山(一八一一一一八六四)との出会いは芳崖にとって幸運だった。

象山が木挽町五丁目に砲術指南塾を開いたのは嘉永四年(一八五一)五月のことである。ここに、越後の小林虎三郎、長州の吉田松陰が学んだことは広く知られている。当時の象山塾は砲術に限らず西洋の知識全般を学べると名声高く、全国から彼に学ぼうとする多くの塾生が集まっていた。

象山は月に数回、勝川院塾で講義をしたらしい。儒学者でもあった象山のことであるから、講義の内容は兵学ではなく儒学であったろうか。芳崖は象山と同じ松代藩出身の三村晴山(一八〇〇-一五八)の紹介により、勝川院画塾から遠くない象山塾に出入りするようになったようだ。(中略)

象山といえば、およそ美術史とは縁遠い幕末の儒者、または兵学者という印象が強いが、彼の思想をよくあらわす「東洋の道徳、西洋の芸術」という言葉は、突きつめれば次世代の、もしくは明治初年の美術思想にもつながる面があった。彼のいう芸術とは、科学技術のことであって今日使っている美術や音楽という意味での芸術とは違うのだが、砲術という技術=芸術を西洋に学ぶことこそ西洋に対抗する現実的な手段であるという開明的な方法論と、それを道徳即ち政治的な実践を含めた儒教的理想の実現に生かそうとする発想は、この当時きわめて先進的なものだった。象山の思想は富国強兵、殖産興業を唱えた明治初期の官僚に確実に受け継がれていった。おそらく象山の存在は後の芳崖の生き方、画風にまでも少なからず影響を及ぼしているであろう。⁴¹⁾

なお、附言しておくべきは、芳崖が、同じ象山門人の西村茂樹（佐倉藩支藩の佐野藩出身、1828—1902、日本弘道会創設者）とも極めて昵懇の間柄にあったことである。西村の属する佐野藩江戸中屋敷が、「芳崖が若き日を狩野派の修業に過ごした木挽町狩野家から数丁の位置」にあり⁴²⁾、しかも芳崖が江戸遊学期間の嘉永・安政年間には、木挽町狩野家の向かい側に象山塾があったという地理的因縁（深い地の利）である。隣接する象山塾に芳崖が入りしめて教えを受けたことはすでに述べた。西村が学ぶ象山塾に、芳崖もまた塾生の一人として通学し、共に象山思想を学んでいたのである。さらに重要なことは、西村を仲介とした師匠の象山と門人の芳崖との思想的影響である。この点につき、古田亮は次のごとく述べている。

茂樹は嘉永六年（一八五三）三月に支藩の佐野藩付人を命じられ用人上席となったが、ペリーが来航したこの年八月には「海防策」を書き、両藩主（本藩の佐倉藩主と支藩の佐野藩主、筆者註）に示すとともに老中阿部正弘に上申している。象山の教えが生きているといえよう⁴³⁾。そればかりか、九月には単身欧州に渡航しようとして幕府への願書を草したというが（同じ象山門人の松陰が海外密航を決行しようとした直前）、「藩老不可として誨諭する所あり果さず」と年譜にある。

長州藩の吉田松陰と佐野藩の西村茂樹が、ともに象山塾に学び、時代の要請として西洋の文物を自分の目で見聞したいと思いつ立ち、ともに渡航を計画したという共通点をもっていた、ということは偶然ではない。幕末の開化思想の要に佐久間象山が居り、多くの秀でた若者の心を惹きつけていたということにほかならない。由一（芳崖）と象山との関係は必ずしも直接的とはいえないが、象山の思想は茂樹から由一へという伝わり方もしたであろう。⁴⁴⁾

叙上のごとく、日本画家の狩野芳崖は、象山に儒学や洋学の教えを受けて自己の思想形成をなし、日本画の伝統に西洋近代の新たな技法を取り入れた。その成果が、晩年の名作「悲母観音」に代表される彼独自の絵画世界を創出し、遂には「近代日本画の父」と評されるほどの先駆的日本画家に大成したのである。かく

までも、彼が、自己の描いた理想的な絵画世界を実現しえた要因の一つとして注目すべきは、やはり、期せずして象山と邂逅し、彼の「東洋道徳・西洋芸術」思想の影響を受け、やがて自己の独創的な絵画的世界の基盤となる東西一円の世界観を学び取ったことに起因するのではないか。それ故に、芳崖を象山門人、それも異色の象山門人、とみることは極めて妥当なことである。

フェノロサとの出会いと影響

象山から「東洋道徳・西洋芸術」思想を学んだ芳崖は、同時にアメリカ合衆国の東洋美術史家で哲学者のフェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908、明治時代に来日した御雇外国人。日本美術を高く評価し紹介に努力、文部省御用掛）からも西洋画の技法、即ち絵画における「西洋芸術」の修得をなしたのである。かくして、象山の「東洋道徳・西洋芸術」という思想的基盤の上に、さらにフェノロサとの出会いによって東洋と西洋とを一円融合させたのである。彼は、東西両洋の絵画の世界を一元化し、象山の「東洋道徳・西洋芸術」という東西融合の思想世界を具現化した代表的作品「悲母観音」（重要文化財、東京藝術大学大学美術館蔵）を創作したのである。名画誕生に至る芳崖の東西両洋の学びの経緯を、古田亮は次のように、象山著『省警録』の末尾に記した彼の世界観の拡大過程をあげて説明している。

伝統主義、時には国粹主義と同列に論じられがちだった近代日本画の祖としての位置づけとはよそに、フェノロサと邂逅以降の芳崖は、むしろ積極的に西洋の技法材料、そして描法を作品制作に取り入れていった。閉じるのではなく、開くことによって新しい道を模索したのである。

芳崖が若い頃にもっとも強い影響を受けた佐久間象山は、その著『省警録』において、自分は二十歳以降一國とつながりがあることを知り、三十歳以降は天下とつながりがあることを知り、四十歳以降は五世界（＝全世界）とつながりがあることを知った、ということ述べている⁴⁵⁾。グローバルな視点をもって外交に踏み出し世界とつながりながら国を治めようという彼の大胆な開国論は、あくまでも国を閉ざして日本の平安を護ろうとした攘夷派の攻撃的となり、結局非業の死を遂げた。芳崖は美術の世界で、象山の志を受

け継いでいるとあってよいだろう。⁴⁶⁾

さらに附言しておくべきは、哲学者・井上哲次郎の鋭敏な史料読解力を示す事例である。筆者が驚愕したのは、彼が「及門録」における門人表記に頭書された主君名（旗本や藩主の氏名）や門人の肩書きなどの記載相違の意味する所を見逃さず、次のように述べている点である。

勝海舟は肩書きに「幕臣」として、さうして下に「殿」と云ふ字が附けてある。殿と云ふ字を附けたのは、海舟の外に三四名ある。マア海舟の如きは幕臣と云ふ点で殿と云ふ字を附けたものと思はれます。⁴⁷⁾

「及門録」の門人に関する記載事項は、門人の身分、あるいは帰属する藩名や藩主名が門人名の上に小さく頭書されている。そこでの特徴はいくつかある。その1つが、井上が指摘した通り、幕臣（旗本・御家人）の家来の場合は「○○殿家来」と「殿」を用い、大名の場合は「○○様御家来」と「御」と「様」とを付けて区別している点である。これは門人分析上でかなり重要な分析要因であると筆者は重視してきたが、これまでに、この点に気付いたのは井上のみであった。

以上、井上哲次郎の論文「佐久間象山及門録に就いて」の概要と特徴あるいは問題点を指摘してきた。この論文が、象山門人帳史料とされる「及門録」を初めて取り上げ、天下に公表した最初の論文であることの功績は大である。特に他の「及門録」が取り上げていない人物—日本画家の狩野芳崖、幼少期より象山に随従して象山の学問と思想の全体を学び取った北澤正誠、高級官僚を辞して読売新聞社を創立するなど近代日本の殖産興業に貢献した子安峻などを、象山門人と名言したことは実に有意義なことであった。

井上論文は、筆者をはじめとする象山門人解明の研究を志す者にとっては、研究を進める叱咤激励のメッセージとなった。井上の激励の故か、筆者の今回の本論文は、井上本人の執筆意図をはるかに超えて、幕末の開明的思想家であった象山門人にまで注目し紹介した。恩師象山の日本近代化思想「東洋道德・西洋芸術」が、門人たちに如何に継承され具現化されたか、象山門人一人ひとりの有限の人生の歴史的存在としての意義に着目し気付かせてくれる結果となった。この問題

は、最終的には、象山の再評価もさることながら、日本近代化の再検討にも迫りうる問題でもある。井上の論文は簡潔明瞭で短文にして平易。それ故にか、反響は大きく、結果として同論文の果たした歴史的役割は大きかったといわなければならない。

Ⅱ. 「及門録」の全文を初公表した宮本仲著『佐久間象山』

東京帝国大学出身の医学者が同郷偉人の象山研究に執念

井上が論文を発表してから18年後の昭和7年(1972)2月、今日なお象山研究上において最も詳細かつ実証的な象山研究書と高く評価されている宮本仲著『佐久間象山』が刊行された。同書は、岩波書店から初版が刊行された後、品切れとなり、昭和15年(1940)には150頁以上も増補され、全体で863頁という重厚な増訂版で出版された⁴⁸⁾。しかも驚くべきことに、同書は、昭和戦後の54年(1879)にも、復刻版(象山社)が刊行されたのである。時代を経てなお需要が多い同書は、象山研究に不可欠な名著であることの証左である。

ところで、著者の宮本仲(安政4年—昭和11年、1857—1936)のファーストネームの読み方は、一般には「仲」が「ちゅう」と読まれ、管見の限り、辞書等でも「ちゅう」と音読みでルビが付けられていた⁴⁹⁾。だが、質量共に象山や宮本に関する史料を数多く解説・分析されている真田宝物館の降旗浩樹課長(学芸員)は、佐久間家と親交が深かった宮本仲の父慎助と象山との書状17点(真田宝物館所蔵「宮本仲コレクション」)の解説を通して「仲」を「なかつ」と訓読みで読まれている⁵⁰⁾。宮本仲は、象山が少年期に和算を学んだ恩師で、天下に名声を馳せた和算家であった宮本市兵衛(松代藩士、江戸の算学家・會田算左衛門の高弟)の孫に当たる⁵¹⁾。代々、和算を家学とする宮本家を継承した父親の宮本慎助もまた、象山とは深い親交を結んだ人物であった⁵²⁾。はたして「仲」は「なか」なのか「ちゅう」なのか、確実な史料に基づいて確定しておかなければならない。

その宮本仲は、伝統的な最上流和算を家学とする武家の三男として松代城下に生まれた。松代藩校では文武両道を修めた。が、明治維新後の新時代の到来を予知した彼は、上京してドイツ語を学び、明治8年(1857)には西洋医学を志して東京帝国大学医学部に入学する。だが、翌春には病気で退学。しかし、同年の冬

には健康を回復して復学し、同14年(1881)には卒業する。この進路選択は、象山が塾生たちに洋学修得を進め、しかも西洋学問の一科を専門的に探究し、国家優位の人材になることを説諭したことの実行とみることができる。

東京大学医学部では、奇しくも同級生に19歳という最年少卒業生の森鷗外(森林太郎、1862-1922)がいた。当時の帝国大学は、卒業時の各学部における成績最上者に対して、国費で海外留学の機会を与えていた。残念にも鷗外の卒業成績は第9位で念願の海外留学が叶わず、結局は東京陸軍病院の勤務医となる⁵³⁾。だが、その後、幸運にも陸軍省が独自にドイツへの留学生派遣制度を制定し、これによって鷗外は、陸軍省から「陸軍衛生制度調査と軍陣衛生学研究」を目的に第1回ドイツ留学生となったのである(留学期間は、明治17年(1884)8月から同21年(1888)9月)。

同級生の森鷗外と同年にドイツ留学、帰国後は開業医の旁ら象山研究に専心

一方、仲の方は、卒業後、母校の大学付属病院の内科助手に任用され、その後、臨時防疫局出仕、日本橋病院勤務などを歴任する。だが、彼は、同17年(1884)、奇しくも鷗外と同じ年に一念発起してドイツへ留学し、西洋最新の内科学及び小児科学に関する医学を修め、同19年(1886)に帰朝する。西洋医学の最先端を学んできた彼ではあったが、帰朝後、大学や研究所の研究者に進み医学界での立身出世の道を選ばなかった。彼は、東京神田に小児科専門医院を開業し、臨床医学の実践を通じて日本の近代小児科学の先駆者となった在野の医学者であった⁵⁴⁾。

なお、仲を有名にしたのは、肺結核を病む天才歌人の正岡子規(1867-1902)の主治医として最期まで往診して治療したことである⁵⁵⁾。

また、彼の実弟で四男の宮本叔みやもとしゅく(慶応3年-大正8年、1867-1919)も東京帝国大学医学部の出身であった。この実弟は特に優秀で、ドイツ留学(内科及び細菌学ばいきんの研究)を経て、帰朝後は伝染病研究に没頭した。駒込病院長などを経て母校の東京帝国大学医学部教授となり、日本医学会を代表する著名な医学者として活躍した⁵⁶⁾。

上述のように、仲は、同じ松代藩士として3代に亘って象山と親交を深める、算学を家学として松代藩に仕える宮本家に生まれた。象山は、仲の祖父・市兵衛正武(寛政4年-天保5年、1792-1834)に算学を学び、その嫡子で仲の父親(慎

助)とも昵懇の間柄であった。松代藩家臣団の履歴書である『真田家家中明細書』には、「宮本慎助」について次のように記されている⁵⁷⁾。

役料玄米壹人 (中)	宮 本 慎 助
「御切米」納五拾表上式人半「御扶持」	
高直貳拾六石壹斗六升九合壹勺 (中)	
天保 九戌・ 九・一〇	跡式、御勘定役
安政 二卯・ 正・一一	役料玄「 ^(中) 米」壹人
同 五午・ 三・二五	御救方之儀ニ付奇特之申立有之付 (中)
	国ニ而是迄之御宛行納五拾表上式人半御扶持ニ御直
同 年 ・一二・一八	一代給人格
文久 四子・ 正・一一	役料玄壹人「 ^(中) 御扶持」御増
明治 二巳・一〇・ 四	御勘定役罷免
同 三午 正・一一	御賞典五石并依功給人格
同年 閏一一・一一	士族
同年 ・ 二・ 二	添屋敷上地
同 四未・ 二・一六	右税地

彼の藩における職務は、家学である和算を活かした「御勘定役」(藩の金銭出納を管理)であった。ところで、宮本家は譜代の松代藩士ではなかった。宮本家は、市兵衛(正武)の代に郷士から算家を専門とする藩士に取り立てられたのである。家禄は20石余りの下級武士であった。しかし、仕官後は「御勘定役」として重要な藩財政の経理を担当する職務に専念した。上記の藩記録により天保9年(1838)に市兵衛(正武一仲の祖父)から慎助(仲の父親)が跡目を相続し、また明治維新後の明治2年(1869)に武士階級制度が廃止されると、宮本家は新たに「士族」(明治2年行政官達第676号)という名誉ある身分称号を得たこと、等々が記されている。このとき仲は、いまだ12歳の少年であった。

「及門録」所収の『佐久間象山』を刊行した宮本仲一「門人以上の門人」

元治元年（1864）7月、象山が京都市中で尊皇攘夷派の凶刃に倒れたとき、仲は8歳の少年であった。それ故に彼は、象山門人ではなく、当然、彼の名は「及門録」に記載されてはいない。だが、祖父は象山の算学師匠であり、父親は昵懇の間柄で、宮本家と象山とは長く深い親交関係で結ばれていた。仲は、祖父母や両親から常に象山の偉人談を聞いて育った。象山を郷土松代の偉人として最も尊崇し敬愛して成長したのである。それ故に彼は、東京帝国大学医学部に進学し医者となったが、早くから医業の合間をぬって、象山史料の蒐集、整理、分析、研究などの象山研究活動に精励し、生涯を象山と共に生きた在野の象山研究者となったのである。

当然、象山研究の第一人者に大成した彼は、大著『佐久間象山』（岩波書店、初版は昭和7年、1932）の刊行に止まらず、最初の信濃教育会編『象山全集』（全2巻、1913）の編纂顧問⁵⁸⁾、さらに第2回目の増訂版『象山全集』（全5巻、1934-1935）の刊行の際にも顧問として、象山研究の基本史料集となる膨大な全集の編纂・刊行に貢献した⁵⁹⁾。仲の没後70年を経た今日、なおも彼の手がけた『佐久間象山』や増訂版『象山全集』は、象山研究上における必須の最重要文献（史料集）である。彼は、生涯を心身共に象山研究に精力を傾注し、その労苦は評伝や全集の刊行に結実した。優秀な医学者でありながら、医学界での立身出世を望まず、敬仰する郷土の縁者である象山研究に生涯を費やした宮本仲。彼の人生こそは、“門人以上の門人”と評されて然るべきではないか。仲が晩年にまとめた『象山先生事蹟摘要』（岩波書店刊行、非売品、1933）という小書がある⁶⁰⁾。その中で仲は、日本近代化に関する象山の功績を、次の9ヶ条に集約している。それは、象山の日本近代化における功績の一部を端的に集約した表現であり、長年の象山研究を通じて成熟した仲の象山理解の具体的な表れであるとみることができる⁶¹⁾。

- 一、海軍を創設し併せて海運を興すべきことの首唱
- 二、外人を雇傭することの首唱
- 三、海外留学生派遣の首唱
- 四、横浜開港の首唱
- 五、開港論を提唱
- 六、伊藤（博文）・井上（馨）・井上（勝）・山尾（庸三）・遠藤（謹介）五氏をして海外留学を決意せしむ（長州五傑、留学したイギリス・ロンドン大学に“Choshu Five”と記された顕彰碑が建立されている。筆者註）
- 七、開国の国是確立について京都に於ける大活躍
- 八、東洋の道徳と西洋の科学との統合を主張す
- 九、学術上の功績

以上の他にも、日本近代化に対して、その方向や内容に関する象山の具体的な思想や政策が提示されていた。例えば、アヘン戦争終結時の天保13年（1842）11月に、老中海防掛の任にあった藩主・真田幸貫宛に建言された「海防八策」（正式には「感応公に上りて天下当今の「要務を陳ず⁶²⁾」には、第六に「辺鄙の津々里々に至り候迄学校を興し教化を盛に仕愚夫愚婦迄も忠孝節義を弁へ候様仕度候事⁶³⁾」という教育立国の提言がある。それは、全国に学校を設立して国民全員、男女を問わずに就学させて教育し、国民の知的レベルのアップを図るべきことを、国策レベルの重要政策として提言しているのである。

この象山の「国民皆学」という教育近代化の根本に関わる思想が制度化され実現するのは明治5年（1872）のことである。象山の提唱は、それよりも30年も前であり、極めて先駆的であった。松代藩校の設立や教育改革による藩風刷新、領内寺子屋の奨励と寺子屋師匠に対する激励と支援、等々、象山の日本近代化思想の根幹には、学びの基礎となる小学の義務教育化を根幹とした「教育主義」が位置づいていたことを看過してはならない。このような恩師象山の教育近代化思想—教育立国主義・教育第一主義—を誠実に継承し、戦火で灰燼となった郷土長岡の地域復興に実践したのが、例の美談「米百俵」の主人公として有名な象山門人の小林虎三郎であった⁶⁴⁾。

象山は、他にも外国語辞書の出版による西洋文明撰取の拡大普及を切望して、

オランダ語やフランス語、英語などの外国語辞典の編纂・刊行の重要性を執拗に幕府に嘆願した。彼の、そのような勇氣ある思想提言とその実現に向けての積極的行動も、日本近代化に不可欠な事業への着目とその実現活動として看過できない。特に、蘭日辞書の編纂刊行に関しては、象山自ら『増訂和蘭語彙』の編纂・刊行に何年もの歳月を費やし奮闘努力した。だが、時代に先駆けた彼の実践的提言は、幕府当局から許可を得られず、無念な結果に終わったのである⁶⁵⁾。

今朝（嘉永三年四月二日）内々天文台出役のものより知らせ候。阿蘭語彙板行不相成趣にて山路殿手迄下り候よし。彼策にて御苦惱を段々蒙り候所詮も無之候。⁶⁶⁾

しかし、フランス語に関しては別で、親友の村上英俊（1811—1890、下野国那須郡作山の医師の嫡男、実妹が松代藩8代藩主・真田幸貫の長男である真田幸良（1814—1844）の側室となった関係で松代に移住し藩医となった）に、フランス語を習得し辞書の編纂を積極的に勧めたのは、象山であった。象山の期待と支援に応えるべく、彼は、仏蘭西語学の研究一筋に没頭し、全く独学で仏語・英語・蘭語の3カ国語対照訳の辞書『三語便覧』（初中終巻3巻3冊本、嘉永7年、1854）を完成し、その後は幕命を受けて『仏蘭西詞林』『五方通語』『仏蘭西詞林』などの辞書を次々と編纂し、「日本におけるフランス語学の開祖」となった。彼は、象山の夢を実現させたのである⁶⁷⁾。

また、黒船来航後は、蘭語に代わって英語が主流となるが、その英和辞書が1冊もなかったのである。この不幸な現状を打破したのは象山門人の子安峻（鐵五郎、1836—1898、大垣藩）であった⁶⁸⁾。彼は、井上論文では「及門録」に記載されていないとされたが、旧名の「子安鐵五郎」で記されているのである。その彼は、友人の柴田昌吉（1842—1901、長崎の西洋医の養子、長崎英語伝習所出身）と協力して明治3年（1870）に、活版印刷会社「日就社」（初代社長は子安峻）を設立し、明治6年（1873）、遂に日本最初の英和辞書『英和字彙』を印刷・刊行し、英語の急速な普及に貢献したのである⁶⁹⁾。その日就社は、『英和字彙』を刊行後、本社を東京府芝罘平町1番地（現在の港区虎ノ門1丁目）に移転し、（明治7年（1874）年11月、読売新聞を創刊し日本最初の日本語の日刊新聞を発行

することになったのである⁷⁰⁾。

ところで、「及門録」に記載されていない数多の門人の中でも、象山の学問思想との出会いが人生の転機となり、日本近代化を推進する専門分野の開拓者あるいは先駆者となって国家的貢献をなした人物が幾人もいた。例えば、信州松本藩の小松^{あきら}彰（1842—1888）、彼は、廃藩置県後は維新政府に出仕し、岡山県判事、文部省大学大丞、生野県知事、豊岡県令などの要職を歴任した後、退官し、東京株式取引所を創設し初代頭取、両毛鉄道会社兼東京米商会社を創設するなど、日本経済の近代化に大きく貢献した人物である⁷¹⁾。

実は、前述の井上哲次郎は、象山門人帳「及門録」を閲覧し、それを基に論文を執筆した。が、宮本も、井上論文を読み、また、井上のみたとされる「及門録」を、当然、繙いていたとみてよい。「及門録」という象山門人関係史料を目にした宮本は、同史料の重要性を再認識し、そこに記載されていない門人たちの存在にも気づき、自らが蒐集・保管してきた膨大な象山関係史料を分析しながら、追加記載すべき門人名を可能な限り増補しようと考えたことは想像に難くない。その結果が、井上論文より充実した宮本版「及門録」を作成し、それを自著『佐久間象山』に全文収録するに至ったもの、と考えられる。宮本自身が「及門録」を自著に収録し公開するに至った経緯を、次のように記している。

先生の門人は前後を通じて一万五千余人の多きに達したといふ。其江戸深川木挽町に住居して居られた頃の門弟名簿がある。当時先生の名声は天下に籍甚し、諸藩の名士が争って入門した偉観を知るに足る面白い史料である。左に之を掲載する⁷²⁾。

はたして象山門人が「一万五千余人」にも及んだか否かは疑問である。だが、象山の西洋砲術操練に参加した延べ人数、あるいは象山が諸藩の要請で藩邸に出張して集団教練した西洋砲術操練への参加者、等々を含めた延べ人数の総数で数えれば、一概に否定できない数字ではある。しかしながら、記載された門人たちの顔ぶれから判断して、井上論文が指摘したように、これを「江戸深川木挽町に住居して居られた頃の門弟名簿」と断定するには無理がある。否、宮本の『佐久間象山』所収の「及門録」を木挽町時代という限定された期間の門弟名簿と断定

する見方は、明らかに誤りであるとみななければならない。このことを以下に論証する。

宮本版「及門録」の内容と井上論文との相違点及びその発生理由

宮本が公表した「及門録」の内容は、前述のごとく、入門者自身の署名で入門年次別に連続して整然と記載された緒方洪庵、福沢諭吉、伊東玄朴など同時代の正統な私塾門人帳とは、書式や内容などの点で全く異なるものである。宮本版「及門録」の内容を時代的構成面からみれば、黒船が来航する嘉永6年(1853)6月から愛弟子吉田松陰の海外密航事件に連座して幕府に捕縛される安政元年(1854)4月までの、まさに象山塾が絶頂期にあった「僅か1年足らずの極めて短期間の西洋砲術門人名簿」ということになる。だが、記載人物の顔ぶれや記載枠組の時間的構成などからみると、宮本版「及門録」が2年足らずの短期間の門人名簿というのは明らかに誤りである。

すでに嘉永年間初期における象山の活動の中心は、前述のごとく、フランス人フランソワ・ハルマ(Francois Halma)の「蘭仏辞書」(1729)をオランダ商館長のヘンドリック・ドーフが長崎出島の通詞たちと日本語に翻訳した蘭日辞典『ハルマ和解(波留麻和解)』(完成は天保4年、1833)を、日本人の語学修得の重要性・利便性を主張して新語を増補した日本人用の『増訂和蘭陀語彙』に編纂し直して刊行することであった。

だが、この象山の一身をかけた蘭日辞書の出版計画は、翌年の嘉永3年4月、幕府天文方から不許可となってしまう。象山にとっては相当なショックであったに相違ない。だが、「一^{てつ}跌を経ざれば一知を長ず」(『省儻録』)を信念とする象山という男は、如何なる挫折や失敗にもめげず、それを次の夢の実現への契機にしてしまう極めてポジティブな性格なのである。決して過去の失敗や挫折は振り返らず、それらのマイナス経験を土台として次の夢の実現に向かうのである。そこが彼の偉大なところである。この蘭日辞書出版の挫折を境に、彼の活動は一転して教育活動、特に西洋砲術の教授活動へと向かうのである。

しかしながら彼は、その反面で、蘭日辞書の編纂中であつた前年の嘉永元年には、すでに藩命により西洋大筒(十二搦人砲三斤天砲)を铸造し、領内の松代西郊道島で試演をしている⁷³⁾。また、その時には、西洋砲術の門人をも受け入れて

教授活動をはじめており、早くも西洋砲術の普及活動を始動していたのである⁷⁴⁾。

深川藩邸に寓し、ハルマを本とし、且つ数種の辞書を参酌し増訂和蘭陀語彙の編纂に着手し、其の第一巻を浄書し出版伺書を幕府天文方に差し出す。此の間、又力を尽して砲術兵学に関する蘭書の斬新なるものを購ふ。一八一五年、荷蘭刊行の歩兵調練書亦其の中に在り。象山兵を募る。一に其の式に依り西洋真伝と称す。⁷⁵⁾

上記の記述から、早くも嘉永元年より象山が、西洋砲筒を鑄造し、門人を受け入れ、西洋砲術・西洋兵学の教授活動をはじめていたことは明白である。

また、象山が自分の教授する西洋砲術を、オランダ語原書の日本語翻訳書などから間接的に収集した高島・江川・下曾根などの流派と區別して、象山自らがオランダ原書を翻訳して獲得した西洋最新の砲術という意味で、嘉永2年(1849)より象山流砲術を「西洋真伝」と称したことも判明する。というのは、この前年には、「西洋砲術の開祖」と評されていた高島秋帆が、長崎出島のオランダ人を通じて修得した「高島流」の洋式砲術を「西洋流」と改称していた。だが、同じ西洋砲術とはいっても、「西洋真伝」と「真伝」を付けた象山の真意は、高島や江川の翻訳知識の借り物とは異なり、象山自らが蘭学原書を翻訳して獲得した正真正銘の西洋砲術の知識技術であるというプライドの高い象山の斬新性・優越性・信頼性を強調する名称であったとみられる⁷⁶⁾。

ところで、宮本版が公開した「及門録」は、内容的に3種類の門人帳の合冊で構成されている、と筆者は述べてきた。実は、このことが、他の4種(全集版、京大版、信教版、歴博版)の「及門録」の内容面で、記述に関して様々な相違点を惹起しているのである。宮本が紹介した宮本版「及門録」の第1の特徴は、内容構成の点にある。門人名簿の全体が3部(3種類の名簿)からなっており、最初の①「嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿」という表題の部分には252名の門人名が、次の第2の②「嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録」という標題の部分には134名の門人名が、そして最後の③「安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録」という表題の部分には67名の門人名が記されており、従って記載門人の総計は453名を数える。

また、門人名の頭書には、他の「及門録」と同様に、身分や帰属する藩名や主君名（藩主や幕臣）、入門月日、あるいは「離門」や「重出」（「及門録」に2度、3度と複数回、記載されている門人）、入門後の西洋砲術修得による仕官先、等々が付記されている。これら頭書の内容面では、他の「及門録」と顕著な相違はほとんどみられない。

ともかく、先の井上論文では門人名簿の全体が明示されていなかったが故に、宮本が自著『佐久間象山』に収録した「及門録」は、正式に「及門録」と銘打って公表された象山門人の全体像を示す最初の史料となった。この点では評価に値する。この宮本版「及門録」は、後述するように種々の問題点を内在する不確実な史料ではある。が、当時としては象山門人の全体的な概要を知ることできる最も有意義な史料であったことは確かである（その後、より信頼性の高い増訂版全集「訂正及門録」が刊行されると、宮本版に対する信頼は急速に低下し、これを使用する研究者は皆無となった）。そして、後に増訂版『象山全集』に収録される「訂正及門録」を作成する際に、後述する京大版「及門録」、信教版「及門録」を含めた計4冊の「及門録」を比較校合し、確実な門人名その他の記載内容を特定する上での基本史料として活用されるという参考史的役割をも担ったであろうことが推察される。以上の諸点を勘案すれば、今後の象山門人研究を進める上で、宮本版「及門録」は、今日なお象山研究、特に象山門人確定の必要史料として存在価値は十分に認められてしかるべき史料なのである。

なお、宮本の『佐久間象山』には、「及門録」の紹介の後に地元松代藩の門人で全国的には無名な門人たちの略伝（「藩の門人中で主な者を挙げその小伝を記述」）など⁷⁷⁾、他の「及門録」にはみられない象山関係史料（「先生と吉田松陰」「黒川良安と先生」「先生の交友」「北澤正誠」、そして象山の上洛に随行し象山の行動や最期を記録した北澤正誠『滞京日録』、等々の数々が⁷⁸⁾、初版には収録されてはいなかった貴重な史料と宮本の門人研究の成果と合わさって、第3刷の「増訂版」（昭和7年刊行の初版から8年後の昭和15年に刊行）には、何と480頁分も増補されて刊行されたのである。

また、先に井上が存在を指摘し、その概要を紹介した「及門録」に関する論文と、宮本版「及門録」とを比較検討してみると、前者記載の門人数が409名であるのに対して、後者の宮本版「及門録」に記載された門人名は453名を数え、

両史料の間には44名もの門人数の差違が認められる。この両史料における門人数の相違は、井上がみたという「及門録」に宮本が知る新たな門人を後から加筆したが故のことと推定できる。

井上・宮本の門人記載における入門時期の誤解

井上も宮本も、実際に手にしてみたという「及門録」を、深川藩邸を出て江戸木挽町に私塾を移転して以降の時期における象山塾門人帳であると理解している。この点は、両者に一致した共通理解である。だが、それは明らかに間違いである。前述のごとく、象山の西洋砲術教授は深川藩邸に居住していた嘉永元年（1848）から開始されており、しかも、その当時から集団での砲術操練を可能とする多数の門人が存在していたのである。黒船来航前後の幕末期には、封建制度の基本的な枠組みである「藩」という地域的区分はあってなきがごとくで、象山の私塾にも50を超える全国諸藩から入門者が殺到し共に学んでいた。当然、私塾では互いに交友を深め、政治や外交はもちろん、生活レベルにまで至る情報交換もなされていたに違いない。幕末期の江戸や大阪の私塾に、全国から集った塾生たちにとっては、自らが所属する藩意識よりも内憂外患に揺れる日本という国家の行く末を憂いる国家意識の方が強かったのではないと思われる。さすれば、幕末期の私塾は、封建社会の垣根である藩や身分を越えて出会い、国家レベルの様々な情報が流通する情報基地の役割をはたしていたといえる。

ところで、年々、急増する門人に対応すべく、象山は、嘉永4年（1851）5月、藩邸を出て江戸木挽町に私塾を移転した。新たに開設された象山の西洋砲術塾は、安政元年（1854）4月の門人・吉田松陰の海外密航事件に連座し、象山も連座して罪科を問われ、幕府に捕縛されてしまう。この時点で、実質的には木挽町の象山塾は閉塾のやむなきに至るのである。それ故、木挽町における象山塾の存続期間は、僅か3ヵ年に過ぎない短期間であったということになる。

だが、この否定しえない事実と反する「及門録」の理解と扱い方が、宮本版「及門録」の門人記載の時系列上の配列問題を惹起している。宮本版「及門録」の内容は、①「嘉永六年癸丑三月砲術門人々簿」、②「嘉永六年癸丑砲術稽古出座帳抄録」、③「安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録」の3種の名簿の合作で構成されている。即ち、これによって宮本版「及門録」は、全く別々の3冊の門人名簿を

1冊に合作した名簿であることが分かる。しかも、合作された3冊の別々の名簿史料の記載期間は、嘉永6年(1853)3月から安政元年(1854)4月までの約1年間となっている。これは、明らかに前述の3年間に及んで木挽町に象山塾が存続したという事実(存在時間)と符合しない。

叙上の説明により、宮本版「及門録」が3冊の名簿の合作であるという内容構成上の事実が明らかになった。次に、記載された内容面でも大きな問題があることを指摘しなければならない。それは①と②③との史料の本質的性格の相違である。②③は幕末期の軍事科学系私塾に特有な特徴、即ち特定の日に実施された西洋砲術の野外繰練の記録であり、そこに記された氏名は、当日、繰練に参加した門人名なのである。従って1日でも繰練に参加すれば当該の門人名簿に記載され門人扱いとなる。それ故、例えば同じ年に実施された繰練に3回参加すれば、その人物の氏名が「及門録」の中の同じ年の名簿に3回記載され、同一門人の「重出」という問題が発生する。事実、宮本版「及門録」には「二重出」「三重出」という門人名の重複記載の事例が多数存在するのである。

前述の緒方洪庵や福沢諭吉などの私塾の門人名簿では、氏名は入門時に1回だけ記載するもので、しかも入門者自身の「自署」を原則とする門人名簿なのである。従って「重出」はありえない。そこが伝統ある医学系や語学系の洋学塾と新興の軍事科学系洋学塾との門人名簿における根本的な相違点なのかも知れない。

上述の特徴は、「及門録」を構成する②③の史料が内在する問題である。それでは①「嘉永六年癸丑三月砲術門人々簿」の内容的な性格は何か。それは②③の史料タイトルが示すように特定の年月日に実施された象山一門による西洋砲術繰練の出席者名簿ではなく、「嘉永六年癸丑三月砲術門人々簿」と明記されているように、象山が西洋砲術教授をはじめた少なくとも嘉永元年から同6年3月までの期間に入門していた門人の全てをまとめた名簿と理解するのが妥当である。

それに反して、②の名簿の標題に付されている「嘉永六年癸砲術稽古出座帳抄録」の「稽古出座帳抄録」及び③「安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録」の両史料に付記されている「稽古出座帳抄録」という名簿の性格を表す記載は、明らかに①の「稽古出座帳抄録」という形容詞のない名簿史料との性質の相違を示している。即ち、①は単なる門人名簿であるが、②③の史料は、某年某月に実施された西洋砲術の「稽古」(野外繰練)に「出座」(出席)した人物の「抄録」(全体で

はなく抜き書き) という意味である。しかも「抄録」ということは、参加門人の全体ではなく一部であることを意味する。なぜ、稽古に出席した門人全員を記録しないで一部を「抜き書き」したのか。見方を変えれば、記録された門人以外にも参加した門人が存在したことを意味する。それでは、記載しなかったことの原因は何であったのか。それは、参加者氏名を失念したのか、それ故に名簿記載ができなかったのか、が問題発生理由として考えられる。

さらに①の「嘉永六年癸丑三月砲術門人々簿」は、明らかに②③の史料とは性格が異なる。同史料は、特定年月に実施された西洋砲術稽古への出席者の名簿ではなく、私塾に入門者を受け入れはじめてから以降の西洋砲術門人名簿ではある。が、その場合、同史料は西洋砲術・西洋兵学の軍事科学系洋学の門人だけに限定せず、儒学や洋学など様々な学習目的の門人たちも「砲術門人名簿」の中に組み入れた名簿と理解するのが妥当である。

いずれにしても、宮本版「及門録」の門人記載のルールは、曖昧で説明がつかず、矛盾に満ちた門人録と言わざるをえない。以上のような宮本版「及門録」の分析と解釈に関する指摘が妥当であることを証明してくれる興味ある事実を、次に例示しておきたい。

Ⅲ. 「及門録」の誕生意図と作成経緯

門人名簿の作為性の事例－「及門録」の作成経過と問題点

まず、3部構成で編成されている宮本版「及門録」の第1の部分、即ち①「嘉永六年癸丑三月砲術門人々簿」の最初に記載されている門人たちを取り上げる。何故ならば、そこには「及門録」の不可思議な事実が具体的にみえるからである。

実は、象山は、嘉永2年(1849)の5月26日、門人の白井平左衛門が象山に献上した「西洋書并訳本等」の中に「大銃エキセルシートと申す訳書一冊御座候」故に、これを拝借し内容を読んで理解した象山は、「開善寺馬場に於て百間水平打試例の野戦銃にて」「打試」(実弾練)を実施した。その時の練への参加者と実射の結果を、各人の標的への的中状況図を付して記録し、松代藩の中僕一平(江川の西洋砲術塾での同門者)に知らせている⁷⁹⁾。

この嘉永2年5月の西洋砲術試演が、現存する象山史料の中で確認できる最初

の象山一門による砲術繰練の史料である。と同時に、この繰練時にはすでに門人が存在していたことは、14名の門人と彼らの実弾繰練を試み、その結果を記録していることから明かである。それ故、この繰練こそは、象山の西洋砲術教授の起点であり、従来の嘉永3年から砲術教授を開始したという見方は修正されなければならない。⁸⁰⁾

注目すべきは、そのときの砲術繰練に参加した門人名簿が、宮本版「及門録」①史料「嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿」の原型になったものと思われることである。両者の関係を対照図で説明すると、下記ようになる。左段が繰練参加者名簿、右段が「及門録」①の最初の部分である。はたして両者を並べて比較すると、何がどうみえてくるか。これによって、ほぼ同一内容で嘉永2年実施の「三斤野戦銃四尺的百間水平討試中附佐久間修理門弟⁸¹⁾」と「中侯宛の西洋砲術繰練報告書簡⁸²⁾」とを基にして宮本版「及門録」の①の最初の部分が作成されている証左とみることができる。

なお、表中のアンダーラインは、門人名などの表記の相違（宮本版「及門録」の誤記）を指摘するために筆者が付したものである。また、アンダーラインは門人名や藩名の史料の誤読により発生した相違である。

「中侯宛の西洋砲術繰練報告書簡」

宮本版「及門録」の冒頭部分

三斤野戦銃四尺的百間水平討試中附 佐久間修理門弟		嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿		
白井平左衛門	①	(松代藩)	白井平左衛門	①
水野 瀬兵衛	②	(同)	山寺 源大夫	③
山寺 源太夫	③	(同)	水野 瀬平	②
北山 安世	④	(同)	蟻川 賢之助	⑤
蟻川 賢之助	⑤	(同)	北山 安世	④
増田 助之丞	⑥	松本藩	岡 無理彌	
長谷川 深美	⑦	(松代藩)	離門 金兒 忠兵衛	
高野 車之助	⑧	江戸人	永井 庄三郎	⑭
金井彌惣左衛門	⑨	(松代藩)	金井彌惣左衛門	⑨
岩下 富馬	⑩	江川傳書三冊口伝	増田 助之丞	⑥

佐藤 忠之進	⑪	(松代藩) 離門	長谷川 深美	⑦
和田新左衛門梓 和田 森之助	⑫	(同)	藤岡 伊織	
御先手組小野 大野健左衛門	⑬	(同)	岩下 富馬	⑩
鐵砲師 長井 庄三郎	⑭	(同)	佐藤 忠之進	⑪
右之通御座候 以上 五月廿六日 行司 白井平左衛門		松平伊賀守様家来	八木 剛助	
		飯田藩	太田 玄策	
		(松代藩)	高野 車之助	⑧
		東福寺村	和田 盛之助	⑫
		(松代藩)	大野健左衛門	⑬
		(同)	寺澤 六之助	

(増訂『象山全集』の史料より筆者作成)

上掲の象山門人に関する2つの門人名簿(冒頭部分)を比較すると、両史料に記載された門人名で共通する氏名は、記載順序に若干の相違は認められるものの、内容的にはほとんど共通している。このことは、3部構成からなる宮本版「及門録」の第1部①「嘉永六年癸丑三月砲術門人々簿」の冒頭の14名の門人名は、黒船来航の直前である嘉永6年(1853)3月に「開善寺馬場に於て百間水平打試例の野戦銃にて」「打試」(実弾繰練)に参加した門人名簿が原本となって作成されているとみて間違いないであろう。

また象山は、この2年後の嘉永4年2月26日に生萱村(旧埴科郡生萱村、現在は千曲市生萱)で西洋砲術演習を実施し、それに参加した門人名簿「生萱村大砲試演点放人員次第書⁸³⁾」も残している。その試演は、象山一門14名(象山を含む。門人は松代藩の他に紀州藩、中津藩、松前藩など他藩の門人も参加)による「西洋^(ママ)制五十斤石衝天砲」の実弾演習であった。5名1組で試射したが、個々の担当回数は水野・菅・増田の3名は4回と最も多い。が、蟻川・岡見は3回、岩下・藤原・松木は2回、三好・目良・下國・三谷・森は1回、それぞれ試射を担当した。その内容を一覧表にまとめると、次の通りである。

いきがや
生萱村（現在は千曲市生萱）「西洋砲術演習名簿」（嘉永4年2月）

辛亥二月二十六日西洋制五十斤石衝天 砲演習 人員次序		門人名	備考
第一発		(松代藩) 水野 瀬平	①
		(松代藩) 菅 鉞太郎	②
		(松代藩) 増田助之丞	③
		(松代藩) 岩下 富馬	④
		(松代藩) 蟻川賢之丞	⑤
第二発	紀藩久能丹波守家来 奥平大膳大夫様御家来	(松代藩) 菅 鉞太郎	②
		(田丸藩) 三好小三郎	⑥
		(松代藩) 水野 瀬平	①
		(中津藩) 岡見 彦三	⑦
		(松代藩) 増田助之丞	③
第三発	松前伊豆守様御家来 紀藩水野丹後守家来 松前伊豆守様御家来	(松代藩) 蟻川賢之丞	⑤
		(松代藩) 岩下 富馬	④
		(松前藩) 藤原 重太	⑧
		(新宮藩) 目良 造酒	⑨
		(松前藩) 下國 殿母	⑩
第四発	紀藩水野丹後守家来 松前伊豆守様御家来	(新宮藩) 三谷 左馬	⑪
		(松代藩) 水野 瀬平	①
		(松代藩) 蟻川賢之丞	⑤
		(松代藩) 松木源太郎	⑫
		(松前藩) 藤原 重太	⑧
第五発	紀藩久能丹波守家来	(松代藩) 増田助之丞	③
		(田丸藩) 森 安藏	⑬
		(松代藩) 菅 鉞太郎	②
		(松代藩) 松木源太郎	⑫
		(中津藩) 岡見 彦三	⑦

第六発	(松代藩)	菅 鉞太郎	②
	(松代藩)	水野 瀬平	①
	(松代藩)	増田助之丞	③
	(中津藩)	岡見 彦三	⑦
	(松代藩)	佐久間修理	⑭
以上	(松代藩)	佐久間修理	

上記のように、試射の担当回数だけの氏名が砲術演習記録には記されている。実は、この回数と同様の論理で繰練出席への氏名が記録され、それ故に出席回数の分だけ門人名簿に氏名が登場することになる。従って、同一門人の「重出」「三重出」などの「重出」という現象が生じ、これを門人名簿から差し引かなければ門人の実数をえることはできないことになる。

藩命で集団入門した中津藩—中津藩の象山門人たちと福沢諭吉の関係

幕末期には藩士の西洋砲術教育を集団訓練の方式で象山塾に委嘱する藩も現れた。中津藩、鳥取藩、佐倉藩、津山藩、加賀藩、上田藩、大野藩、土佐藩、等々がそれである。それ故に、宮本版「及門録」には、藩別の集団入門を思わせる同藩門人名の連続記載が目立つのである。しかし、何と言っても集団教育の典型で入門者数の最も多かったのは、九州中津藩の場合であった。薩摩藩主島津重豪（1745—1833）の次男昌高（1781—1855）を第5代藩主に迎えて以来、中津藩は軍事面をはじめ積極的に洋学受容を進めてきた。特に幕末期の同藩を統治した第8代藩主の奥平大膳^{まさもと}昌服（1831—1901）の時代は、黒船来航前夜から軍事力の西洋化に意を注ぎ、洋学者の中でも、特に「東洋道徳・西洋芸術」思想を説く象山を最も高く評価し、大砲製造や藩士教育を全面的に委任したのである。中津藩から最初に象山塾へ入門し、藩士の集団入門に至る道筋を藩主に説いたのは、同藩の砲術師範である「島津良助」（正しくは「介」という藩士であった。高齢ながら熱心に修業に取り組む島津について、象山は、次のように人物評している。

奥平様には島津良介と申人御座候所、当年六十一のよし。背少しくぐみ候程の人に御座候が、その屋敷にて甲州流の兵学致教授候よし。此人西洋のこ

とは不案内に候へども私をけしからず信仰にて同志の人をかたらひ候て遂其君家の兵制を改め候様に致し候事関心の事どもに御座候。⁸⁴⁾

この島津の進言を受けて藩主の奥平大膳大夫は、一藩あげて象山門人となさしめ、江戸藩邸に象山を西洋砲術師範として招き、藩士たちに集団で講義を受けさせ実技の修練をさせることとした。この藩主の決定を象山に伝えるべく、招聘の使者として指名されたのは内用人で、すでに象山門人となっていた同藩砲術師範の島津良介であったのである。

なお、江戸の中津藩奥平家中屋敷は、象山塾に近い同じ木挽町の汐留にあり、それは周囲500間(900メートル)、広さ1万坪余(3万3000平方メートル)という広大な敷地の屋敷であり、相当数の藩士が一度に集団訓練できる格好の練所であった。

下記の史料は、その中津藩奥平家当主から象山宛に藩士の集団教練を依頼する口上である。

佐久間修理殿へ

大膳大夫 口上

家来近海防禦手当申付候者共、西洋砲術御入門頼入度、許容の上は名前等の義、委細島津良介より可申述候。右段厚頼入度使者差越候。⁸⁵⁾

これにより、象山は、毎月3回又は5回、中津藩邸に出張し、西洋砲術・西洋兵学を集団教授することとなった。この中津藩の招聘(海岸防禦担当の藩士全員の集団入門と出張教授)を大変に名誉なことと喜んだ象山は、郷里の母親に書簡を送り、「奥平様より御頼み一條彌と相成り御使者被遣候⁸⁶⁾」と伝えている。

右御頼みの趣承知仕候趣御あいさつ申候所、すぐに老四人入門、大砲鑄立ゲウエールも張立度と申事にて其手くばりに相成又目付役に候とて家中のもの日稽古に罷出候 (後略)⁸⁷⁾。

実は、このとき集団入門した下記の14名の中津藩士が、宮本版「及門録」①

「嘉永六年癸丑三月門人々名簿」に、「奥平大膳大夫様家來」としてそのまま記載されているのである。このことは、中津藩での集団繰練の名簿が、そのまま象山門人名簿の作成に原本として援用されたことを物語っている。以上の経緯によって、まさに「及門録」の作成手法とその過程を具体的に理解することができる事例である。

なお、各種の象山関係史料には「壺四名」と記されているが、それに既に入門済みで引率係の「島津良介」（前掲「及門録」一覧表のNo. 46）を加えると、次の合計15名の集団入門が「及門録」に最初の集団入門者として記された門人の一覧表を形成しているのである。

【象山塾に集団入門した中津藩士の名簿】

① No. 46	奥平大膳大夫様家來	島津 良介	中津藩
② No. 61	奥平大膳大夫様家來	石川 休右衛門	中津藩
③ No. 62	奥平大膳大夫様家來	島津 文三郎	中津藩
④ No. 63		岡見 彦三	中津藩
⑤ No. 64		櫻川 三郎右衛門	中津藩
⑥ No. 65		横山 犀藏	中津藩
⑦ No. 66		高橋 三子	中津藩
⑧ No. 67		岡見 梢	中津藩
⑨ No. 68		磯見 瑞枝	中津藩
⑩ No. 69		岡見 半九郎	中津藩
⑪ No. 70	留守	星野 平八	中津藩
⑫ No. 71	奥平大膳大夫様家來	大谷 市之助	中津藩
⑬ No. 72		濱田 鎌之助	中津藩
⑭ No. 73		戸倉 新右衛門	中津藩
⑮ No. 74		飯島 爲三郎	中津藩

なお、中津藩から象山塾入門の口火を切ったのは、前述のごとく、同藩の軍学者「島津良助」(宮本版「及門録」の記録順位46番)であった。が、その高齢な彼を補佐すべく入門したのが嫡男の島津文三郎(同 No. 62)であった。彼ら島津父子は、象山塾での修練の成果を背景に藩主を説得し、中津藩の軍事面での近代化(西洋化)を推進するという目的を実現し、藩士のほとんどを象山門人とすることに尽力した功労者であった。

また、最初の14名の集団入門の直後にも第2陣として中津藩から35名が集団入門し、さらに第3陣として21名が集団入門している。そして同年の8月には10名が第4陣として集団入門している。結局、個人入門も含めると、宮本版「及門録」で判明する中津藩の入門者は50余藩の中で最も多い92名を数えることになる。他藩の場合も、佐倉藩、薩摩藩、大野藩、佐土原藩、土佐藩、尾張藩、上田藩、大垣藩、など、藩命を受け集団で入門する藩士が多かった。

没交渉と思われてきた福沢諭吉と象山の深い関係

ところで、幕末期の中津藩出身の洋学者といえば福沢諭吉(1835—1901)である。これまでみてきたように中津藩と象山との関係は、藩主を筆頭に極めて親密であり、黒船来航の前後には、中津藩の藩士のほとんどが象山塾に集団で入門し、また中津藩邸に象山が定期的に出張教授して西洋砲術・西洋兵学などの軍事練を受けっていたのである。

だが、福沢諭吉の場合は異なっていた。彼は、幕末維新期に私塾「慶應義塾」で蘭学や英学などの洋学系人材を多数育成し日本近代化に多大な貢献をなした。だが、それ以上に、明治維新後の日米新時代における新生日本の文明開化の在り方に関して、羅針盤のごとき国家的役割を果たした人物、と評してもよいであろう。

その福沢は、黒船来航のときが20歳、明治維新の時が35歳であった。黒船来航で日本中が喧噪と混乱、不安と恐怖の渦中にあるとき、福沢は、加藤弘之や西村茂樹、津田真道などの武家出身者のように、国家人民の防衛という武士道精神を発揮し国防的契機で西洋軍事科学を修得すべく江戸の象山塾に入った人たちとは異なっていた。福沢は、当時の青少年たちを興奮させた尊皇攘夷や西洋軍事

科学（西洋砲術・西洋兵学）などには全く興味がなかったのである。

それ故に彼は、自ら洋学（蘭学）を学ぶことは望まなかったのである。だが、時代に敏感な実兄の強い勧誘を受けて新時代の蘭学修業のメッカである長崎遊学を執行するという極めて消極的な有様であった。それが黒船来航の翌年のことである。ところが、その翌年の同2年（1855）、彼の人生を大きく左右するできごとがおきる。当時の日本を代表する蘭学（西洋医学）の大家、緒方洪庵との遭遇である。これを契機に、福沢は、緒方が大阪で主宰する蘭学塾「適塾」に入門し、過酷な蘭学修業に寸暇を惜しんで挑むのである。

福沢が適塾に入る頃の中津藩は、前述のごとく、藩命で藩士のほとんどが江戸の象山塾で西洋軍事科学（西洋砲術・西洋兵学の理論と実践）の教育を受けていた。当時は象山塾の全盛期であった。だが象山は、安政元年（1854）4月、門人吉田松陰の海外密航事件に連座して幕府に捕縛され、地元信州での蟄居という処罰を受ける。これによって、全国諸藩の門人であふれていた江戸の象山塾は、実質的には閉塾のやむなきに至るのである。

上記のような中津藩と象山との関係が極めて親密であったことを、福沢が知らないはずはなかった。しかし当時の彼には、西洋砲術や西洋兵学など国家人民の防衛問題に関わる軍事科学系洋学の必要性、またそのための尊皇攘夷という戦意高揚をもたらした黒船来航などの外患問題も、何ら興味の対象ではなかったのである。それ故に彼は、象山塾には通わず、また藩邸での集団教育も受けた形跡はない。象山を拒否した訳ではなく、彼自身が対外問題や軍事問題、特に軍事科学系洋学にあまり興味を示さず無関心であったということである。

それ故に筆者は、最も多くの藩士を象山塾に送り込んだ中津藩にあって、同時代を生きた福沢と象山との関係は否定的で、全く無関係であったのか、という疑問を抱いてきた。両者とも同時代において、軍事系と語学系の違いはあっても、同じく西洋を見詰めた洋学者であったが、両者の蘭学修業の契機や目的、内容が、全く別世界のごとく極めて対照的であったがために、対立的ではなくとも疎遠な関係にあったのではないかと考えてきた。

ところが今回の論文で、象山思想「東洋道徳・西洋芸術」を担った門人たちの軌跡—門人帳史料「及門録」の真実—を追求していて、特に中津藩の門人たちの軌跡を調べてみると、福沢と象山が決して無関係ではなかったことが判明した。

本稿の歴史的な評価に関わる嬉しいファインディングの一つである。

まず第1に、61歳という高齢ながら模範的な西洋砲術の修業をなしとげた門人で、中津藩軍事師範役の島津良介と、その嫡男である島津文三郎という島津父子の存在。実は、彼ら島津父子は、福沢とは縁戚のごとくに親交の深い関係にあったのである。論吉が、28歳の文久元年（1861）に同藩の上級武士で江戸定府の「土岐太郎八」の娘（錦、17歳）と結婚をする際、何と媒酌人の大役を務めたのが、文三郎夫妻であった、というのは驚きであった。

夫人は阿錦（「おぎん」、一般には「きん」といい、同藩土岐太郎八の次女であって、同家は二五〇石の大身であったうえに江戸定府として五〇石の加俸も受けていたから、論吉の家とは身分家柄に著しい差があった。（中略）論吉は時に数えて二十八歳、きん夫人は弘化二年（一八四五）五月十九日に江戸で生まれて十七歳、媒酌人は島津文三郎夫妻であったが、その島津が佐久間象山門下のすぐれた砲術家であった。⁸⁸⁾

しかも、夫人の父親の土岐太郎八も象山門人だったとは驚きである⁸⁹⁾。象山側の史料からも、仲人の島津文三郎、結婚相手の父親である土岐太郎八は、どの「及門録」にも記された象山門人であった。福沢は象山と面会する機会はなかったと思われる。が、象山の学問思想に関する理解は、身近な象山門人たちから情報を得てかなり深いものであり、中津藩に対する象山の貢献に恩義を感じこそすれ、決して悪い心証ではなかったとみてよい。

第2に、中津藩で忘れてはならない福沢と親しい人物は、同じく象山門人（宮本版「及門録」の記録順位63番）で、福沢の才能を見抜き彼を江戸に呼び寄せ、蘭学塾を開かせた岡見彦三（本名は清熙^{きよひろ}、1819—1862、中津藩の上級藩士・岡見清淳の次男）の存在である。彼は、嘉永3年（1850）年、同藩の藩士十数名と共に象山塾に入門して洋式砲術を学び、同藩に洋式大砲を铸造させ兵制改革を断行した兵制改革の中心人物である。その彼が、安政5年（1858）に、当時、日本洋学界を代表する大阪の緒方洪庵塾の塾頭であった福沢を、その優れた語学力と将来の活躍を見抜いて、江戸築地の中津藩中屋敷に招き、慶應義塾の原点となる蘭学塾を開かせ、同塾を物心両面で支援した人物であった。実は、その岡見彦三もま

た象山門人だった⁹⁰⁾。まさに慶應義塾と共に生きた福沢にとって、象山門人の岡見は、公私に亘って人生の恩人と呼ぶべき人物だったのである。

さらにまた、象山門人である中津藩出身の「甲斐織衛」（1850-1923、別名「理兵衛」、宮本版「及門録」の「利兵衛」という記載は誤り。「及門録」の記録順位は第80番。慶應義塾入学は、同塾が第2段階に入った新銭座時代の明治元年（1868）で、19歳。入塾順番は慶応四年の鉄砲州時代から数えて第六三番目）は、維新後、慶應義塾に学んだ。卒業後は、明治11年（1878）、福沢（慶應義塾）が、兵庫県の要請で神戸区（現在の神戸市）に神戸商業講習所（現在の兵庫県立神戸商業高等学校の前身）を設立した際、福沢の推薦で初代校長（支配人）に就任し、同校の紆余曲折を乗り越え、今日に至る基礎作りに尽力したのである⁹¹⁾。

叙上のように、幕末期に西洋砲術・西洋兵学に象徴される軍事科学の修得を目的に象山門人となって洋学を学んだ中津藩の島津良介、島津文三郎、岡見彦三、甲斐織衛、土岐太郎八などは、維新後も、福沢諭吉を支え盛り立てながら日本近代化に貢献する人生を展開したのである。

これに反し、象山の方は、文久2年（1862）、門人吉田松陰の海外密航事件に連座して9年間という長い蟄居謹慎から解放され自由の身となる。が、翌年、皮肉にも処罰を受けた幕府からの下命（「陸海御備向掛手附御雇」）を受けて、過激な尊皇攘夷運動の高揚する京都に上洛することとなる。松代藩の象山門人たちは、動乱の京都に象山が上洛することに生命の危機を直感して大反対、「引留陳情書」を藩当局に提出する。また、松代藩以外の門人たちも反対し説得する。だが、天命を受け天意に殉ずる覚悟の象山は、全ての反対を押し切り、朝廷と幕府の要人たちに日本の取るべき進路と対応策を開陳すべく上洛する。元治元年（1864）3月のことであった。松代藩や他藩の門人たちの多くが象山の身を案じ、護衛として随行したのである。

上洛後の象山は、将軍家茂・一橋慶喜・山階宮・中川宮・伏見宮・西郷吉之助、等々の幕府・朝廷の要人たちに、公武合体・開国和親・教育研究の学術交流などの新国家構想の自説を開陳して回る。だが、上洛して3ヶ月余りの後、同年7月、三条木屋町の寓居に帰宅する途中、昼間の京都市中で攘夷派の刺客たちに馬上を襲撃され斬殺される。象山、覚悟の死であった。

松代藩犯人説が出るほどに、象山の悲劇に対する松代藩の決定は非情であった。

事件の3日後には、馬上にて斬殺されるのは武士の醜態と処罰され、俸禄召し上げはもちろん、松代にある象山の家屋や敷地の全てを没収された。さらに嫡男の恪二郎(1848-1877)には蟄居を命じたのである。佐久間家は断絶である。遺された佐久間家の家族を救い、物心両面で面倒をみたのは門人で義弟の勝海舟(1823-1899)を中心とする門人たちであった。

明治2年(1869)、海舟を筆頭とする門人たちの働きかけにより、嫡子恪二郎は悲願の佐久間家の家名再興となる。同時に海舟は、恪二郎の将来を案じ、慶應義塾に入学させ、福沢諭吉に佐久間家の当主となる恪二郎の教育を託すのである。それは、慶應義塾が新銭座から三田に移転した明治4年(1871)4月のことで、恪二郎は慶應義塾の創立から数えて第161番目の塾生となったのである。

なお、慶應義塾や適塾などでは入門には証人が必要であった。何と恪二郎の証人は塾長として福沢を支えてきた慶應義塾第2の実力者である小幡篤次郎(1842-1905)であった。佐久間家や勝家と小幡家は縁戚でもなく、親交もなかった。象山を知る福沢の特別な計らいと思える美談である⁹²⁾。

学業を卒えた恪二郎は、明治6年(1873)に司法省に出仕、愛媛県判事を拝命した(当時の司法省には、象山門人の高官が幾人もいた)⁹³⁾。恪二郎の慶應義塾入学に関しても、海舟の個人的な働きではなく、福沢を取り巻く中津藩の象山門人たち、さらには晩年まで福沢と親交の深かった象山門人の加藤弘之(1836-1916、初代東京大学総理)など、様々な象山の門人や関係者たちから、福沢への嘆願がなされたものと思われる。ともかく、福沢に次ぐ大物の小幡篤次郎が証人とは驚きであった。

以上は中津藩の場合であるが、黒船来航の前後には、人気絶頂の象山に集団教授を依頼する藩が急増し、他にも伊賀藩、越前小浜藩などがあった。また、それら藩命による入門者は、宮本版「及門録」では、最大多数の中津藩の入門実数者が92名と断然多く、門人帳の実数全体421名の約22パーセントという圧倒的多数を占めている。次いで象山自藩の松代藩が65名(15パーセント)、越前大野藩22名(5パーセント)、上田藩14名(3パーセント)、佐倉藩13名(3パーセント)など、諸藩からの入門者が多いことが判明する。黒船来航前後の数年間だけでも全国50余藩から421名の入門者が象山塾に殺到し、西洋砲術・西洋兵学などの軍事科学系洋学を中心に学んでいたのである⁹⁴⁾。

なお、注目すべきは勝海舟などの幕臣関係者の入門で、判明するだけでも21名(家臣を含む)を数える。この数は、井上哲次郎の論文「及門録」に、旗本の門人には「殿と云ふ字を附けたのは、海舟の外に34名ある」との証言からみれば10数名も少ないことになる。このような井上のあげた数字よりも宮本版「及門録」における幕臣の数が少ないのは、この「及門録」に記載のもれた人物の存在であり、さらには「及門録」で氏名に「旗本」や「殿」という身分や敬称が記されておらず、史料的裏付けをもって「幕臣」と判定することが不可能な故に、結論的には門人分類では「不詳」の中に入れてからである。

なお付記しておくべきは、中津藩の史料に入門者の「名前等の義、委細島津良介より可申述候」とあるように、入門時に各自が塾側が用意した門人帳に自署したのではなく、入門する藩側の担当者のもとめ役が自藩の入門者の氏名を一括記載して教授する師範側に提出するという方式がとられていたことである。従って、前述の砲術練練の稽古への参加者名簿の他に、門人の多少に関わらず、藩別の入門者名簿も存在したことになる。宮本版「及門録」は、そのような稽古日ごとの参加者名簿や藩別稽古への参加者名簿などを、象山没後に寄せ集め、全体を3部構成で門人帳として1冊に編集したものといえる。従って、宮本版「及門録」にも、他の「及門録」(京大版、信教版、全集版)の場合と同様に、同一門人の重複記載(「重記」や「三重記」など)という問題が存在するのは当然のことである。

以上に指摘したごとく、井上が繙いた「及門録」と、宮本が使用した「及門録」とは、種々の相違点や問題点の存在から判断すると、はたして同一の史料であったのか、それとも別物であったのか。しかし、これまでの論証により、「及門録」は連続する一冊の史料ではなく、膨大な象山史料の中から西洋砲術を中心に門人関係の部分抜き書きして、入門時期や学習内容などの観点から整合性のある内容に整備して、数冊の門人名簿に仕上げたものと理解するのが自然であり妥当であると考える。

結局、本稿におけるこれまでの論証により、象山門人帳の「原本」そのものは存在せず、象山没後の明治期に入って門人有志が恩師を追悼し、象山塾を長く歴史上に顕彰するため、各種史料を寄せ集めて1冊の門人帳「及門録」として作成したものとの理解に逢着した。今、この仮説の証明に挑み、関係史料を分析してきた本稿のファインディングスは、上記の筆者の仮説が、史料的にみても、かな

りの証明可能性をもって成立するものだ、と信じてやまない。

ともかく、宮本版「及門録」が入門者の入門順に時系列で統一的にまとめられた象山門人帳ではなく、象山没後に、門人たちが、往事における同門の門人たちの記憶を呼び覚まし、それに各種の門人名簿を合冊して作成した合成史料であることは間違いないとみてよい。特に、京大版と信教版の場合は「毛筆写本」なので、それらが筆跡の異なる幾人かの書写を寄せ集めた合冊であること、しかも墨色の書写の間に朱色で追加挿入された門人名や墨色で削除された門人名も多く、可能な限り正確な合成版を作成しようとした苦労が滲み出ている。なお、毛筆書写史料で「墨色」の間に「朱色」の書き込みがなされている写真版史料（京大版、信教版）の解読と分析は、既に別稿で解読し分析して公表してあるので参照されたい⁹⁵⁾。

門人総数の相違や記載されていない門人の存在、あるいは同一門人の重複記載の多さとその発生要因の問題、さらには筆者が前記の別稿で各種の「及門録」（全集版、京大版、信教版）を詳細に分析し比較校合した結果、基本的な記載事項に関する誤謬の多さ（門人名、帰属する藩名・藩主名、入門時期が判明する門人のみ入門年月日を記載）など、種々の問題が明らかにされたことなどを総合的に勘案すると、筆者が提示してきた仮説「各種の「及門録」は「原本」あるいは「原本の写本」ではなく、象山没後に門人たちが作成した合成史料であること一を事実として認定することができる根拠となるのではないか。

いずれにしても井上論文で紹介された「及門録」は、宮本版「及門録」を構成する門人帳の一部であると推察することはできる。井上が存在を指摘し公に紹介した「及門録」を、宮本が把握し参考にしていたことは確かであろう。だが、宮本は、井上論文をみて、その不備に気付いた。自著に収録して公刊する門人帳「及門録」としては、余りにも誤謬が多く、これを可能な限り誤りの少ない象山門人を一人でも多く収録したものに校訂増補することが望ましいからである。それ故に宮本は、長年、蒐集してきた膨大な象山関係史料を比較校合しながら、新たな象山門人を発見して増補改訂して宮本版「及門録」を作成し、これを自著の増補版『佐久間象山』に収めて公表した、と考えられる。それ故、井上版「及門録」（正確には井上が某氏からみせられた「及門録」を修正し加筆し増補した門人帳、それが宮本版「及門録」ではないか。そのように考えることができる。

IV. 宮本仲の発表した象山門人帳「及門録」の全貌と問題点

次に、宮本版「及門録」における誤謬や特徴を整理分析して一覧表にまとめ本文の末尾（注記の前）に紹介する。なお、宮本版「及門録」を理解されるに際しての注意点として、まず、そこに記載される基本的事項に関する様々な誤謬（門人や藩名・藩主名などに誤読・誤記・誤解など）を具体的に指摘しておきたい。筆者は、既に存在の明らかな「及門録」（全集版、京大版、信教版）の比較分析の研究を済ませているが、それらとの比較校合をした結果から、宮本版「及門録」において指摘できる誤謬を、史料本文や備考欄に明記しておくこととする⁹⁶。

なお、本文中の記載文字の下線は誤字や誤解を示している。さらに「備考欄」の下線および書き加え文は、筆者のこれまでの研究成果（注6、7に示した論文）から誤謬と判断し訂正した箇所、あるいは当該の象山門人に関して必要と思われる補足説明である。

宮本版「及門録」の特徴—象山研究上における貢献と問題点

後記（68頁以下）の宮本版「及門録」を一覧表にしてみれば一目瞭然であるが、まずは宮本仲が公開した象山門人帳「及門録」の主な特徴点をあげると以下の通りである。

- (1) 特徴の第1は、同史料が、同一門人の重複記載を含めて総計453名という多数の象山門人を、象山研究史上はじめてリストアップし公表したこと。著名ではあったが象山の私塾に、これほど多くの門人が存在したことは想像を絶するものであり、この宮本版「及門録」を通して象山の教育活動の量的側面と質的側面、及び彼の幕末期における日本近代化に貢献する多種多様な人材を育成した教育活動の歴史的意義（影響力）を再認識、再評価することの必要性が改めて求められることを明らかにしたこと。
- (2) しかも、宮本版「及門録」の記載対象となった入門者の対象期間が極めて短期間であり、黒船来航時の「嘉永六年」（1853）5月とその翌年の「安政元年」（1854）3月の両年内に限定された期間における門人名簿であること。このことは、幕末期の極めて短期間に、如何に多数の西洋軍事科学

（西洋砲術・西洋兵学その他）の修得を志す入門者が全国各地から象山塾に殺到したか、を知らしめるものである。だが、象山の教育活動は、これを詳細に検証してみると、26歳から拝命した松代藩の藩儒（御城月並講釈助、藩校の助教授に相当）という公的な教育職にはじまり⁹⁷⁾、同時に彼は、公務以外にも自宅に家塾を開き、自主的に入門してくる門人たちに文武・洋学・詩文その他の学問技芸を教授した。このような公私に亘る彼の教育活動は、松代塾居中はもちろん、54歳で斬殺されるまでの30年近くにも及ぶものであったこと。従って、黒船来航前後の僅か2年間に限定された「及門録」が、如何ほど象山の教育活動を理解し、象山門人を把握している史料なのか、西洋砲術系の門人に限定してみてもあまりに短期間過ぎ、象山門人の全体からみれば極めて少数の門人の記載史料であることは明らかであること。

- (3) だが、記載対象の期間が「嘉永六年」と「安政元年」の2年分だけに限定されてはいるが、それは表面的なことで、実質的には、それ以前の門人も宮本版「及門録」に含まれていることは間違いのないことであること。特に名簿を構成する第一史料「砲術稽古出座帳」という砲術操練への出欠の記載のない「嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿」には、少なくとも嘉永元年（1848）5月から同6年3月までの約6年間に入門した門人名がまとめられていることを、本稿は根拠となる史料分析をもって明らかにした。しかし残念ながら、それを入門年次別に峻別して再分類し再編成することは不可能という限界にも逢着した。
- (4) 「安政元年」は嘉永7年11月の改元であるため、「安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録」は、正確には「嘉永七年寅正月砲術稽古出座帳抄録」と命名すべきであること。従って、宮本版「及門録」に収録された史料は、実質的には「嘉永年間」だけを対象期間とする西洋砲術その他の門人名が記載されていることになること。そして、この事実を踏まえれば、嘉永年間の時期に作成された3件の門人名簿を1冊に合冊した象山門人帳、それが宮本版「及門録」の実態であることを論証した。
- (5) 宮本版「及門録」は、全体を構成する別々の門人帳3冊を1冊に合冊した史料であるが故に、それぞれの門人帳（稽古出座帳）に記載されている門

人名が、二度も三度も「及門録」に登場する。いわゆる「重出」「三重出」という重複記載の問題が生じるのは当然である。しかも、その事例はかなり多い。それらの重複事例を差し引けば、名簿に記載された門人の実数はかなり減少する。そのことは、次の「重出記載の門人一覧表」をみれば明白となる。

宮本版「及門録」における「重出記載の門人一覧表」

宮本版「及門録」における「重出」の門人		備考
①No.361 阿部喜東次	No.346 阿部喜藤次	「東」→「藤」が正しい。
②No.88 荒尾五郎三郎	No.395 荒尾五郎三郎	
③No.243 逸見六郎	No.369 逸見六郎	宮本自身が「重出」と注記。
④No.182 内田庄四郎	No.397 内田庄四郎	
⑤No.398 大場義之丞	No.398 大場毅平	大場毅平(土佐藩)が正しい。
⑥No.218 岡 虎之助	No.442 岡 虎之助	
⑦No.242 小笠原勇之助	No.342 小笠原勇之助 No.245 小笠原勇之助	「三重出」。
⑧No.210 折田與右衛門	No.356 折田與右衛門	
⑨No.402 加治木部兵衛	No.443 加治木部兵衛	
⑩No.233 河井継之助	No.302 河井継之助	
⑪No.227 川勝光之助	No.349 川勝光之助	
⑫No.171 河島永次郎	No.31 河島永次郎 No.252 三島億次郎	「三重出」であり、「三島億二郎」が正しい。「三重出」。明治に「川島鋭次郎」を「三島億二郎」(長岡藩)と改名。「億次郎」は誤り。
⑬No.156 小林虎三郎	No.234 小林虎三郎	
⑭No.97 澤田衛介	No.445 澤田衛介	
⑮No.102 高橋直藏	No.354 高橋直藏	
⑯No.58 高橋浪江	No.281 高橋浪江	
⑰No.239 竹内而平	No.286 竹内而平	
⑱No.73 戸倉新右衛門	No.294 戸倉新右衛門	
⑲No.191 野沢養藏	No.340 野沢養藏	
⑳No.353 野中太内	No.345 野中太郎	「野中太内」(土佐藩)が正しい。

②①No.157	野村松次郎	No.258	野村松次郎	
②②No.223	伴鐵太郎	No.246	伴鐵太郎	
②③No.292	平田善助	No.300	弘田善助	「弘田善助」(土佐藩)が正しい。
②④No.145	藤原重太	No.390	藤原重太	
②⑤No.269	松 金太郎	No.429	松木源太郎 (カ)	
②⑥No.380	溝口廣召	No.241 No.307	溝淵廣之丞 溝淵廣之丞	「三重出」で「溝淵廣之丞」(土佐藩)が正しい。
②⑦No.274	宮田平十郎	No.296	宮田平十郎	
②⑧No.159	宮原治郎左衛門	No.211 No.355	宮原治郎左衛門 宮原治郎左衛門	「三重出」。
②⑨No.360	村岡治八郎	No.392	村岡金八郎	
③⑩No.177	築又之丞	No.400	築又之丞	宮本自身が「重出」と注記。
③⑪No.128	渡邊銀次郎	No.399	渡邊銀次郎	
③⑫No.215	關澤安太郎	No.214	關澤安左衛門(カ)	「安太郎」→「安左衛門(カ)」

(6) 上記の宮本版「及門録」における「門人一覧表」の重出記載をみると、推定を含めて「重出」が29件、「三重出」が3件で合計32件(7%)もある。これらを「及門録」記載の門人全体453名から減じれば、記載門人の実数は421名となる。それでもなお、井上論文が最初に示した象山門人数409名よりは12名も多い。はたして両者が基にした門人帳史料「及門録」は、同一史料であったのかどうか。

(7) 既にみてきた通り、井上の紹介した「及門録」の門人は、象山塾での学習内容の面から、①「砲術の部」(坂本龍馬・橋本左内・真木和泉など)、②「学問の部」(山本覚馬・津田眞一郎・加藤弘之など)、③「砲術の部と学問の部と両方に出て居る人」(河井継之助など)の3種に分類され、しかも記載された門人の「半分以上は学問の方の門人」と紹介されている。これに対して宮本版「及門録」は、学習内容の分類には全く触れず、全て「西洋砲術門人」として捉えている。だが、この宮本の処理法による「及門録」の理解は、象山門人の実態分析をすれば、全くの誤りであることが判明する。既に本稿において検証してきた通り、「及門録」が入門対象時期としている黒船来航前後の嘉永(安政)年間には、西洋砲術門人が圧倒的多数を占めていたことは確かで、象山塾＝西洋砲術塾の観を呈していたことは

事実である。だが、その時期においてもなお象山塾には、多様な学びを求める門人が存在したのである。「儒学」「洋学」（西洋砲術・西洋兵学以外の語学・医学・物理・化学・数学・地理・食糧・絵画・漢詩文・書道、和歌、さらには新たな鉱物資源や食彩植物の発見など山河の国・信州の殖産興業に関わる各種の学問技術）に関する多様な西洋の学問文化や知識技術を摂取しようとする門人、等々が存在していたことは、これまで本稿で論証してきた通りである。この観点から、象山門人の実態と宮本版「及門録」への記載門人の間には大きな懸隔がある。それは、宮本の「及門録」作成の基になった史料そのものの制作に起因する問題といわざるをえない。

V. 宮本版「及門録」における記載内容（門人名・藩名・藩主名）の誤謬

ところで、宮本版「及門録」の象山門人一覧をみれば一目瞭然であるが、そこに記された門人名には誤記が多く認められる。基とした史料「及門録」そのものに誤記があったのか、それとも宮本自身の用いた史料の誤読であるのか。さらに問題なのは、門人が帰属する藩名または藩主名が多くの門人名の上に頭書されているが（門人名のみの記載で、あとは一切添書されていない門人も多い）、これにも多くの誤りがある。特に土佐藩の門人を大野藩または不明とする場合が多い。実は、筆者は土佐藩における幕末洋学学習者の研究に10数年を費やし、土佐藩の藩士・郷土に関係する膨大な史料を解読し分析した。その成果が、A五判640頁を超える大著となった拙著『幕末期洋学教育史研究—土佐藩「徳弘家資料」による実態分析—』（高知市民図書館発行、2004）なのである。それ故に筆者は、土佐藩門人に関しては極めて敏感であるが故に、かくも多くの誤謬が宮本版「及門録」に内在することに驚き、何故にこのような問題が生じたのか、その根本的な原因は何か、等々を真剣に考えた。

結論的にいえば、このような問題が発生する根本要因は、何と云っても宮本版「及門録」の基になっている門人帳史料が、象山没後に作成された作為的史料（門人たちによる各種史料の合成作品）であることの証しであり、門人自身が入門時に自署した正式な門人録、すなわち「原本」あるいは「原本の写本」ではないということに起因しているということである（次頁からの一覧表で下線部が誤記の

部分、筆者註である)。

「宮本版「及門録」における門人名・藩名・藩主名などの誤記一覧」

		氏名・藩名(藩主名)の誤謬	筆者訂正版
①	No.2	山寺 源 <u>太</u> 夫	山寺 源 <u>大</u> 夫
②	No.10	増井 助之丞	増 <u>田</u> 助之丞
③	No.18	和田 盛之助	和田 森之助
④	No.20	寺澤 六之助	寺澤 大之助
⑤	No.39	秋山 <u>矢三郎</u> 様家来 島田敬助	秋山 <u>兵三郎</u> 様家来 島田敬 <u>介</u>
⑥	No.46	島津 良助	島津 良 <u>介</u>
⑦	No.47	高畑 五郎	高 <u>畠</u> 五郎
⑧	No.68	磯見 瑞枝	磯 <u>貝</u> 瑞枝
⑨	No.84	福知 新助	福知 新 <u>介</u>
⑩	No.87	山崎 新六	山崎 慎六 <u>郎</u>
⑪	No.90	梁 環	梁 環
⑫	No.92	柴山 茂助	柴山 茂 <u>介</u>
⑬	No.94	坂井 二作	酒井 二作
⑭	No.102	高橋 直藏	高 <u>村</u> 直藏
⑮	No.120	渡邊 馬介	渡邊 為介
⑯	No.153	岩 文進	市川 岩之進
⑰	No.168	片倉小十郎殿家来 西村平太郎	佐倉藩堀田正睦家来 西村平太郎
⑱	No.175	恩田 半五太郎	恩田 半五太郎
⑲	No.176	筑紫 純次郎	築紫 純次郎
⑳	No.186	符田 惣次郎	荷田 惣次郎
㉑	No.217	荒木 二郎太夫	荒木 二郎 <u>大</u> 夫
㉒	No.231	仙臺(藩)加藤土代士	仙石藩 加藤土代士
㉓	No.235	道家 良助	道家 良 <u>介</u> (長州藩)
㉔	No.237	尾州藩 辻中殿	尾州藩 辻仲殿
㉕	No.260	岡與三左衛門	岡與三右衛門
㉖	No.265	長井 宗三郎	長江 宗三郎
㉗	No.269	大野藩 松 金太郎	大野藩 松木 源太郎(力)
㉘	No.273	大野藩 廣田 文吉	土佐藩 廣田 文吉

②⑨	No.287	加賀藩 若津彌太郎	土佐藩「岩崎彌太郎」の偽名(カ) (No.230, No.301も同様「三重出」に相当)
③⑩	No.288	大野藩 平尾 喜内	土佐藩 平尾 喜内
③①	No.291	河野 軍大夫	河野 軍大夫
③②	No.292	平田 善助	弘田 善助(土佐藩)
③③	No.293	熊本 兼崎昌司	福山藩 兼崎昌司(熊本藩は誤り)
③④	No.303	生田 彦次郎	生田 彦四郎
③⑤	No.305	松宮 薫助	松宮 薫助
③⑥	No.312	井上 佐一郎	井上 佐市郎(土佐藩)
③⑦	No.314	伊十知早馬	伊地知早馬
③⑧	No.343	古田 小膳	寺田 小膳(土佐藩)
③⑨	No.380	溝口 廣召	溝口 廣見(土佐藩)
④⑩	No.396	荒尾 繁五郎	荒尾 繁次郎
④①	No.432	大森 藏之丞	大森 莊兵衛

ところで、「及門録」全体の記載門人数は453名であるが、これから重複記載(重出、三重出など)を減じると、記載門人の実数は422名となる。この門人数422名中の41名(約9パーセント)の門人について、氏名や所属する藩名・藩主名が誤っている。かくも多くの誤記が認められる原因を分析すると、前述の通り、本質的には宮本版「及門録」が作爲的史料であることに起因する。恩師象山が他界した後、明治の新時代に生き残った門人たちが、亡き恩師に対する報恩と顕彰の師弟愛をもって、また共に学んだ同塾門人たちに対する親愛と友情の証しとして、象山門人帳の作成を門人有志が決議し、関係史料の蒐集、解読、整理、執筆、校正、等々の制作工程を踏まえて、「及門録」と命名した象山門人録が作成された。だが、その作業工程で、上記一覧表にまとめて示したように門人名・藩名・藩主名など、歴史的事実と異なる多くの誤謬が生ぜざるをえない基本的な不備があったことは間違いない。筆者は、このような誤謬が生じた原因を、次の3点に絞って指摘しておきたい。

まず第1に、何と云っても宮本版「及門録」(他の4種の「及門録」も同様)が、象山門人帳の「原本」ではなく、あくまでも西洋砲術練の実施時における出席者名簿(高島・江川・下曾根・徳弘など、他の西洋砲術塾でも練の度に出席者

名簿を作成)であり、その内で明治に遺された幾冊(何回分)かの名簿を合冊して1冊にまとめて作成したもの、それが「及門録」であること。

しかし、象山塾が実施した全ての繰練記録が時系列で分類整理された形で残されていたわけではなかった。特に私塾の主宰者である象山が斬殺されて急死し、間髪を容れずに松代藩から佐久間家断絶の厳しい処罰を受け、家禄や自邸の土地家屋は没収、貴重な史料を含む遺品も処分された。幸いに門人の北澤正誠が危険を察知して、急ぎ佐久間家の主要史料をまとめて象山義弟の勝海舟(安芳、1823-1899)に届けたとされるが⁹⁸⁾、象山関係の遺品や書類などは江戸の私塾兼自宅、京都の借家に相当数あったものと思われる。が、それら全てを整理して保管することはできず、遺された史料は一部に過ぎなかったとみなければならない。遺された象山史料の中の門人関係史料を時系列で繋ぎ合わせてみても、抜け落ちた隙間ができ、決して完全な門人帳と呼べる代物にはなりえず、極めて部分的あるいは断片的なもので、門人全体を把握し記載した門人帳の作成は到底、不可能であったということである。

第2には、叙上の問題を克服すべく、「及門録」の作成者たちは、分散した膨大な象山関係史料を門人や関係者を頼って蒐集し、その中から可能な限りの門人関係史料を析出して、彼らを入門の時系列に即して並べ、名簿となるように整理していったのではないかと推測される。実は、このときに中津藩の場合のように、藩主の命令で藩士全員が一斉に集団入門し、その入門者たちの稽古出座名簿を、藩側の担当者が記録し保存していたことが非常に役立ったのではないかと推測される。

第3には、門人の氏名が当て字であったり帰属する藩名や藩主名などに誤りが数多く認められる。これは、「及門録」を作成した門人たちが、幕末期に象山塾で共に学んだ旧友に関する断片的な史料(例えば書簡などの文書類)や交友記憶(氏名・藩名・藩主名・その他)、あるいは在塾時代の心象に刻まれた記憶などを想起して記録し、これを集積することによって第1第2の理由による史料面の不備を補う努力をしたことも考えられる。

このように記録には残らないが、記憶に残る門人を思い起こして、史料の隙間を埋めていく作業を重ねて象山門人帳が作成されたのではないかと推測される。想起(memory recall)の場合、門人とその氏名の不一致、氏名の文字表現の誤謬(音読みが同じであれば可とするなどの誤り)が生じることは無理からぬことであった。それ

故に、一覧表で指摘したような人名の文字表記の誤謬が数多く生じることになったのではないかと考えられる。

しかし、事実を基本とする歴史研究において使用される史料に関しては、決して事実誤認（誤読・誤記・誤解）は許されない。ましてや象山思想「東洋道徳・西洋芸術」の普及と実現を担った門人たちの軌跡を解明する根本史料となる門人帳史料「及門録」ということを考えると、現存する5種類の全ての「及門録」に内在する誤謬の析出と訂正を続け、象山関係史料と門人関係史料の両面から、今後も根気強く事実（門人名その他）の解明や訂正を進め、より完全に近い増補改訂版の「及門録」を完成させなければならない。

私立大学を中心に長い歴史を刻んで今に存在する高等教育機関は、創設以来の門人（創設者の時代の入学生や卒業生）の発掘と門人帳（入学者名簿）の校訂増補を、長年に亘って努力してきている。その典型的な事例としてあげるべきは、大阪大学医学部の源流となった緒方洪庵「適塾」であり、慶應義塾大学の前身となった福沢諭吉「慶應義塾」である⁹⁹⁾。

幕末期に創設され、日本近代化に関わる優秀な人材を多数輩出してきた両校の門人発掘調査は、緒方・福沢の創設者が他界した後、現在に至るまで長期的かつ全国的に継続実施されてきて、かなり正確で綿密な「門人録」が作成されている。そのような福沢や緒方の私塾の門人発掘の努力に比すれば、象山没して約150年、更なる象山門人の発見と増補、あるいは彼ら門人の中央や地方の各分野に展開した活動軌跡に関する調査研究を進める必要がある。

おわりに

象山研究の端緒を拓いた井上哲次郎、象山門人の全体像を公にした宮本仲

本稿で明らかにした通り、明治時代の後半から大正時代にかけて、長く日本の哲学会を代表し、東西両洋の哲学研究に活躍した東京帝国大学教授の井上哲次郎。その彼に、幕末期日本の思想的先覚者である信州松代藩出身の「佐久間象山及門録に就いて」（大正3年、1914）という論文があった。筆者は、この事実を学生時代に知り驚いた。井上哲次郎（1856—1944）と佐久間象山（1811—1864）。両者は生きた時代も異なり、学問の専門性も違い、一見すると、この両者の関係は実

に奇妙な取り合わせである。井上といえば、ドイツ観念論を専門とする西洋哲学者でありながら東洋哲学の儒教研究を積極的に展開し、『日本陽明学派之哲学』『日本古学派之哲学』『日本朱子学派之哲学』という日本人の伝統的思想基盤となった儒学研究三部作（1900—1905）を書き上げた、戦前の東京帝国大学哲学講座を率いる著名な哲学者であった。他方、象山は幕末期日本を代表する儒学者であり、特に軍事科学系洋学者（西洋砲術・西洋兵学の大家）として知られる人物であった。

特に井上は、日本人の国民道徳の在り方を国家的観点から志向し、「教育勅語」（1890）が發布されると、翌年にはその平易な解釈書『勅語衍義』（1891）を執筆した。また、發布の翌年（明治24年、1891）正月には、第一高等中学校教員で教育勅語の奉読式が行われた際に、囑託教員の内村鑑三（1861—1930）が天皇御親筆の教育勅語に最敬礼をせずに降壇するという事件が起きた。いわゆる「内村鑑三の不敬事件」である。この事件を井上は激しく批判し、『教育ト宗教ノ衝突』（1893）、『国民道徳概』（1892）などを執筆して、日本基督教会の指導者である植村正久（1858—1925）と激しく論争した。が、井上は、近代日本の国民道徳に関して東西両洋の道徳を比較相対化し、国家的観点から日本人の遵守すべき国民道徳の在り方を探究すべしとする哲学者であったのである。

そのような井上が、象山の「東洋道徳・西洋芸術」という東西両洋の異質な学問思想を比較相対化して、『易経』を中心とする東洋の弁証法的理論に依拠して「東洋道徳」と「西洋芸術」の両者を止揚した統合の思想（思想の統合化）に強い関心を抱いていたことは納得できる。その彼が、象山に関する論文をまとめて公表する直接的な契機となったことは、ある知人が偶然に持ち込んだ「及門録」という象山門人帳史料との出会いであった。この井上論文は、紙幅の関係で極めて簡略な内容ではあったが、門人帳が内在する種々の問題点に対する自覚を促し、筆者をはじめとする研究者たちの象山研究—象山門人研究の引き金となる先駆的な価値を有する論文となった。その意味ではたした歴史的役割は大きい。

この『東洋学芸雑誌』に掲載された井上論文が、勝海舟・吉田松陰・坂本龍馬・橋本左内など一部の有名な門人の他に、400名を優に超える数多の象山門人が存在したこと、しかも彼らは、恩師象山の日本近代化の思想「東洋道徳・西洋芸術」を、幕末維新时期以降の日本近代化過程において、各自の専門分野に展開し先

駆的な貢献をなしたこと、等々、象山思想とそれを担った象山門人たちの存在と貢献を広く日本人に知らしめるところとなった。井上論文が、幕末維新の先覚者である象山の門人名簿の吟味を提唱したことは、幕末維新史研究に与えた啓蒙的意味が大きく、当時の日本人にとっては一種の歴史的サプライズであったといえる。

例えば、幕末・明治期の日本絵画界を代表する狩野芳崖が象山門人であったという事実、しかも彼は、象山から学んだ「東洋道徳・西洋芸術」思想を、「子母観音像」という東西両洋の画法を止揚し融合した名作に具現化したという新発見。これらの新事実は大変な驚きであった。象山から学んだ東洋の伝統的思想である儒学や日本の伝統的な画法、そしてアメリカ人の美術史家フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908) との出会いで得た西洋画法の最新知識の獲得。それら東西古今の画法が彼の絵画世界において統一融合された成果、それが彼の連作「子母観音像」という一連の作品集に結実したものといえる (特に1888年の作品で東京藝術大学所蔵の「悲母観音」は重要文化財)。フェノロサと象山という東西両洋の人物との思想的遭遇が、名画を創造する優秀な日本人画家を育み、日本絵画の近代化を推進したことの教育的な影響力の偉大さを再認識させられる。

さらに、幕末期の尊皇攘夷という狭隘な思想の昂揚する時代に、開国和親・進取究明などの文明開化を叫んだ象山とその実現に貢献した門人たちの日本近代化に関わる軌跡の全体像の輪郭を、一部の重要人物をあげながら、初めて「及門録」と命名された象山門人帳と言われる史料の紹介を通して、広く日本人に知らしめたのが、井上論文 (大正3、1914) であった。その影響力は大きく、象山研究—象山門人研究を中心とした新たな日本近代化研究の方向の開ける可能性をも示唆してくれるものであった。

以上のような井上哲次郎に対して、象山誕生の地である信州松代が生んだ秀才の医学者であった宮本伸。彼は、昭和7年 (1932) 2月、井上論文に遅れること18年後に畢生の名著『佐久間象山』を刊行した。同書に初めて象山門人帳史料「及門録」の全体像が収められた。宮本が、この労作によって、日本近代化に貢献した全国規模での数多の象山門人の存在を広く知らしめた功績は大きい。東京帝国大学医学部で森鷗外と同級生であった宮本は、本来は歴史学者ではなく、医学者であった。森と同様に同大学を卒業後はドイツに留学し、西洋最新の小児科

学・内科学を学んだ期待の医学者であった。医学以上に象山の研究と顕彰に彼を駆り立てたものは何か。

象山は生前、愛弟子の吉田松陰の海外密航事件に連座し、信州松代に蟄居処分の身にあったとき、見知らぬ青年の訪問を受ける。石黒忠眞であった。象山は混沌とした幕末動乱の時代を生きる青年に次のように説いた。“青年よ、尊皇攘夷の愚行を捨てて海外に雄飛せよ！そして、世界から日本を見据え、自らの生涯をかけるにふさわしい学問と遭遇し、その先駆者となって近代日本の建設に生涯を捧げよ！それこそが、真の大攘夷である！”、と。

兄や弟のように東京帝国大学医学部教授にはならず、宮本の場合は、東京神田に小児科の個人医院を開業して診療にあたった。東京帝国大学医学部卒業でドイツ留学者という宮本も、野望を抱けば (Boys, be ambitious.)、明治の医学界では、相当の立身出世を可能にした超エリートであったに違いない。一体、何故に彼は、医学研究者にならず市井の臨床医に甘んじたのか。そこには、彼の象山への深い尊崇の思いが強く影響していたことは間違いない。宮本の最大の願いは、郷里の信州松代が生んだ日本を代表する偉人で、宮本家とも縁の深かった象山の研究に、生涯をかけ、彼を長く後世に顕彰することであった。それをしなければならないのは自分であり、それをできるのは自分しかいない。彼は、俗世の立身出世を求めず、そう信じて象山研究に生き、それを人生の「楽」(至福；『省譽録』第21条の「君子の五楽」の精神)と実感して己を生きたのかも知れない¹⁰⁰⁾。

ところで、前掲の「象山門人帳『及門録』一覧」は、井上論文を何歩も前進させた、彼の生涯をかけた研究成果の一部である。即ち井上は、必要に応じて個々の門人名をあげたが、宮本は453名という多数の象山門人の全てを記した史料「及門録」を初めて世に公開したのである。残念ながら、この宮本の研究には、様々な問題点が内在していた。しかし、これだけまとまった数の象山門人の氏名や帰属する藩名・藩主名を公表してくれたことは、象山門人の解明はもちろん、同塾出身者の全国的な分布、即ち洋学(正確には象山が提唱し実践した日本近代化の思想「東洋道徳・西洋芸術」)の全国的な拡大普及の過程を俯瞰させてくれるものである。この点でも、宮本が生涯をかけた象山研究の成果は、医学者として生きてであろうときの成果に劣らず、日本近代化研究における貴重な学術的貢献をなしたと評することができる。

宮本仲著『佐久間象山』所収の門人帳「及門録」

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
1	(松代藩)	白井 平左衛門		松代藩、北越征討遊撃隊長、能書家で特に隸書に優れた。
2	(同)	山寺 源太夫		松代藩、「太」は「大」が正解、儒学者佐藤一斎・中村正直と親交。「及門録」には記載がないが子息の信柄も門人。山寺常山・鎌原桐山・佐久間象山を「松代の三山」という。
3	(同)	水野 瀬平		松代藩
4	(同)	蟻川 賢之助		松代藩、吉田松陰、小林虎三郎と共に「象門の三傑」、象山塾居の間、江戸の象山塾で蘭学・砲術などを教授。幕府の洋銃取調掛・講武所砲銃教授。維新後、沼津兵学校の設立に尽力。
5	(同)	北山 安世		松代藩、象山の甥で松代藩医、兵学者。松陰の親友、明治3年病没。
6	松本藩	岡 無理彌		松本藩
7	(松代藩) 離門	金兒 忠兵衛		松代藩、江川塾に象山と同時入門し塾頭に。故あって離門。象山亡き後は藩の西洋砲術師範として活躍、門人多し。
8	江戸人	永井 庄三郎		江戸人 鉄砲鍛冶師
9	(松代藩)	金井 彌惣左衛門		松代藩
10	江川傳書三冊口傳	増井 助之丞		松代藩、「井」は「田」が正解、「傳」は旧字。
11	(松代藩) 離門	長谷川深美		松代藩
12	(同)	藤岡 伊織		松代藩 友人で富豪の藤岡甚右衛門の嫡男。
13	(同)	岩下 富馬		松代藩
14	(同)	佐藤 忠之進		松代藩
15	松平伊賀守様家來	八木 剛助		上田藩
16	飯田藩	太田 玄策		飯田藩
17	(松代藩)	高野 車之助		松代藩、藩横目付武具奉行、督學などを歴任。『松代藩史稿』『松代地誌』等著書多数。甥で門人の北山安世・藤岡伊織)の教育を託した門人。
18	東福寺村	和田 盛之助		松代藩、「盛」は誤りで「森」が正解。
19	(松代藩)	大野 健左衛門		松代藩
20	(同)	寺澤 六之助		松代藩、「六」は「大」が正解。
21	安藤飛騨守様家來	柏木 兵衛		田辺藩
22	松代	池村 良太郎		松代藩

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
23	(松代藩)	矢島 源左衛門		松代藩
24	(同)	矢島 順太郎		松代藩
25	(同)	佐野 喜代見		松代藩
26	(同)	松木 源八		松代藩、松木源太郎の子、安政二年に源八郎を襲名。
27	(同)	館 文之助		松代藩
28	(同)	齋藤 新藏		松代藩
29	(同)	菅 鉞太郎		松代藩
30	田口村	小林 治兵衛		松代藩
31	田中	奥村 彌左衛門		松代藩
32	酒井修理大夫様家来 七拾一歳入門	片山 仙左衛門		小浜藩
33	久野丹波守殿家来	野村 大記		田丸藩
34	本藩	望月 幾五郎		松代藩
35	(松代藩)	望月 吉五郎		松代藩
36	松平肥前守様家来	木島 藤太夫		佐賀藩、「木島」は「本島」が正解。藩の海軍所創設、軍備近代化に活躍。維新後は佐賀第六国立銀行の経営指導。
37	久野丹波守殿家来	三好 小三郎		田丸藩、(紀州藩田丸城代家老久野家)重臣の家来。
38	數原善庵老家来	榎 令輔		福岡藩
39	秋山矢三郎様家来 本名水野鐵太郎水戸儒官	島田 敬介		水戸藩、「矢」は「兵」が正解。
40	御書院番與力	須藤 音三郎		幕 臣(殿)
41	浦賀與力	岸本 小助(殿)		幕 臣(殿(筆者注、以下同様))
42	松平越後守様家来	中尾 定治郎		津山藩、同藩の津田眞一郎(眞道)の叔父。
43		須川 半左衛門		不 明
44	長崎人 元名藤吉作太郎と云ふ後に砲術を以て館林藩に仕ふ	藤井 重作		館林藩 砲術で仕官。
45	堀田備中守様家来	木村 軍太郎		佐倉藩、佐倉藩の洋式兵制改革、幕府の天文台、蕃書調所出役教授手伝。
46	奥平大膳大夫様家来	島津 良助		中津藩、「助」は「介」が正解、中津藩軍学者で福沢諭吉の仲人・文三郎の父。
47	松平阿波守様家来	高畑 五郎		徳島藩、「畑」は「畠」が正解。伊東玄村の蘭学塾を経て象山塾に入門。やがて旗本となり外国奉行支配組頭、新政府では兵部省に出仕、海軍権大書記官。

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
48	堀田備中守様家来	岩淵 迪		佐倉藩
49	酒井雅楽頭様家来	井上 利左衛門		姫路藩
50	同	大島 貫七		姫路藩
51	(松代藩)	村上 大三郎		松代藩、象山の義弟で幕臣村上家を嗣ぎ大番衆、蕃書調所勤務。象山の洋書購入を斡旋。
52	(同)	磯田 小藤太		松代藩
53	(同)	三村 鎌藏		松代藩
54	加藤遠江守様家来	武田 斐三郎		大洲藩、函館時代までは斐三郎、明治政府時代からは成章。緒方洪庵も適塾を経て象山塾に。箱館戦争で洋式城郭「五稜郭」を設計・建設した。明治維新政府で陸軍大学校教授。
55	會津藩	山本 覺馬		會津藩、明治の京都府顧問、府議会初代議長。同志社英学校の創立に新島襄を支援。
56		久保 勘五郎殿		幕臣、「殿」の尊称は幕臣、「様」の尊称は大名。
57		本堂 壽次郎殿		幕臣 「殿」
58	同家来	高橋 浪江	重出	幕臣家臣
59	松代藩	宇敷 元之丞		松代藩
60	(同)	友野 俊藏		松代藩
61	奥平大膳大夫様家来	石川 休右衛門		中津藩
62	奥平大膳大夫様家来	島津 文三郎		中津藩、福沢諭吉の仲人。
63		岡見 彦三		中津藩、福沢諭吉を江戸藩邸に招き「慶應義塾」の基になる蘭学塾を開設させた恩人。
64		櫻川 三郎右衛門		中津藩
65		横山 犀藏		中津藩
66		高橋 三子		中津藩
67		岡見 梢		中津藩
68		磯見 瑞枝		中津藩、「見」は「貝」が正解。
69		岡見 半九郎		中津藩
70	留守	星野 平八		中津藩
71	奥平大膳大夫様家来	大谷 市之助		中津藩
72		濱田 鎌之助		中津藩
73		戸倉 新右衛門	重出	中津藩
74		飯島 爲三郎		中津藩

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
75	板倉周防守様家來	磯村 勇之進		松山藩
76	松代	加藤 勳		松代藩
77	安房守	勝 麟太郎殿		幕 臣、 <u>象山の義弟</u>
78	松平伊賀守様御家來	山田 貫兵衛		上田藩
79	奥平大膳大夫様家來	熊谷 仁兵衛		中津藩
80	同	甲斐 理兵衛		中津藩
81		神谷 源内		中津藩
82		前野 三藏		中津藩
83		牧野 彌太郎		中津藩
84		福知 新助		中津藩、「 <u>新助</u> 」は誤り「 <u>新介</u> 」が正解。
85		岡見 彌一郎		中津藩
86		野口 斧藏		中津藩
87		山崎 新六		土佐藩、「 <u>山崎慎六郎</u> 」の誤記。
88		荒尾 五郎三郎	重出	中津藩
89	奥平大膳大夫様家來	奥平 篤三		中津藩、「 <u>太</u> 」は「 <u>大</u> 」が正解。
90		築 環		中津藩、「 <u>築</u> 」は「 <u>梁</u> 」が正解。
91		齋藤 蔵		中津藩
92		柴山 茂助		中津藩、「 <u>助</u> 」は「 <u>介</u> 」が正解。
93		間梨 昇太郎		中津藩
94		坂井 二作		中津藩、「 <u>坂</u> 」は「 <u>酒</u> 」が正解。
95		奥平 鎰三		中津藩
96		大富 清太		中津藩
97		澤田 衛介	重出	中津藩
98		向坂 彌藤司		中津藩
99		熊谷 民三		中津藩
100		月岡 兵介		中津藩
101		瀧澤 直司		中津藩
102		高橋 直藏	重出	土佐藩、「 <u>橋</u> 」は「 <u>村</u> 」の誤記で、「 <u>高村直藏</u> 」は土佐藩。
103		熊田 金藏		中津藩
104		佐島 活藏		中津藩
105		熊澤 莊輔		中津藩
106		米山 東作		中津藩
107		一松 小源太		中津藩
108		瀧本 忠左衛門		中津藩

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
109		内田 平次郎		中津藩
110		片倉 浦助		中津藩
111		磯貝 五郎七		中津藩
112		古川 多七		中津藩
113	熊本藩	塚本 馬之助		熊本藩
114		加藤 利喜藏		中津藩
115		古田 權次郎		中津藩
116		上田 章七		中津藩
117		岡野 一二郎		中津藩
118		川俣 彦二郎		中津藩
119		樋口 留三郎		中津藩
120		渡邊 馬介		中津藩 「馬」は「為」が正解。
121		黒岩 市三郎		中津藩
122		淺野 鉞吉		中津藩
123		松本 源藏		中津藩
124		今億 新太郎		中津藩
125		戸倉 文之助		中津藩
126		中島 正次郎		中津藩
127		辰巳 市藏		中津藩
128		渡邊 銀次郎	重出	中津藩
129		大西 辰次郎		中津藩
130		丹羽 卯之助		中津藩
131		小栗 綱三郎		中津藩
132		高橋 宗介		中津藩
133		竹内 嘉兵衛		中津藩
134		柳澤 重兵衛		中津藩
135	溝口主膳正様家來	上野 龍之進		新発田藩
136	青山大膳亮様家來	蔭山 莊作		郡上藩
137	同	金井 金次郎		郡上藩
138	松平播磨守様家來	原田 軍太夫		高松藩
139	松平越後守様家來	海老原多宮		津山藩
140	(同)	津田 眞一郎		津山藩、「津田真道」のこと。福澤諭吉、森有礼、中村正直、加藤弘之、西村茂樹らと明六社を結成。新政府の司法省に出仕。第1回衆議院議員総選挙に当選し初代衆議院副議長。

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			訳字、誤読、誤解などの問題点
141	仙臺藩	竹内 仙右衛門		仙台藩
142	(松代藩)	吉村 左織		松代藩
143	水野丹後守家来	目良 造酒		新宮藩、「水野丹後守」は「紀州藩付家老」、「様」つかず。
144		三谷 左馬		新宮藩、「水野丹後守」は「紀州藩付家老」。
145	松前伊豆守様家来	藤原 重太	重出	松前藩
146	土岐美濃守様家来 劔	藤川 太郎		沼田藩
147	松平伊賀守様家来	八木 數馬		上田藩
148	松前伊豆守様家来 離門	下國 殿母		松前藩、松前藩家老
149	溝口主膳正様家来	林 梅松		新発田藩
150	大垣藩	山本 左平治		大垣藩
151	(松代藩)	月岡 徳治		松代藩
152		町田 庫之助		松代藩
153	後年砲兵三學を以て越前侯(福井藩)へ被召抱 號市川一學	岩 文進		福井藩 象山塾から福井藩砲術師範を経て、幕府天文台訳員や蕃書調開成所教授職を歴任し、旗本(大番格砲兵差図役頭取勤方)に。
154	久能丹波守殿家来 嘉永四年辛亥月	森 逸平		田丸藩、(紀州藩田丸城代家老久野家)
155	堀田備中守様家来	大森 巳之作		佐倉藩
156	牧野備前守様家来	小林 虎三郎	重出	長岡藩
157	幕臣	伴 鉄太郎(殿)	重出	幕臣、先手与力桜井家から伴家養子。安政3年(1856年)、箱館奉行支配調役並、長崎海軍伝習所2期生。安政6年(1859年)、軍艦操練所教授方出役。万延元年(1860年)、咸臨丸の測量方として太平洋横断。維新後は沼津兵学校一等教授。明治5年(1872年)海軍出仕、勝海舟、木村芥舟と共に『海軍歴史』を編纂。
158	上田	皆川 恒之助		上田藩
159	薩州藩	宮原 治郎左衛門	三重出	薩摩藩、「治」は「次」が正解。
160	幕臣	久保 記之助殿		幕臣
161	藤堂和泉守家来	市川 清之助		津藩、大名の尊称「様」が欠如。
162	同藩二名共入門鹽田重弦記	松本 省三		津藩
163	水野出羽守様家来	佐々木 左源太		沼津藩
164	奥平大膳大夫様御家来	築 由記		中津藩
165		廣瀬 誠藏		不明

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
166	小野派一刀流	中西 忠藏		剣道(江戸下谷、小野派一刀流の中西派)
167		中西 猪太郎		剣道(江戸下谷、小野派一刀流の中西派)
168	片倉小十郎殿家来	西村 平太郎		佐倉藩、後の「西村茂樹」、「片倉小十郎殿」は仙台藩家老で大名格。
169		馬場 志津摩		佐倉藩
170		森村 助次郎		佐倉藩
171	牧野備前守様家来	川島 鋭次郎	重出	長岡藩、弘化元年に川島徳兵衛(30石)の養子に、安政6年に「億次郎」に、明治以後は「億二郎」と改名。
172	松平大膳大夫様家来 後寅次郎と稱す	吉田 大次郎		長州藩、ペリー来航時の海外密航事件で恩師象山と共に捕縛。松下村塾で久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋、吉田稔麿、前原一誠、品川弥二郎、山田顕義、などを育成。
173	藤堂和泉守様家来 同藩堀田重玄記	湊 哲藏		津 藩
174	松平相模守様家来	林 藤四郎		鳥取藩
175	奥平大膳大夫様家来	思田 半五太郎		中津藩、「太」は「大」が、「思田」は「恩田」が正解。
176	八月 六日	筑紫 純次郎		中津藩、「筑」は「築」が正解。
177		篠 又之丞		鳥取藩
178		横山 嘉八郎		鳥取藩
179		岩井 権市		鳥取藩
180		上澤 八兵衛		鳥取藩
181		坪倉 六之助		鳥取藩
182		内田 庄四郎	重出	鳥取藩
183		高橋 金次郎		鳥取藩
184		喜多村甚吉		鳥取藩
185	藤堂和泉守様家来	隅野 達之助		津 藩
186		符田 惣次郎		津 藩、「符」は「荷」の誤読。
187	細川越中守様家来 八月 九日	宮部 鼎藏		熊本藩、吉田松陰と東北旅行、肥後勤皇党、池田屋事件で死亡。
188	松平相模守様家来 八月 十日	原田 謙堂		鳥取藩
189	奥平大膳大夫様家来 九月 四日	小野 善藏		中津藩
190	久貝因幡守様家来 八月十四日	上野 現八郎		幕臣家来、久貝は安政2年(1855)講武所総裁。
191	八月十四日	野沢 筑藏	重出	勝山藩

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
192	松平伊賀守様家来 八月十五日	門倉 傳次郎		上田藩 象山盤居後は伊東玄朴入門。 『西洋馬術規範』翻訳。
193	藤堂和泉守様家来 八月廿八日	山本 慎藏		津 藩
194		荒木 審之進		津 藩
195	堀田備中守様家来 九月十六日	兼松 繁藏		佐倉藩
196		齋藤 碩五郎		佐倉藩
197	九月二十日	高洲 代藏		佐倉藩
198		福田 常治		佐倉藩
199		田島 武之助		佐倉藩
200	有馬日向守様家来 九月廿四日	栗原 源左衛門		丸岡藩
201	松平相模守様家来 九月	田村 源内		鳥取藩
202	堀田備中守様家来 留守九月廿七日	長 量平		佐倉藩
203		高橋 午之助		佐倉藩
204	牧野備前守様家来 十月十六日	渡邊 進		長岡藩
205	小出内記様家来 十月廿六日	大島萬兵衛		出石藩、小出内記(小出播磨守)
206	松平越後守様家来水練家 十月廿八日	上原六郎左衛門		津山藩
207	十月二十八日	佐野 淳藏		津山藩
208	水野壹岐守様家来 十一月 三日	高橋 幾太郎		鶴牧藩
209	薩州藩	新納 四郎左衛門		薩摩藩
210	嘉永五年壬子歳	折田 與右衛門	重出	薩摩藩
211	同	宮原 治郎左衛門	三重出	薩摩藩
212	紀州様家来	遠藤 貫介		紀州藩
213	内藤久八郎様家来	荒井 辰藏		幕臣家臣、幕臣故に「様」ではなく、「殿」では。
214	加州様家来	關澤 安左衛門	重出	加賀藩、「關澤 安太郎」の父親。
215		關澤 安太郎	重出	加賀藩、「關澤 安左衛門」の嫡男。
216	加州藩	安村宇右衛門		
217	中津藩	荒木 二郎太夫		中津藩、「太夫」は誤り「大夫」が正解。
218	佐賀藩	岡 虎之助	重出	佐賀藩
219	松平因幡守様家来	荒木 千葉介		鳥取藩
220	土井能登守様家来	内山 隆佐		大野藩、藩政改革に務め安政3年に蝦夷地総督。藩船大野丸を建造、箱館藩營の商社大野屋を拠点に活動。
221	後相模守殿	富永 順之助殿		幕 臣
222		波多野季雄		不 明

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
223	薩州藩	野村 松次郎	重出	薩摩藩
224	後丹後守殿	川勝 恒五郎殿		幕臣
225		同家来(氏名不記)		幕臣家来
226		川勝 光之助殿	重出	幕臣
227		川勝 経殿之助殿		幕臣
228	上田藩	櫻井 順藏		上田藩
229	同	櫻井 剛三郎		上田藩
230	加州本多周防守殿家来	泉澤 彌太郎	重出	金沢藩ではなく、土佐藩の「岩崎弥太郎」の偽名か。
231	仙臺	加藤 士代士		仙石藩、仙台藩は誤り、後の「加藤弘之」。旗本となり開成所教授職並、維新後は新政府に仕出仕し外務大丞、元老院議員、勅選貴族院議員を歴任、旧東京大学法・理・文3学部の総理、後、帝国大学(現・東京大学)第2代総長。
232	松平陸奥守様家来	大槻 禮助		仙台藩
233	長岡藩	河井 継之助	重出	長岡藩
234	同	小林 虎三郎	重出	長岡藩、戊辰戦後で人材育成の教育第一主義で長岡復興、美談「米百俵」の主人公。
235	同	道家 良助		長州藩、長岡藩は誤り、「良助」は「良介」が正解。
236	長州藩	郡司 覺之進		長州藩
237	尾州藩 辻中殿	辻 彌兵衛		尾張藩、「辻中」は誤り「辻仲」が正解、「衛」は旧字。
238	棚倉藩	佐々木 熊之助		棚倉藩
239	水戸藩	竹内 而平	重出	水戸藩
240	中川修理大夫様家来	山本 黙九春		岡藩
241	土州藩	溝淵 廣之丞	重出	土佐藩、「溝淵廣之丞」が正解。郷土(明治2年、四等士族上席)
242	勝山侯御嫡子	小笠原 勇之助殿	三重出	幕臣(大名嫡男)
243		逸見 六郎	重出	不明
244	加州様家来	歸山 仙之助		加賀藩、藩の大砲方御用。象山捕縛後、大村益次郎に入門。
245	大野藩	戸塚 左近右衛門		大野藩
246	同	樋口 眞吉		土佐藩、大野藩は誤り。本表における門人の土佐藩判定は、坂本保富著『幕末洋学教育史研究』を参照。

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑三月砲術門人々名簿			誤字、誤読、誤解などの問題点
247	同	桑原 介馬		土佐藩、大野藩は誤り、土佐藩郷土で樋口真吉門人、坂本保富『幕末洋学教育史研究』。
248	島津	澁谷 猶右衛門		薩摩藩
249		樺山		薩摩藩
250	勝山藩	三神 八百吉		越前勝山藩
251	佐賀藩	佐藤 久平		佐賀藩
252	牧野備前守様家來長岡藩	三島 億次郎	三重出	長岡藩。「億次郎」は「億二郎」の誤り。以下、長岡藩関係の誤りは坂本保富著『米百俵の主人公小林虎三郎—日本近代化と佐久間象山門人の軌跡—』を参照。
	嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録			
253	大野藩 六月五日入門	安藤 與四郎		大野藩
254		肝付 角齋		薩摩藩
255	佐土原	上山 彌惣治		佐土原藩
256	同	青木 新三		佐土原藩
257	同	有田 龍介		佐土原藩
258	薩州	野村 松次郎	重出	薩摩藩
259	大野藩	久保 木又次郎		大野藩
260		岡興 三左衛門		大野藩、「三左衛門」は「三右衛門」の誤り。
261	六月五日入門	村井 惣藏		大野藩
262	同	西郷 操		大野藩
263	同	安川 恒次		大野藩
264	同	平井 良藏		大野藩
265	同	長井 宗三郎		大野藩、「長井」は「長江」の誤り。
266	川勝家來	稲田 豊次		幕臣家來
267	同	細見 兵次郎		幕臣家來
268	大野藩 六月九日入門	小菅 祐三郎		大野藩
269	同	松 金太郎		大野藩、「松本源太郎」の誤読か(松代藩に「松」の姓ナシ)。
270	同	竹田 重太郎		大野藩
271	同	玉木 藤次郎		大野藩
272	同 十月九日入門	中山 善太郎		大野藩
273	同	廣田 文吉		土佐藩、大野藩は誤り。
274	同	宮田 平十郎	重出	大野藩

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録			誤字、誤読、誤解などの問題点
275	同 六月廿日入門	福永 市太郎		大野藩
276	同	佐々木代之助		大野藩
277	大野	中安 百介		大野藩
278	同	中安 伊右衛門		大野藩
279		今井 織江		不明
280	金澤 九月四日入門	鈴木 義太郎		加賀藩
281	本堂家來	高橋 浪江	重出	旗本家臣
282	中津	廣瀬 新五兵衛		中津藩
283		川崎 泰十郎		不明
284	加州	藏 儀左衛門		加賀藩
285	熊本 九月四日入門	永鳥 三平		熊本藩
286	同	竹内 而平	重出	熊本藩
287	大野	若津 彌太郎	重出	土佐藩の「岩崎弥太郎」の偽名か。(同No230)
288	同	平尾 喜内		土佐藩、大野藩は誤り。
289	長州	白井 小助		長州藩、儒学者白井弥藏の長男。佐久間象山から砲術、齋藤弥九郎から剣術、安積良斎から文学を学ぶ、吉田松陰と親交。
290		大屋 和左衛門		不明
291		河野 軍太夫		不明
292	九月十一日入門	平田 善助	重出	土佐藩、「弘田善助」の誤り。
293	熊本	兼崎 昌司		福山藩、「熊本(藩)」は誤り。
294		中西 藤左衛門		不明
295	中津	森本 長次郎		中津藩
296		宮田 平十郎	重出	大野藩
297	九月十四日入門	明石 保三郎		不明
298		有原 釣藏		不明
299	大垣	奥富 松三郎		大垣藩
300	土州	弘田 善助	重出	土佐藩、「寺田膳助」は誤り、「寺田左膳」が正解、土佐藩700石の中老。山内容堂側近で大政奉還を建白。
301	加州	泉澤 彌太郎	重出	土佐藩の「岩崎弥太郎」の偽名か(同No230)。
302	長岡	河井 継之助	重出	長岡藩、土佐藩河井は、新政府軍監の岩村精一郎は紹介でと小千谷の慈眼寺で会談、決裂し長岡戊辰戦争に、長岡は焼土化。

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録			誤字、誤読、誤解などの問題点
303	九月十六日入門	生田 彦次郎		不明、「彦次郎」は「彦四郎」の誤り。
304		萩野 柔進		不明
305	小笠原左京大夫内	松宮 薫助		小倉藩、「薫」は「董」の誤り。
306		原田 立太郎		不明
307		溝淵 廣之丞	重出	土佐藩
308	九月廿一日入門	下山 八郎		不明
309	九月廿一日入門	服部 彦藏		不明
310	土州	森澤 録馬		土佐藩
311	土州 九月廿五日入門	横田 兎三郎		土佐藩
312	同	井上 佐一郎		
313		難波 仙藏		不明
314	佐土原	伊十知早馬		佐土原藩 「伊十知」は「伊地知」の誤り。
315		砂越 努		不明
316		今井 市之丞		不明
317		河島 永次郎	重出	長岡藩、「永次郎」は「鋭次郎」の誤り。三島億二郎と改名して戊辰戦後の長岡復興に尽力。福沢諭吉と親交あり、幼少の牧野忠毅第13代藩主の教員を福沢應義塾に委託。
318	尾州 十月三日入門	早瀬 權右衛門		尾張藩
319	外雲關小藩	加藤 左膳		不明(外雲關小藩)
320	同	湊 三郎		不明(外雲關小藩)
321	同	横田 千之丞		不明(外雲關小藩)
322		今井 謙助		不明
323	十月四日入門	長沼 覺		不明
324	佐賀藩	成富 八助		佐賀藩
325		鴨折 彌太夫		不明、「太」は「大」の誤り。
326	中津	小口 順之助		中津藩
327	上田	瀧澤 省吾		上田藩
328	麾下(きか)	山岡 熊次郎		旗本、「麾下」は「旗本」の意味。
329	上田 十月八日入門	岡部 健六		上田藩
330	上田 十月八日入門	横田 漸次郎		上田藩
331	上田 十月八日入門	蔭山 半藏		上田藩
332	上田 十月八日入門	山田 幸兵衛		上田藩
333	上田 十月八日入門	鎌原 伊理右衛門		上田藩

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録			誤字、誤読、誤解などの問題点
334		姉崎		不明
335	十月十日入門	加村 織之丞		不明
336		金崎 庄藏		不明
337		岡部 健六		不明
338	上田	恒川 才八郎		上田藩
339	同 九月十七日入門	齋藤 盛太郎		上田藩
340	小笠原	野澤 蓑藏	重出	土佐藩、「小笠原」は誤り。
341		福岡 湮太郎		不明
342	土州 九月十七日入門	小笠原 勇之助殿	三重出	幕 臣
343	土州	古田 小膳	重出	土佐藩、「古田小膳」は誤り、「寺田左膳」が正解、山内容堂側近で大政奉還を建白。
344	同	山田 太平		土佐藩
345	同 九月十七日入門	野中 太郎	重出	土佐藩、「太郎」は「太内」の誤り。野中兼山の末裔。吉田東洋側近で大目付。
346	同	阿部 喜藤次	重出	土佐藩
347	同	衣斐 小平		土佐藩
348	同	山本 大藏		土佐藩
349	九月十七日入門	川勝 光之助	重出	幕 臣、幕府陸軍歩兵頭並
350		伴 鐵太郎	重出	幕 臣、長崎海軍伝習所2期生・築地軍艦操練所教授・慶応4年軍艦頭
351	熊本	坂部 啓藏		熊本藩
352	薩州	有川 喜左衛門		薩摩藩
353		野中 太内	重出	土佐藩
354		高村 直藏	重出	土佐藩
355		宮原 治郎左衛門	三重出	不明
356		折田 與右衛門	重出	中津藩
357		上川 記左衛門		不明
358	薩州	橋口 源左衛門		薩摩藩
359		衣笠 卯七郎		不明
360		村岡 治八郎		幕臣家来
361		阿部 喜東次	重出	土佐藩
362		佐藤 幾之丞		不明
363		尾崎 彌三左衛門		不明
364		永井 鎧之丞		不明

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	嘉永六年癸丑六月砲術稽古出座帳抄録			誤字、誤読、誤解などの問題点
365		服部 藤兵衛		不明
366		川俣 文助		不明
367	大垣	伊藤 惣之進		大垣藩
368	同	明石 辨之助		大垣藩
369	諸侯 (重出)	逸見 六郎	重出	諸侯家臣
370	土州	大庭 毅平	重出	土佐藩、谷村才八、坂本龍馬と共に江戸遊学し象山塾に。藩大目付。
371	土州	谷村 才八		土佐藩、同上
372	十二月朔日入門	坂本 龍馬		土佐藩、同上、郷土。薩長同盟に尽力、倒幕運動・明治維新に関与。
373	熊本 十二月七日	莊村 助左衛門		熊本藩
374		豊逸 政之丞		不明
375		三浦 治郎右衛門		不明
376	御家人	設楽 寛司		幕臣(御家人)
377	長岡	稲垣 興七		長岡藩
378	同	佐藤 廣三		長岡藩
379	土州	野澤 和泉		土佐藩
380		溝口 廣召	重出	土佐藩、「廣召」は誤読で「廣見」が正解。
381	十二月十四日	越賀 範三郎		不明
382	秋田	柳澤 主馬		秋田藩
383	秋田	茂木 享左衛門		秋田藩
384		田邊 太市		不明
385	長岡	菅沼 幾三郎		長岡藩
386	熊本	莊林 菅太郎		熊本藩
	安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録			
387		丹羽瀬清左衛門		不明
388		菊地 新藏		不明
389	大垣 戸田家老臣諱忠寛字栗卿通称二兵衛鐵心と號す	小原 仁兵衛		大垣藩、「二」は誤り「仁」が正しい。美濃大垣藩城代の「小原鉄心」、維新の版籍奉還で大垣藩大参事。
390	(重出)	藤原 重太	重出	不明
391	大垣	小寺 常之助		大垣藩
392	小笠原	村岡 金八郎		幕臣家臣
393	中津 従是以下島津君門人	大西 一郎次		中津藩
394	中津 従是以下島津君門人	戸倉 新右衛門	重出	中津藩
395	中津 従是以下島津君門人	荒尾 五郎三郎	重出	中津藩

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録			誤字、誤読、誤解などの問題点
396	中津 従是以下島津君門人	荒尾 繁五郎		中津藩 「五」は誤り「次」が正解。
397	中津 従是以下島津君門人	内田 左四郎	重出	中津藩
398	土州	大場 義之丞	重出	土佐藩 「義之丞」は誤り「義兵衛」が正解。
399		渡邊 銀次郎	重出	不明
400	中津 (重出)	築 又之丞		中津藩
401		中村 清五郎		不明
402		加治木部兵衛	重出	不明 「梶木軍之丞 (No443)」と同一人物では。
403	松代 正月十四日	鈴木 熊次郎		松代藩
404	(松代藩)	出浦 惣右衛門		松代藩
405	(同)	原 半七郎		松代藩
406	(同)	小川 邦人		松代藩
407	(同)	藤井 淺右衛門		松代藩
408	(同) 五月十四日	松村 助右衛門		松代藩
409	(同)	瀧村 渚		松代藩
410	(同)	鎮目 實之助		松代藩
411	(同)	玉川 渡		松代藩
412	(同)	久保 喜代馬		松代藩
413	(同)	根村 熊五郎		松代藩
414	(同)	岡本 精一郎		松代藩
415	(同)	小宮山 登		松代藩
416	(同)	前田 角次郎		松代藩
417	(同)	小松 文治		松代藩
418	(同)	友野 傳藏		松代藩
419	(同)	根本 順藏		松代藩
420	(同)	石川 新八		松代藩
421	(同)	畑 權之丞		松代藩 「權之丞」は誤り、「權兵衛」が正解。
422	(同)	近藤 友喜		松代藩
423	(同) 正月十四日	禰津 直人		松代藩
424	筑後守息	水野 甲太郎(殿)		幕臣
425	松代	小幡 長右衛門		松代藩
426	中津	安食 鑄次郎		中津藩
427	膳所	久保田 熊司		膳所藩
428	松代藩	廣澤 峯吉		松代藩

	頭書(藩名、藩主名、その他)	門人名	重複	備考(筆者記載)
	安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録			誤字、誤読、誤解などの問題点
429	松代	松木 源太郎		松代藩 「松木金太郎」の「父」。和漢洋の三学、特に西洋砲術は象山没後、鎌川賢之助と共に藩士教授を担当。維新後は、松代学校長(旧松代文武学校)として多くの人材育成。
430	(松代藩)	片岡 弘人		松代藩
431	(同)	牧野 大右衛門		松代藩
432	(同)	大森 藏之丞		松代藩 「藏之丞」は「莊兵衛」が正解。
433	(同)	成澤 縫殿右衛門		松代藩
434	(同)	山田 權之助		松代藩
435		藏田 言合右衛門		不明
436		小休 待次郎		不明
437		代番 周左衛門		不明
438		川面 誠之助		不明 「誠之助」は「城之助」が正解。
439		和田 潭藏		土佐藩
440	大森町 正月十二日	林 東		不明
441		向山 正朝		不明
442		岡 虎之助	重出	不明
443		梶木 軍之丞	重出	不明 「軍之丞」は「軍兵衛」が正解。
444	松本	小笠原 歩三郎		松本藩
445	元中津	澤田 衛介	重出	中津藩(元)
446	大垣	廣木田兵次郎		大垣藩
447		子安 鐵五郎		大垣藩 「子安竣」、「鐵五郎」は号。『横浜毎日新聞』創刊、出版社「日就社」を創業、日本最初の英和辞典『英和字彙』を発行、読売新聞社の創立者。
448	大垣	山村 定三郎		大垣藩
449	中津	崎山 金三郎		中津藩
450		奥田 彖之助		不明
451	越前	橋本 左内		越前藩 幕末思想家、緒方洪庵「適塾」を経て象山塾に。15歳のときの著書『啓発録』。
452		小笠原 勇之助	三重出	幕 臣、「殿」を付すべき。
453	久留米神職牧眞木和泉守	牧 和泉		久留米藩 神官・眞木和泉守保臣(眞木和泉守)。

【 注 記 】

- 1) 緒方洪庵 (1810-1863) の門人帳「適々齋塾姓名録」は、緒方富雄『緒方洪庵伝』(岩波書店、1963) に所収。福沢諭吉 (1835-1901) の慶應義塾の塾生名簿は、丸山信『福沢諭吉とその門下書誌』(慶應通信、1970) 及び『福沢諭吉門下』(日外アソシエーツ株式会社、1995) に所収、伊東玄朴「門人姓名録」は伊東榮『伊東玄朴伝』(玄文社、1915) に所収。

また、他にも例えば西洋砲術の私塾に関しては、高島秋帆 (1798-1866)、彼の門下生で幕臣の江川坦庵 (1801-1855) の門人録「御塾簿」は、大原美好『江川坦庵の砲術』(静岡県出版文化会、1978) に所収、同じく高島門下の幕臣・下曾根信敦(金三郎、1806-1874) の門人録「分限帳」は、下曾根側近の門人であった土佐藩門人・徳弘弘藏(董齋、1807-1881) の書写版が残っており、坂本保富『幕末期洋学教育史研究』(高知市民図書館、2004) に全文収録した。さらに、同書には下曾根門人で土佐藩に西洋砲術を普及させた徳弘自身の門人帳「弟子諸」(坂本龍馬や武市半平太を含む563名の門人名を記した名簿) も原史料を解説して同書に収録している。

他にも日蘭学会編『洋學史事典』(雄松堂出版、1984)、竹内博編『日本洋学史事典』(柏書房、1994)、『国立歴史民俗博物館報告書』第116集 (2004)、あるいは、洋学関係の研究書や各種学会の論文に様々な洋学私塾の門人名簿が収録されている。

- 2) 本文中で詳細に論証するが、象山の西洋砲術門人名簿(原本)の存在は、象山没後から現在までの約150年間で、全く確認できないできた。だが、増訂版『象山全集』第5巻(昭和11年)所収の「訂正及門録」が刊行されると、それがあたかも象山門人録の「原本」であるかのごとくに、全く疑いなく無批判に利用されてきた。しかし、その門人録は決して「原本」ではないのである。この点を本稿が論証するわけであるが、「及門録」は、象山没後、門人たちが各種の象山関係史料から象山門人を析出して作成したものと考えられる。従って、門人名や所属する藩名・藩主名その他の面で、多くの問題点(関係史料の誤読、誤字、誤解などの誤謬)を多く内在する門人帳なのである。

上述のような象山研究の最も基本的な門人史料の問題性に着目し、その内容を詳細に検証した論考を発表した最初は、筆者自身であった(【注記6】参照)。その後、筆者の研究成果を批判的に検討され、新たに京都大学附属図書館所蔵の「及門録」を紹介されたのが、佐賀大学教授・青木歳幸氏(当時は長野歴史館学芸員)であった。同氏の功績は大きい。だが、同氏が取り上げて紹介した京大版「及門録」の研究も、研究視座や史料解説、象山門人の理解の仕方などの諸点で、多々、問題を有していた。それ故に筆者は、同氏の研究論文を詳細に分析した論文「青木歳幸氏の京都大学附属図書館所蔵『及門録』の解説紹介とその誤謬」(『平成国際大学論集』第19号、2014) を発表したわけである。

- 3) はたして象山は、いつからいつまでの期間、どこでどのような教育活動を展開したのか。その結果、どのような門人が、どの程度、彼の私塾で育成され輩出されたのか。また、彼ら門人たちは、幕末期以降の日本近代化過程で、どのような活動を展開したのか、等々の問題は、一部の有名な門人を除いて、ほとんど看過されてきた。象山=西洋軍事科学者(西洋砲術・西洋兵学)という固定観念の下で、象山研究は西洋軍事科学を中心とする狭い領域に限定され、一部の代表的な門人の紹介に留まってきた。

何故であろうか。終戦直後、国家主義者から平和を愛する民主主義者に転換した多く

の研究者たちは、明治以降、とりわけ昭和の戦前・戦中の研究を否定することが民主主義の基本的視座とみる歴史学界等の軍事科学研究に対する否定的な風潮が強かったのである。だが、昭和30年代後半以降、特に40年代以降は、欧米人による日本研究が活発化し、近世との連続的視座で近代を捉え、昭和戦前までの近代史との連続性を重視して、戦後日本の復興や発展を見直す歴史観が、具体的な研究成果をもって相次いで示されてきた。これが、昭和戦後における日本研究の大きな転機になったとみてよい。

以後、軍事科学研究も科学として研究対象に含められるような変化が生まれた。その結果、それまでの象山＝西洋軍事科学者との固定的な象山理解を脱皮し、純粋な科学史的研究の対象として様々な研究視座から分析され優れた研究成果が示されてきた。例えば東徹『佐久間象山と科学技術』（思文閣出版、2003）や数学史的研究（川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面―内田五観と高野長英・佐久間象山』、東海大学出版会、1982）。

なお、象山の故郷である信州松代の真田宝物館には、象山関係史料が数多く所蔵されており、同館の降旗浩樹学芸員を中心に、象山関係史料を精力的に解説・紹介され、具体的な史料内容に即した多様な象山研究を可能とする研究視座や研究領域の拡大を示唆してくれる多数の優れた論文を公表されてきた（同館紀要『松代』掲載の象山関係論文は多数）。

ところで、象山門人帳といわれる「及門録」は、松代藩の江戸深川藩邸や江戸木挽町の私塾時代における象山門人録と理解されてきた。だが、その記載対象の期間は、黒船来航前後の嘉永・安政年間（「及門録」への門人記載は嘉永2年から同6年の間と極めて短期間）における入門者となっている。しかしながら、本文中で詳述したごとく、象山の教育活動は、彼が天保7年（1836）に松代藩儒官（御城月並講釈助）に任ぜられてから元治元年（1864）に京都で斬殺されるまでの約30年間に及び、その間、博学多才な彼は、公私に亘って門人たちに多種多様な学問技芸（和漢洋の学問技芸）を教授してきた。彼の「東洋道徳・西洋芸術」という日本近代化の思想にとって、西洋軍事科学（西洋砲術・西洋兵学）は重要な意味を有するものである。だが、それは、彼の学問思想の一部分に過ぎないものである、とみなければならない。

- 4) 増訂『象山全集』（信濃教育会編、全5巻）第1巻の「凡例」1頁。
- 5) 増訂『象山全集』第5巻所収の「訂正及門録」を、あたかも象山門人帳の「原本」であるかのごとくに史料批判をせずに利用した研究事例としては、佐藤昌介『洋学史論考』（思文閣出版、1993、299頁）、海原徹『近世私塾の究』（思文閣出版、1983、275-278頁）をあげることができる。他にも博士学位論文クラスの研究で堂々と「訂正及門録」を使用している事例がある。
- 6) ①「象山研究史上の問題点―特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って（上）」（信濃教育会編『信濃教育』第1229号、1989年4月）
②「象山研究史上の問題点―特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って（下）」（信濃教育会編『信濃教育』第1230号、1989年5月）
③「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者―幕末維新期における『東洋道徳・西洋芸術』思想の教育的展開―」（日本歴史学会編『日本歴史』第506号、1990年7月）
- 7) ①京都大学付属図書館所蔵「及門録」（毛筆版）の存在とその解説及び内容分析
論文：「象山門人の確定に関する基本史料の検討（Ⅰ）―京都大学付属図書館所蔵「及門録」の内容と問題点―」（信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年

退職記念論文集』2013年3月)

②信濃教育博物館所蔵「及門録」(毛筆版)の存在とその解説及び内容分析

論文:「象山門人の確定に関する基本史料の検討(Ⅱ)―信濃教育博物館所蔵『及門録』の内容と史料の意義―」(信州大学全学教育機構『坂本富富教授定年退職記念論文集』2013年3月)

③国立歴史民俗博物館公開『佐久間象山門人帳データ』(「及門録」)の存在とその「及門録」(京大版)の誤読・誤記・誤解の析出

論文:「国立歴史民俗博物館公開『佐久間象山門人帳データベース』の誤謬―象山門人帳史料「及門録」の比較研究(Ⅲ)―」(平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第1号、2013年3月)。

8) 大平喜間多『佐久間象山』(吉川弘文館、150-151頁)。安政の大獄で処刑を直前にした松陰は、獄中で学問することの究極的な意義を自問自答した。が、最後に残された最大の難問は、恩師象山への質問状の最後の第3條に記した「丈夫の死所は何れの処が最も当れるか」であった。この質問状を書いた後、松陰は斬首処刑の前に、次のような自らの答えに辿り着く。「死して不朽の見込みあらばいつでも死ぬべし。生きて大業の見込みあらばいつでも生くべし」。この答えが自らの難問を門人高杉晋作に対する回答の形で表現したものであった(『吉田松陰全集』第8巻、安政6年7月中旬「高杉晋作宛書簡」、同書367-368頁)。

9) 井上哲次郎(1855-1944)は、筑前太宰府に医師の三男として生まれた。明治日本を代表する哲学者で、ドイツを主とした多くの西洋哲学を日本に翻訳紹介した。哲学用語の「形而上」(Metaphysical)の訳者として有名である。帝国大学では日本人最初の哲学教授となり、1898年には東京帝大文科大学学長。1923年の退官後は東洋大学教授。1924年からは初代の貴族院帝国学士院会員議員。戦前日本の枢要な要職を歴任した代表的文化人として活躍した。

また、『教育勅語』(明治23年発布)の解説書関係の著書、例えば『勅語衍義』(敬業社、上下2巻、1891)、『教育ト宗教ノ衝突』(敬業社、1893)等も多数出版し、西洋と東洋における国家と道徳の問題の相違に関しても強い関心を抱いていた。その井上は、第一高等中学校の嘱託教員・内村鑑三(1861-1930、キリスト教思想家で福音主義信仰と日本独自の無教会主義のキリスト教を提唱)が、同中学校の講堂で催された教育勅語奉読式で、天皇親筆の署名に最敬礼をしなかったという事件、いわゆる「不敬事件」

(1891)が起こると、内村を激しく非難し、植村正久(1858-1925、キリスト教の伝道者・神学者)と論争を展開した。井上は、国家主義の立場からキリスト教を排撃し、国民道徳を主張したのである。その後の井上は、日本の伝統的な儒教思想の研究に取り組み、『日本陽明学派之哲学』(1900)・『日本古学派之哲学』(1902)・『日本朱子学派之哲学』(1905、いずれも富山房から出版)という日本儒学思想研究に関する三部作をまとめ儒教研究に貢献した。

なお、井上に関する参考文献としては関皇作編『井上博士と基督教徒』(哲学書院、1893)、大島晃「井上哲次郎の『東洋哲学史研究』」(『ソフィア』45巻3号、1996)など、キリスト教研究と儒教研究の両分野に関する研究に対する論評が多い。

10) 井上は『東洋学芸雑誌』第31巻第398号(1914.11)に論文「佐久間象山及門録に就いて」を発表した。同誌は、1881年10月に、東洋学芸社から創刊された自然科学を含む日本最初の学術総合雑誌。イギリスの科学雑誌《Nature》を模範とした日本国民の文化啓蒙を目的に編集された。井上は、同誌の発刊を含め編集・刊行の中心的存在であった。同

誌は加藤弘之や菊池大麓など、主に官学系の大物学者を多用する日本を代表する科学啓蒙雑誌として普及した。

- 11) 井上哲次郎論文「佐久間象山及門録に就いて」は、A4版2段組で僅か4頁の短い論文。
 - 12) 最初に刊行された『象山全集』は上下2巻。「象山没後五〇年祭」の翌年（大正2、1913）に刊行された同書は、何と上巻が1166頁、下巻が1370頁、合計2536頁という非常な大著であった。だが、本書刊行の20年後（1934）には、より膨大な増訂版『象山全集』（全5巻、1934—1936）の刊行が開始された。2巻本に倍する全5巻本の充実した増訂版が出版されると、これが象山研究の決定版として活用され、初回本（2巻本）は存在感を失っていくことになる。
 - 13) 14) 15) 前掲、井上哲次郎論文「佐久間象山及門録に就いて」より引用。
 - 16) 石黒忠恵『懐旧九十年』（東京博文館、1936、97—116頁）では、象山との出会いが彼自身の運命を一変させた生涯の一大事だったと回顧している。石黒の象山との遭遇は、筆者自身の教育思想のキー概念である「教育は出会いの衝撃」によるとの教育的本質の正統性を実感させてくれる事例である。
 - 17) 「及門録」といっても、後述するように幾種類も存在する。だが、それら全てに門人名の重複記載を含めて400名以上の門人名が記載されている。また、一部、時代の重なる福沢諭吉の慶應義塾は、幕末期の①鉄砲州時代（文久3年春—慶応4年3月）の入門者が53名と少なく、その後は、②新銭座時代（慶応4年4月—明治4年1月）98名、③三田移転から明治13年までが290名、④明治14年から明治22年末までが101名、⑤大学部創設から福沢諭吉の没年まで（大学創設—明治34年末）42名であった。なお、慶應義塾の創立（文久3、1863）から福沢の他界（明治34、1901）までの約40年間における入塾生の総数は584名であった。少数精鋭主義の人材育成教育を貫いた慶應義塾の特徴と言えるかも知れない。
- 以上は、丸山信編『福沢諭吉門下』（日外アソシエーツ株式会社、1995）によるが、同書によると福沢諭吉が慶應義塾を安政5年（1858）に創設してから明治34年（1901）に他界するまでの44年間に入門した塾生は合計494名を数える。同じ洋学系私塾とは言っても、福沢と象山の私塾では教育の内容や方法が対照的である。が、象山の私塾が福沢の慶應義塾の門人を遙かに凌ぐ盛況ぶりを示したのは、幕末期の軍事科学系洋学塾という象山塾に対する時代的要請によるものであったとみることができる。
- 18) 象山門人帳といわれる「及門録」は、一般には「西洋砲術門人名簿」と理解されている。だが、本稿で同塾の教授内容を分析し論証したが、実際には儒学、洋学（各種の西洋学問）など東西両洋の様々な学問を学ぶ門人が入門して学んでいたのである。
 - 19) 前掲、増訂版『象山全集』第4巻、15頁（嘉永4年6月22日付松代藩八田嘉助宛書簡）。
 - 20) 安政元年（1854）4月、幕府に象山が逮捕された後、しばらくは塾頭の蟻川賢之助が同塾での稽古を継続した。だが、同年の九月、象山に郷里松代での蟄居という判決が下ると、蟻川も松代に帰り、鉄砲奉行等の公務の傍ら、洋学私塾「自強堂」を開いて、象山塾同様の洋学、オランダ語、地理、兵書、砲術書、分析、等々の洋学系の学問を教え（『長野県教育史』第8巻「資料編2」147—148頁を参照）、独自に私塾を開いて藩士教育に当たった（『弘化年間ヨリ佐久間象山ノ門ニ入り和蘭学及ヒ西洋砲術ヲ受ク。象山有罪松代ニ禁錮セラル尋テ蘭学及砲銃訓練法ヲ武州江戸信州松代ニ教授セリ。』（『長野県教育史』第8巻「資料編2」（147頁））。
 - 21) 前掲、『東洋学芸雑誌』第31巻第398号。

22) 『象山全集』第3巻(「書簡」585頁。松代在住の母親宛書簡)。

23) 前述の通り、「訂正及門録」を、象山の「西洋砲術門人帳」と思い込んで使用している研究書が多い。それらは、歴史研究上における史料の理解と使用の在り方において問題である。誤った理解による「及門録」使用の代表的な事例を次にあげておく。

①洋学史研究者の佐藤昌介『洋学史論考』(思文閣出版、1993)

増訂『象山全集』所収の「訂正及門録」の内容をそのまま鵜呑みにして、門人の藩別門人数を分析。また、同史料を嘉永2年(1849)から同5年(1852)までの4年間の門人帳であると捉えるなど安易な誤解をし、さらには門人名の「重出」や「三重出」という問題を全く無視して藩別門人数を分析したり、門人が帰属する藩名や藩主名の誤謬を看過して、誤った記載の通りに藩別門人数を計算しており、同書は問題点が多く看過しえない。それは、増訂『象山全集』の編纂者側の「及門録」を収録するに際しての注意書き、即ち、不備で問題の多い門人帳史料「訂正及門録」を可能な限り訂正し増訂版全集に収録したことの明記、また「訂正及門録」の冒頭に「なほ不明な箇所も存し未だ完璧を期し難し」との注記を付したことも無視して、緒方洪庵や伊東玄朴、あるいは福沢諭吉など自署を基本とする門人帳と同列にみて、象山の「及門録」を全く問題のない歴史史料と思い込んで使用している(同書299頁)。

②教育史研究の梅原徹は著『近世私塾の研究』(思文閣出版、1984)の中で、佐藤昌介の場合と全く同様に、「訂正及門録」が内在する様々な問題を全く無視して象山門人の藩別入門者を析出し全国分布を析出している。同書は、佐藤昌介『洋学史論考』と共に、使用する史料の真偽(史料批判)を全くせずに、史料が内在する諸々の問題点を全く無視した研究の典型的な事例である。特に象山の「訂正及門録」を「兵学門人」と捉えている点は、史料の中身を全く精査せずに、象山塾の教育内容を誤解している証左である。(同書276-278頁)。

③蘭学大家の板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』(吉川弘文館、1959、同氏の文学博士の学位論文)、あるいは地元松代の郷土史家で象山研究に執念を燃やした大平喜間多『佐久間象山』(吉川弘文館・人物叢書、1959。象山塾の教育内容に関する理解が粗雑)などは、「訂正及門録」を鵜呑みにした研究作品である。さらに、平成時代に入ると蘭学研究の大家に成長し、次々と蘭学研究の大著を出版する片桐一男の初期における論文「蘭学者の地域的・階層的研究」(『法政史学』第13号、1960)は学術論文とみるには粗雑極まりない体裁と内容。また、「訂正及門録」に関する先行研究の成果を手際よくまとめた奈良本辰也・土方郁子『佐久間象山』(清水書院、1975)などにも問題があり、象山門人関係史料「訂正及門録」の理解の仕方や取り扱いに、史料批判が全く欠如し、問題を問題と感じないままに使用されてきている。

なお、上にあげた著書・論文の「訂正及門録」を誤解して使用した問題点についての具体的事例をあげての詳細な分析は、前掲の拙論、①「象山研究史上の問題点—特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って(上)」(信濃教育会編『信濃教育』第1229号、1989.4)、②「象山研究史上の問題点—特に門人帳『及門録』の理解と使用に関する問題を巡って(下)」(信濃教育会編『信濃教育』第1230号、1989.5)を参照していただきたい。

24) 坂本保富論文「門人帳史料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者—幕末維新时期における『東洋道徳・西洋芸術』思想の教育的展開—」(日本歴史学会編『日本歴史』第506

号、1990.7)で、詳細に分析し論証している。

- 25) 『易経』の重要概念である「窮理」とは、「理を窮め性を尽くしてもって命に至る」(性即理：情に動かされず、性に従って生きることが、宇宙の根本原理である理に即した人間の生き方であるという考え方)と説き(『易経』「説卦伝」、岩波文庫版、297頁)、本来の意味は「天下の道理を窮め尽くし、人間の本性を知り尽くして、天命を知るの境地に到達すること」を学問の目的とするという意味である。

だが、象山は、この「格物窮理」を、単なる理想的な人間の形成理論(人倫を貫く真理探究の理論)に止まらず、彼が中国の学者で最も尊敬する邵康節(1011-1077、程顥・程頤・朱熹など朱子学の形成者たちに多大な思想的影響を与えた学者)の強烈な影響を受けた(佐久間象山著「邵康節先生文集序」、増訂『象山全集』第1巻「象山淨稿」60-62頁)。象山は、邵康節との邂逅によって朱子学における極めて重要な概念である「格物窮理」という方法的原理を主体性をもって独自に強調して解釈し、しかも、その対象を人間の事象である「倫理」よりも自然的事象「物理」に重点をおき、西洋科学に通底する実験や観察などの方法を重んじる数理科学重視の学問観・科学観・教育観を形成し、それを実証すべく自ら学問探究と教育実践において貫いた。その彼は言う、「学の要は格物窮理に在り」と。即ち「格物窮理(物に格(き)わめる、ただす)ことによって、その物に内在している理を極めること)」を探究することが、学問の基本原理であり、それ故に「物事を探究して真理を究める」ことを学問研究の方法的原理として捉え、探究の対象を軍事科学を含めた西洋諸科学にまで拡大した。「西洋砲術」も「西洋兵学」も、他の学問と同様に「格物窮理」の対象である、との象山の強固な学問に対する経験的信念は如何なる批判や中傷をも物ともしなかったのである。

その結果、象山は、『易経』の強調する「格物窮理」の対象として東西両洋の多様な学問文化を捉え、万物を貫く「真理」を学問探究しようとした。そして最終的には、東西両洋の学問文化を比較統合した日本近代化を志向し実現する「東洋道徳・西洋芸術」という象山自身の思想に結晶化するわけである。

- 26) 前掲、『東洋学芸雑誌』第31巻第398号。
- 27) 「子安峻」「及門録」では「子安鐵五郎」(大垣藩)に関しては、『読売新聞百年史』(読売新聞社、1976)、竹内繁『読売新聞の創始者 子安峻』(日本生産性本部、1992)、西田長寿「子安俊 内外新聞列伝」、西田長寿『日本ジャーナリズム史研究』等を参照。
なお、「西村茂樹」については、西村先生伝記編纂会編『泊翁西村茂樹伝』(日本弘道会、上下2巻、1933)、古川哲史著『泊翁西村茂樹 転換期日本の大思想家』(文化総合出版、1976)、真辺将之著『西村茂樹研究 明治啓蒙思想と国民道徳論』(思文閣出版、2009)等を参照。
- 28) 「北澤正誠」については、宮本伸『佐久間象山』(増訂版、岩波書店、1935)、北澤正誠編『蘭学者伝記資料』((青史社、1975)。同書に北澤の「略歴」あり)、『明治過去帳』(大植四郎、東京美術、1971)、『信濃名士傳』(初編、松下軍次、国文社、1894)、『信濃教育会更級郡埴科郡人名辞書』(1949)その他を参照。
- 29) 佐久間象山『省警録』(岩波文庫版、第41條)。
- 30) 前掲、『信濃教育会更級郡埴科郡人名辞書』(1949)。
- 31) 前掲、松下軍次編『信濃名士傳』(国文社、1994)
- 32) 北澤は、象山から西洋砲術・西洋兵学・蘭語学その他の洋学全般を広く学んだ。特に儒学(漢詩文)を幼少時から学んで非常に造詣が深く、象山の親友であった幕末明治期

の日本漢学界を代表する碩学の中村正直（1832—1891）とも儒学（漢学）を媒介として昵懇の間柄にあった。

なお、中村正直は、佐藤一斎門下における象山の弟弟子であり、両者の親交は極めて深く、また、その門人である北澤正誠とも漢学を通じて親しい間柄にあった。中村自身も蘭学を桂川甫周（1751—1809）、前野良沢（1723—1803）、杉田玄白（1733—1817）など、当時の日本を代表する最高峰の蘭学者たちに学び、しかも箕作奎吾（1852—1871、慶応2年に開成所教授補から幕府留学生に選ばれ35歳で英国留学、軍事伝修・政治・兵制等諸学術を研究）について英語をも学んだ。その後、幕府昌平坂学問所の教授となり、佐藤一斎の後継者となった。

まさに中村は、幕府儒官として幕末期日本の儒学界を代表する碩学であった。しかし上述のごとく彼は、儒学（漢学）ばかりでなく、蘭学（オランダ語学）、英語をも自由に操れる語学の天才であった。特に慶応2年（1866）幕府のイギリス留学生監督として渡英し本場で修練した英語力は抜群であった。帰朝後の明治3年（1870）11月、サミュエル・スマイルズ（1812—1904、作家、医者）の“Self Help”を『西国立志篇』と翻訳して出版した。その序文の“Heaven helps those who help themselves.”を「天は自ら助くる者を助く」としたのは実に名訳である。さらに同じ英国のジョン・スチュアート・ミルの“On Liberty”を『自由之理』と翻訳して日本人に紹介した。彼は語学の天才であり、特に漢学を極めた彼の日本語の良さを活かした翻訳力は流麗であり、日本人の心に響くものがある。

その中村が、生涯に亘り象山を尊敬し敬慕したのである。特に象山門人の北澤正誠や小林虎三郎とも親しく、北澤や小林が、象山没後に漢詩集『象山詩鈔』（2冊）を刊行する際には、象山の難解な漢詩文の最終校訂を中村に依頼した。また、信濃教育会も、最初の『象山全集』全2巻（大正2年）を刊行するときには、収録する象山の漢詩文史料の校訂を、中村に委嘱して万全を期した。

かくして中村は、漢詩文の校正など、尊敬する佐藤一斎門下の兄弟子や親交のあった象山門人たちの依頼は全て引き受け、多くの漢詩文の校訂をした。吉田松陰や大久保利通と同年配の天才学者である中村は、象山とは親子ほどの年齢差があった。が、象山は年齢差を超えて中村を尊敬し信頼して、意気投合する人間関係にあったのである。

- 33) 前掲、佐久間象山『省警録』（岩波文庫版、第40條）。
- 34) 松下愛論文「松代藩と狩野芳崖」は、長野市松代にある真田宝物館内の松代文化施設等管理事務所が発行する研究紀要『松代』第20号所収（平成19年3月）。真田宝物館が所蔵する象山関係文書を丹念に解読され、松代藩との関係から狩野芳崖を分析された論文。優秀な研究仲間（学芸員）である先生方との日常的な論議を通じて史料を解読し解釈された論文である。
- 35) 古川修論文「狩野芳崖—時代の波乱を背景とした—」（4回連載）、「美術懇話会」の美術研究雑誌『中央美術』（帝國美術院附屬美術研究所編、第6巻1号—4号）に所収。
- 36) 同上の古川論文（上）30頁。
- 37) 同上の古川論文（上）7頁。
- 38) 同上の古川論文（上）8頁。
- 39) 同上の古川論文（中）7頁。
- 40) 渡辺華山（田原藩の家老で蘭画家、1793—1841）も朱子学を学んだ佐藤一斎の門人。アヘン戦争を契機にいち早く幕府の閉鎖的な対外政策や海防不備を批判（『慎機論』）。学

間的・思想的に象山と通じ合い、交友を結んだ。彼は、当時の洋学研究グループ「尚南会」（高野長英、小関三英、渡辺華山、江川英龍、川路聖謨などの洋学関係者の研究グループ）にも加わり、西洋諸国の動向に強い関心を抱いて洋学研究にも励んだ。その華山が、特に絵画を含めた幅広い洋学知識を有する象山と親交を結び、互いに切磋琢磨して影響し合ったことは疑いえないことである（前掲、宮本伸『佐久間象山』、820-834頁を参照）。

- 41) 古田亮『狩野芳崖・高橋由一』（ミネルヴァ書房、2006、28-29頁）。本書によると、狩野は、嘉永4年（1851）に「象山が木挽町に私塾を移転した24歳のときに象山塾に入門」したと推察している（同書、「年譜」3頁）。
- 42) 同上書、古田亮『狩野芳崖・高橋由一』、同書85頁を参照。
- 43) 象山は、黒船来航（1853）の10数年も前に、アヘン戦争を契機とした日本の欧米列強に対する緊急対応策「海防八策」をまとめ、松代藩主で老中海防係の真田幸貫（1791-1852、松平定信の次男）に上書し警告していた。象山自身もアヘン戦争を契機に西洋の軍勢力や学問力、そして道徳性についても強い関心を抱いて調査研究に向かったのである。
特に象山の先駆的な提言がまとめられた上書の内容が、その後の幕末期の時代展開の中で、勝海舟、坂本龍馬、西村茂樹、小林虎三郎など象山門人その他の国家防衛策「海防策」の上書に継承されていく。特に黒船来航時における開港問題に関して、象山は、幕府の下田開港に反対して強く横浜開港を主張し、門人たちに各自の藩主宛に上書建白による説得を要請した。この恩師の依頼を最も誠実に実行し老中職にあった藩主に上書し、江戸遊学を中断して帰郷謹慎処分を受けた門人が、美談「米百俵」の主人公・小林虎三郎（越後長岡藩門人）であった。詳細は坂本保富『米百俵の主人公 小林虎三郎—日本近代化と佐久間象山門人の軌跡—』（学文社、2011）、『米百俵の歴史学』（学文社、2006）を参照されたい。
- 44) 同上書、古田亮『狩野芳崖・高橋由一』85頁より引用。
- 45) 前掲書、佐久間象山『省警録』（岩波文庫版、末尾の第57條）。
- 46) 同上書、古田亮『狩野芳崖・高橋由一』275頁より引用。
- 47) 前掲、井上哲次郎論文「佐久間象山及門録に就いて」。
- 48) 増補版『佐久間象山』で新たに付け加えられたのは、「補遺第一」（先生と吉田松陰）、「補遺第二」（黒川良庵）、「補遺第三」（北澤正誠「滞京日記」重要史料、「補遺第五雑之部」で、計155頁である。
- 49) 信濃教育会更級教育部会編『更級郡埴科郡人名辞典』（1939、448-449頁）。その他、全ての辞典・事典類では「仲」が存命中の昭和戦前から音読みで「ちゅう」と呼び、そのようにフリガナ表現をしている。
- 50) 真田宝物館では、平成29年（2017）の9月20日（水）-12月18日（月）に「佐久間象山遺墨コレクション」（坂本五郎氏寄贈記念特別展「宮本家と佐久間象山」）を開催した。「宮本仲展」を初めて開催し、種々の史料を展示した。前掲の同館の降旗課長（学芸員）の解説史料の一件（象山と宮本仲の父・宮本慎助との書簡）に「仲」を「なかつ」と読み仮名（ルビ）を振っている箇所を発見して驚き、従来の「なか」という読み方の変更を迫られた。
- 51) 宮本市兵衛は、町田源左衛門に就き宮城流和算（江戸中期に京都の宮城清行が確立）を学び、更に最上流和算（江戸時代の会田安明を改組とする流派）をも修め、象山をはじめ松代藩の多くの子弟に算学を教授した。前掲、信濃教育会更級教育部会編『更級郡

埴科郡人名辞典』(468-469頁)。なお、御勘定役など藩の公的履歴については、『真田家家中明細書』(東京大学出版会、1988)323頁を参照。

- 52) 宮本慎助は、宮本市兵衛の嫡男で宮本仲の父親。象山との親交は深かった。彼の松代藩における役職は、父親の市兵衛を継承した家学の算学を活かした御勘定役(前掲『真田家家中明細書』321頁を参照)。
- 53) 森鷗外の東京帝国大学医学部の卒業席次が9番で、大学に残って研究者となり、文部省派遣国費留学生の対象となる夢は潰える。彼は、やむなく陸軍省に入り、東京陸軍病院の勤務となった。だが彼は、同省の陸軍医留学制度の第1回留学生に選抜され、ドイツ帝陸軍衛生制度研究の目的でドイツ留学を命じられた(山崎國紀『評伝 森 鷗外』大修館書店、2007、38頁その他)。
- 54) 「宮本仲」の経歴をはじめ、宮本家と松代藩の関わりの歴史、特に「仲」の象山研究に関しては、真田宝物館の北村典子専門員が詳しく、同氏の論文『佐久間象山』の著者宮本仲と『宮本家文書』について(松代文化施設等管理事務所発行『松代』第20号、平成19年(2007)3月は、原史料の解説に基づく有益な論文である。
- 55) 56)『松代町史』下巻(1972、683-684頁)。信濃教育会更級郡部会埴科郡部会編『更級郡埴科郡人名辞典』(1929)、470頁その他を参照。
- 57) 国立史料館編『真田家家中明細書』東京大学出版会(1986)、321頁。
- 58) 信濃教育会編『象山全集』全2巻(信濃毎日新聞、大正2年、1913)。
- 59) 象山全集(全2巻)が大正2年(1913)に刊行されてから21年後の昭和9年(1934)、増訂『象山全集(全5巻)』の刊行がはじまり、翌10年(1935)に完結(昭和9年に第1、2、3巻、昭和10年に第4、5巻を出版)。

増訂版の刊行理由は、初版の全集が、「象山先生五十年祭」(大正2年10月)の刊行に間に合わせるべく、準備期間が15ヶ月と極めて短期間で刊行であったこと。それ故に、収録すべき史料や史料校合などの諸点で不備の多い出来映えであった。そこで再度、決定版とも呼べる増訂版の全集を刊行すべく、昭和6年(1931)4月、宮本仲・飯島忠夫(学習院大学教授)・平野彦治郎(大東文化大学教授)・大平喜間多(郷土史家)・赤沢耕太郎(同)・羽田桂之進(同)を顧問とし、編纂主任には三井園二郎、編纂委員に土屋彌太郎・松本深・山口菊十郎・西山敏一・宮下忠道・宮坂亮・佐藤寅太郎・守屋喜七の体制で作業に着手し、予定通り刊行した。

なお、当時は東京に在住し喜寿に近い高齢の宮本は、この増訂版全集の編纂等に関する会議には東京から信州松代に毎回、出席したことであろうが、彼の人生をかけた長年の象山研究の成果を増訂版全集の充実に活かせることは、彼にとって慶賀の至りであったに相違ない。

- 60) 前掲、真田宝物館の北村典子論文『佐久間象山』の著者宮本仲と『宮本家文書』について』の中の③『象山先生事蹟摘要』を参照した。
- 61) 象山の「日本近代化に関する九ヶ条」は、同上の北村論文に所収。
- 62) 「感応公に上りて天下当今の要務を陳ず」は、増訂『象山全集』第2巻「上書」に収録されており、「海防八策」は上書の中で幕府が緊急に実施すべき事項を箇条書きにまとめた具体的な八ヶ条の提言(同書「浄書」の35頁)。
- 63) 天保13年(1842)の当時、「男女を問わず全ての国民に学校教育を」という「国民皆学」の教育思想は先駆的である。欧米勢力東漸の当時、世界的規模で日本の国家人民の安危を真剣に考えていた象山が、幕府が緊急に対処すべき緊要な国家施策の一つとして「男女国民皆学」という義務教育制度の実現をあげた。全ての事業の成否を決するのは、

それを担う人間（国民）の資質の問題である。それ故に、教育第一主義をもって日本近代化（国家の富国強兵）を実現すべきであるという考えが、西洋砲術や西洋兵学などの知識・技術よりも重要であるとするのが象山の信念であった。

- 64) 美談「米百俵」の歴史および主人公である小林虎三郎の思想と行動については、坂本保富著『米百俵の歴史学』（学文社、2006）および『米百俵の主人公 小林虎三郎—日本近代化と佐久間象山門人の軌跡』（学文社、2011）を参照。
- 65) 洋学の普及を願う象山は、従来の蘭日辞書『ハルマ和解』の絶対的な品不足と内容的な不備、それに非常に高価であることなどを改善するために、増訂版『蘭語語彙』を個人で編纂・刊行しようと企図、そのための必要な資金を松代藩の貸与に期待した。だがこれが不許可になると、嘉永2年（1849）7月、今度は佐久間家の知行100石を抵当に松代藩から1000両の大金を借り受け、これを「三箇年に不残返納可仕候」との借金証文を、藩老の恩田頼母に提出して受け入れられる。私利私欲を廃し、日本近代化の前提である洋学（西洋文明）が日本全土に普及することを願った象山であった。辞書の編纂・刊行にかける象山の非常な決意の表現である。前掲、増訂『象山全集』第3巻、526頁。
- 66) 嘉永3年4月2日「望月主水宛書簡」（増訂『象山全集』第3巻、555頁）。
- 67) 村上英俊に関する研究で最も緻密で正鵠を得た研究書は、田中定夫『幕末明治期フランス学の研究』（国書刊行会、1988）である。なお、史料集の意味での名著には滝田貞治著『仏学始祖 村上英俊』（上、中、下巻、1934）がある。また一般的啓蒙書としては富田仁『仏蘭西学のあけぼの』（代々木ハビテーション、1975）などがある。
- 68) 象山門人の子安峻（鐵五郎、大垣藩）に関しては、『日本教育史資料』（巻の7、667頁）、豊田実『日本英学史の研究』（67頁）、『読売新聞百年史』（読売新聞社、1976）『読売新聞の沿革』、「内外新聞人列伝 子安峻」（『新聞研究』20号、1952）、大植四郎編『明治過去帳』（東京美術、1971年発行の新訂初版、530頁）等を参照。
- 69) 柴田昌吉は象山門人ではない。だが、安政5年（1858）、長崎英語伝習所に学び、後に頭取、維新後は外務省権大書記官。『明六雑誌』（上中下巻、岩波文庫、2008）、『読売新聞百年史』（読売新聞社、1976）等を参照。
- 70) 子安峻（鐵五郎、1836—1898、大垣藩）は、友人の柴田昌吉（1842—1901、長崎の西洋医の養子、長崎英語伝習所出身、明治政府の通訳）と、明治3年（1870）に、活版印刷会社「日就社」（初代社長は子安峻）を設立。明治6年（1873）には、悲願の日本最初の英和辞書『英和字彙』を同印刷会社から刊行し英語の普及に貢献した。その日就社は、『英和字彙』を刊行後、本社を東京府芝罘平町1番地（現在の港区虎ノ門1丁目）に移転し、明治7年（1874）に現在の読売新聞を創刊し、日本最初の日本語の日報新聞を発行した。以上の読売新聞社の設立に至る経緯は、読売新聞社編『読売新聞百年史』（昭和51年、1976）刊行を参照。
- 71) 信州松本藩医の子息・小松彰の日本近代化への貢献については、大植四郎編『明治過去帳』（東京美術、昭和46年）、星新一『祖父・小金井良精の記』（河出文庫、2004）、『長野県歴史人物大辞典』（郷土出版社、1989）、『信州人物誌』（信州人物誌刊行会、1969）等を参照。
- 72) 前掲、宮本伸『佐久間象山』、597頁。
- 73) 増訂版『象山全集』第1巻40頁、及び第3巻の嘉永元年（1848）2月の書簡「山寺源太夫宛」には、「二五八の日に演武子弟参り候」とあり、嘉永元年の時点で、象山には、すでに西洋砲術門人が存在し、西洋砲術の演武を実施していた事実が記されている。

また、洋式大砲の鑄造に関しても、本文のようにオランダ原書を基に製造する予定で

あることが述べられている。即ち、象山の西洋砲術門人の入門と門人指導、及び洋式大砲の製造と試演は、黒船来航の5年前の嘉永元年（1848）の初期から始まっていたことが史料面から証明される。

- 74) 飯島忠夫校訂・三井圓二郎編纂「象山先生年譜」（増訂『象山全集』第1巻40頁）にも、「此の年より子弟に大砲打方教授を始む」と、象山は嘉永元年（1848）から西洋砲術教授を開始していたことが明記されている。
- 75) 増訂『象山全集』第1巻42頁。
- 76) 高島・江川の西洋砲術を、象山は次のように批判し、蘭学原書から獲得した自らの西洋砲術を「西洋真伝」と命名している。

高島江川の誤伝を信じ候て真法を心得ず。（中略）只今迄は私原書中より見出し専ら研究候法則は未だ開け不申、鍋島藩杯へも漸先頃教え遣わし、彼藩なども是より開け候半と申程の事に候へば、其他の藩は推して知るべき事に御座候。諸藩よりも此節真伝を慕ひ候ものは往々服従候て致儀業候。

（増訂『象山全集』第3巻、570-571頁、書簡「目付役に贈る」）

- 77) 「補遺一」では、「藩の門人中重なる者を挙げ其小伝を記」された者は、次の19名である（カッコ内の履歴などは筆者記載）。恩師象山との関係を中心にまとめられた彼らの小伝は、彼ら門人たちの様々な人生の軌跡を理解する上で貴重な情報（史料）を提供してくれる。彼らの中には、信州教育界を中心に活躍した著名な教育者や中央の司法省や文部省などで活躍した人物が多くいる。

①白井平左衛門（北越討伐遊撃隊長、能書家）、②村上誠之丞（象山義弟として幕臣村上家を嗣ぎ、幕府蕃書調所勤務）、③蟻川直方（通称は賢之助、象門二虎に次ぐ優秀な門人、蘭学及び西洋砲術を修得し象山の代稽古を担当。藩鉄砲奉行を経て幕府講武所教授並に就任）、④高野秀叟（通称は車之助、郡中横目付・武具奉行・督学等を歴任。著書多数）、⑤金兒伯温（通称は忠兵衛、象山・中俣一平と共に江川塾に入門、江川塾の塾頭となる。その後は象山門人となって西洋砲術を学び、洋式大砲を製造。藩の砲術師範役、門人多し）、⑥長谷川昭道（儒学は佐藤一斎門人、西洋砲術は象山門人、藩政に関して意見を異にし離門）、⑦齋藤友衛（象山の従弟、郡奉行・藩の側役取締の要職を歴任）、⑧菅春風（通称は鉞太郎、象山書院の門人で文学を修得、私塾を開いて後進指導、明治初年に盛岡県判事）、⑨北澤正誠（象山に詩文を学び、中村正直と親交。明治10年外務省書記官、同18年華族女学校学監。著書多く、勝海舟・小松彰・小林虎三郎などと共に恩師象山の著書の出版や顕彰碑の建立に尽力）、⑩渡辺驥（幼少より象山に師事。明治以降には司法省大書記官、元老院議員、貴族院議員）、⑪松木源太郎（通称は源八、象山より文学及び兵学を学ぶ。藩文学教授、長野県文学教授、明治5年の学制発布以後は松代町立海津学校長）、⑫金井清八郎（象山より和漢の学、特に西洋砲術を修得。象山没後は象山の学問を継承し藩子弟を教授、松代学校長）、⑬牧野毅（幼少より和漢の学を象山より学ぶ。開成所教授の川本幸民に蘭学を、海軍操練所で洋算を修得。福地源一郎よりフランス学を学ぶ。維新後は明治5年に陸軍大尉、同23年に陸軍少将）、⑭水上雄風（象山より和漢学を学ぶ。皆神山和合院の修験者、明治4年に松代県文学助教）、⑮久保成（漢籍を象山より学ぶ。明治初年参事、以後は真田家家令）、⑯近藤民之助（漢籍に精通、子弟教育に尽力）、⑰長谷

川三郎兵衛（藩御用人、真田家家令）、⑮河原理助（御側組表組御徒士頭）、⑯岡野彌右門（御預所奉行、御郡奉行）

- 78) 「補遺二」は「黒川良庵と先生」であるが、これは分量的にも独立論文（28頁）といってもよいほど詳細に、また内容的にも関係史料を駆使して丁寧に象山と良庵の学問的な交流関係を描写している。

また、「補遺三」は「先生の交友関係に関する二三の補遺」であるが、その内容は「先生と崑山」「先生と東湖との関係」「先生と川路聖謨との交際について」で、幕末期の重要人物たちと象山の学問・思想を中心とした交流関係を明らかにしている。

そして最初の「北澤正誠『滯京日録』」（北澤家に存在する原本の写本）は、非常に歴史的価値のある史料の紹介である。象山が蟄居謹慎を解かれ、元治元年3月幕命を拝して上京し、將軍徳川家茂・一橋慶喜・山階宮・中川宮など公武の枢要な地位にある人物に面会し、己の思想的信念「東洋道徳・西洋芸術」に基づく政治・外交論を開陳し、その途上、上京後数ヶ月後の同年7月11日、尊皇攘夷の志士たちに斬殺される。側近の門人として恩師象山に随行していた北澤正誠は、上洛から他界に至るまでの象山の行動を詳細に記録していた。それが『滯京日録』である。この北澤の遺した史料によって、断片的であった象山の上京後の行動の全容が解明できる貴重な歴史的史料といえる。

- 79) 増訂『象山全集』第3巻の所収「中俣一平宛書簡」、516-520頁。
80) 例えば大平喜間多『佐久間象山』の巻末年表の「嘉永三年」の項に「二月、松代城南虫歌山麓に於いて砲術を演ず」「深川藩邸に於て砲術を教授す」と記されており、従来この説が一般化している。だが、増訂『象山全集』第1巻所収の三井圓二郎編纂、飯島忠夫校訂『佐久間象山先生年譜』では「嘉永元年」の項に「此の年より子弟に大砲打方教授を始む」と根拠となる史料を付して象山の西洋砲術教授が、黒船来航の5年も前の「嘉永元年」（1848）の開始であることを記している。

また、この年には「私大砲鑄立之向申付候（増訂『象山全集』第3巻所収の嘉永元年（1848）10月29日付の藩老宛書簡、456頁）」と、藩命を受けて大砲数門を鑄造して試演をしている（増訂『象山全集』第3巻所収の「中俣一平宛書簡」、516-520頁）。さらに翌年の嘉永2年に入ると、「大砲試放私方いつにても宜しく御座候（増訂『象山全集』第3巻所収の嘉永2年4月15日付の「山寺源大夫宛書簡」、49頁）」「子弟を集め候て大銃の打方など教授罷在候（増訂『象山全集』第3巻所収の嘉永2年5月13日付の「川路聖謨宛書簡」、511頁）」との史料があり、これらによって象山の西洋砲術の教授活動が嘉永2年に本格的に始動したことを確認することができる。

38、39歳と不惑直前の象山自身にとって、当初は全く予期せぬことであつたらうが、嘉永元年、同2年は、洋学者、とりわけ西洋砲術師範として、象山の名が天下に轟く起点となった画期的な年であつたといえる。

- 81) 一覧表の右段は増訂『象山全集』第3巻（517-520頁）。嘉永2年5月28日「中俣一平宛書簡」。
82) 一覧表の左段は「宮本伸『佐久間象山』所収の「及門録」第1部の冒頭（同書598頁）」である。
83) 増訂『象山全集』第3巻所収「^{いしがや}生萱村大砲試演点放人員次第書」（622-625頁）。
84) 増訂『象山全集』第3巻、581頁。
85) 増訂『象山全集』第3巻、598-599頁。
86) 増訂『象山全集』第3巻、嘉永3年7月26日書簡「母に上る」（同書、582-583頁）。
87) 増訂『象山全集』第3巻、嘉永3年7月26日書簡「母に上る」（同書、582-583頁）。

- 88) 中津藩と佐久間象山との関係については合田倉吉『福翁自伝』（吉川弘文館、人物叢書、1964）の「藩士たちの洋学教育」（86—87頁）に詳細が、また仲人の島津文三郎父子や福沢の慶應義塾の支援者であった岡見彦三（1819—1862、江戸定府の中津藩上級藩士、頌栄女子学院の創立者の岡見清致は彦三の甥）が象山門人であったことは、同『福沢諭吉』（112頁）を参照。なお、福沢自身も自分の結婚について晩年の『福翁自伝』で次のように語っている。

ソレカラ私方の家事家風を語りましょう。文久元年旧同藩士（象山門人の島津文三郎、筆者 註）の媒酌をもって同藩士族江戸定府土岐太郎八（ときたろはち）の次女を娶り、これが今の老婆です。結婚の時私は二十八歳、妻は十七歳、藩制の身分を申せば妻の方は上流士族、私は小士族。少し不釣合のようにあるが、血統は兩人共すこぶる宜しく、住吉はイザ知らず、凡そ五世以降双方の家に遺伝病もなければ忌むべき病に罹りたる先人もなし。

（『福翁自伝』岩波文庫版、281—282頁）

- 89) 福沢夫人の父親である土岐太郎八（ときたろはち、中津藩上級藩士で江戸定府）も象山の門人だったことは、増訂『象山全集』第5巻所収、文久元年（1861）12月1日付の門人島津文三郎宛書簡に、中津藩の象山門人たちの近況報告がなされており、その中に象山門人として岡見彦三・奥平犀藏などと共に土岐太郎八の名前が記されていることで確認できる。それ故、象山門人の島津父子や夫人の父親である土岐太郎八、甲斐織衛、奥平犀藏など、象山門人たちに囲まれた福沢にとって、決して象山は無縁な存在ではなかった。それ故に福沢は、維新後、象山の遺児・恪二郎を慶應義塾に受け入れたものと思われる。
- 90) 象山門人の「岡見彦三」の略歴に関しては、『慶應義塾史事典』（慶應義塾刊、2008）、631—632頁を参照。なお「及門録」の記載では「第63番」で嫡男の「岡見文三郎」（記載順は第62番）と同時入門であった。特に文三郎の努力と能力とは塾内でも際だって優秀であり、象山は、彼に「西洋砲術」だけではなく、「西洋兵学」（『隊列法令』）をも教授し、ついに嘉永6年（1853）4月には「西洋三兵法術真傳免許状」（三兵法術とは、「歩兵法」「騎兵法」「砲兵法」）を授与するに至った。
- 91) 象山門人の「甲斐織衛」（理兵衛）に関しては、丸山信著『福沢諭吉門下』（日外アソシエーツ、1995、21頁）を参照。神戸商業講習所は、兵庫県と福沢諭吉の慶應義塾により、神戸区（現在の神戸市）に設立された。国内の商業講習所としては、明治8年（1875）、東京に設立された（東京）商法講習所（旧制東京商科大学、現在の一橋大学の前身）に続き、明治19年（1886）、2番目に設立された商業講習所（商業教育機関、旧制大阪商科大学、現在の大阪市立大学の前身となったが現在は兵庫県立商業高校）。
- 92) 小幡篤次郎は中津藩家老の次男。慶應2年（1866）から慶應4年（1868、明治元年）まで、多忙な福沢に代わり慶應義塾の塾長を務める。その後、幕府開成所に招かれ弟・甚三郎と共に洋学助教となる。また維新後、東京師範学校の中学師範科（旧制中学校や師範学校など中等学校の教員養成科）の創立に参画した。明治12年（1879）に東京学士会院会員、さらに日本郵船役員も兼務。勲四等瑞宝章を受賞。明治23年（1890）9月には学識者として最初の貴族院議員。前年の明治22年10月には病床の小泉信吉に代わって慶應義塾の塾長代理に就任。明治23年3月には再度、慶應義塾長となる。『学問のすゝめ』〔初編〕を福沢と共に著して以来（明治5年2月、1872）、小幡こそは、福沢を

世に出し彼の活動を支え続けた最大の恩人であり、慶應義塾の発展の最大の功労者であったとみてよい。

- 93) 例えば渡辺驥(すすむ、1829—1890)。彼は「幼にして佐久間象山の門に入りて東西の学を修む」(『松代町史』(下巻、638頁)と記されている。維新後は司法省に入り、以後、明治5年5月には司法少丞に進んで大検事を兼ね、従五位に叙せられる。同8年8月には司法省第1局長、同10年1月には司法省大書記官、同12年11月には太政官大書記官、同13年2月には勅任検事となり大審院詰に。尋て元老院議員を兼ね従四位。そして、ついに同14年10月には大審院検事長(現在の最高検察庁長官)となる。同15年2月勲三等旭日中綬賞。同19年1月元老院議員、同20年3月勅任官一等、同23年貴族院議員、錦鶏祇候。(『信濃名士傳』(初編、松下軍次、国文社、明治27年)、179—187頁)、その他を参照。このように渡辺の司法界トップにまで上り詰めた立身出世の影響を受けて旧松代藩から司法省に出仕する者が多かった。
- 94) 全国各藩から象山塾への入門者数は重複記載を除いて421名で、中津藩その他の全国50余藩から入門していたことは、坂本保富「最新版『象山門人帳史料』の提示—象山門人史料の比較研究(V)—」(平成国際大学『平成法政研究』第19巻第2号、2015)に詳細に分析結果をまとめている。
- 95) 毛筆書写版史料である京大版と信教版の「及門録」には、「墨色」の名簿の合間に「朱色」で何か所にも門人名その他の事柄が加筆され、また「墨色」で削除されている。この点に関する確認は筆者の下記の別稿で確認されたい。
- ①「『象山門人の確定に関する基本史料の検討(Ⅰ)—京都大学附属図書館所蔵『及門録』の内容と問題点—」(信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』(2013年3月)
- ②「『象山門人の確定に関する基本史料の検討(Ⅱ)—信濃教育博物館所蔵『及門録』の内容と史料の意義—」(信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』(2013年3月)
- ※筆者は、共に毛筆写本史料である両史料を丹念に解読して分析した。その中ででのファインディングスの一つは、両方の『及門録』とも筆跡の異なる複数の人物による書写を一冊に合本した史料であること、また『墨書』の間に「朱色」で後から門人名その他の内容が何か所も追加記入され、これによって全体の門人数も増加された事実を確認することができることである。
- 96) 判断基準とした研究成果の根拠—曾根信篤(金三郎)及び彼の側近の門人・弘孝藏(土佐藩)の『門人録』については、「注6」「注7」の拙稿、及び坂本保富著『幕末洋学教育史研究』(高知市民図書館出版、2004)を参照。
- 97) 藩士教育の専門職(儒学者)である「御城付月並講釈助」とは、「毎月二回城内に経を講じ旁ら自宅に於て講書並びに武芸の師範をなす」(増訂『象山全集』第1巻、16頁)。
- 98) 象山の上洛については、松代藩の京師警備の一員として京都にいた門人の北澤正誠は、元治元年7月11日、恩師象山が洛中で白昼に斬殺されると、現場の木屋町に馳せ参じ、惨死状況の把握と関係者への連絡に追われる。北澤が最も心配したのは、象山の著書や文章などの遺品が、藩当局により破棄処分されることであった。それ故、北澤は、「蟻川(賢之助)ト謀リ、先生ノ著書文章ヲ取りテ之ヲ一筐ニ盛リ、而シテ神戸奉行勝君ノ許ニ贈リ保存センコトヲコフ。ソノ散佚ヲ慮ル也。」(北澤正誠「滞京日録」、宮本伸『佐久間象山』の「増訂版」所収、同書845頁)。それは、象山薨れて2日後の元治元年7月

13日のことであった。

なお、象山の遺品は、江戸、信州松代、京都の3カ所に分散しており、蔵書家であった象山であるが故に相当数の書籍、文書、書画があったと思われる。だが、北澤が急ぎ蟻川と取り集めて勝海舟に届けたのは、遺品の総量から見れば僅かであったと思われる。特に物史料や書画骨董、和書や蘭書をはじめとする多数の原書・翻訳書、執筆草稿、等々はある程度運べたが、例えば本稿が問題としている「西洋砲術繰練出座帳」（和紙を綴じて冊子にしたもの）などの小物は運べなかった公算が強い。象山斬殺の3日後（7月14日）には、信州松代の佐久間家は家屋敷を藩に明け渡しとなった。小物類は廃棄された可能性が高い（松代塾居中の住居は家老望月主水の別邸京都の寓居の借家）。

99) 「適塾」門下生に関する調査研究の成果は、大阪大学適塾記念センター機関誌『適塾』に掲載。梅溪昇・芝哲夫『よみがえる適塾 適塾記念会五〇年のあゆみ』（大阪大学出版会、2002）、福沢諭吉の慶應義塾の場合は、「慶應義塾大学福沢諭吉研究センター」が、「福澤および義塾の歴史に関する資料の収集・整理・保存や、福澤門下生などの義塾出身者についての調査研究」を実施し、その成果を『福沢研究センター通信』及び福沢に関する論文集『近代日本研究』に公表している。

100) 象山は、孟子の「三楽説」に倣って愛弟子の吉田松陰の海外密航事件に連座して投獄されたとき、彼が獄中で書いたのが『省讐録』である。そこには、下記のような内容の「五楽説」が書かれていた。この人生訓が、宮本自身の生き方の底流に有ったものと推察される。彼もまた、世俗的な立身出世の価値よりも、自身に忠実に生きて充実した幸せの時間を生きられる学究的な人生に魅せられたのかもしれない。

君子に五楽あり。而して富貴は与からず。一門礼儀を知り骨肉罅隙（きんげき：隙間の意）なきは、一の楽なり。取予苟もせず、廉潔自ら養ひ、内に妻孥（さいど：妻子や家族）に愧（は）じず、外には衆民に作（は）じざるは、二の楽なり。聖学（儒学）を講明にして、心に大道を知り、時に随ひ義に安じて、陰に處（お）ること夷の如きは、三楽なり。西人が理屈を啓きし後に生まれて、古の聖賢が未だ嘗て識らざりし所の理を知るは、四の楽なり。東洋の道德と、西洋の芸術と、精粗遺（のこ）さず、表裏兼ね該ね、困りて以て民物に沢（たく）し、国恩に報ずるは、五の楽なり。

（岩波文庫版『省讐録』21頁より引用）